資料 6-1

2020 年 4 月 2 日

内閣府「公益法人のガバナンスの更なる強化等に関する有識者会議」における当楽団の意見

公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団
理事長 平井俊邦

Ⅰ はじめに

公益法人日本フィルハーモニー交響楽団は、「交響管弦楽の演奏を中核事業として、芸術文化の普及と振興を図り、わが国の音楽芸術の向上、ならびに国内外の文化の交流に寄与する」ことを定款に定め、文化及び芸術の振興を目的とする公益目的事業を展開している。

オーケストラの収支構造は世界的に見ても、演奏による収入で経費を賄うことができない。日本においては、日本オーケストラ連盟に加盟する 25 団体（正会員）のうち、特定の大きなスポンサーを持つ 3 団体以外は、国庫補助金をはじめ企業法人からの寄付金、協賛金、助成金、また個人からの寄付など、社会の多様なファクターから寄せられる事業外収入により経費を賄っている。

当団は事業費の約 70%を演奏による収入で賄っているが、これは日本のオーケストラの中でも極めて高い比率である。公益事業の遂行に要する経費は、多様な支援者獲得活動によって支えられている。

民間の非営利組織ならではの自発性と、社会との協働の中で、「芸術性の追求」「社会性の拡充」をテーマに掲げ、社会の要請に応えて活動は広域化、多角化している。このような中当団は、公益性を認められ税額控除の適用を受けている。また、我が国の芸術を牽引する存在として芸術面でも文化庁から認められ、芸術創造活動の推進等に対する支援を受けて活動を推進している。にもかかわらず、基本的な財政構造が脆弱なことから、楽団員の人件費が十分とは言えず、またマネジメントスタッフの人員数も十分でない。

多様な支援者により公益活動が支えられる当団は、税金や法人個人の支援に音楽の力で応えていくこと、ならびに、支援者に対する説明責任を積極的に果たすことを自らに課している。経営面での自助努力ももちろん、「市民の財産」芸術の担い手として、芸術と市民に奉仕する高い志なくしては、そもそも楽団の事業は成立しえない。そのため、自ずと規範意識をもって組織を運営していくこととなる。

このような視点から、「想定される基本的な論点（たたき台）」より以下の点について実務的立場の意見を申し上げます。

Ⅱ 「基本的な論点」に対する意見

０.「公益法人のガバナンスのあり方」について

＜意見＞

公益法人のガバナンスのあり方を議論する目的、方向性については、民間非営利団体の自律的、自発的な活動を支援する姿勢がより強化されるものであることを希望する。

とりわけ文化芸術団体においては、社会の現状や要請に応じたイノベーティブな活動が団体の成長や公益性の強化を促進するもので、強い規制が馴染まない。当団をはじめとするオーケストラは「過去の文化芸術資産の演奏団体」というイメージを持たれがちだが、実情はアーティストの創造性を発揮する事業によって、子供や多世代の豊かな心の醸成、現代日本の芸術創造発信、また新進芸術家の育成等に寄与するなど、現代の日本社会から求められる活動を積極的展開し、それにより文化芸術の力を国民に幅広く還元している。

ガバナンスの強化を目的として牽制、監督機能を強化するという視点は、文化芸術団体としての自立性、自発性が損なわれる恐れがあり、強く危惧するものである。

１.「評議員・社員のあり方」について

(ア) 一定規模以上の公益財団法人に、法人と利益相反が生ずるおそれがない「独立評議員」の選任を義務づけること、仮に義務づける場合、その規模、外部性・独立性の基準について、どう考えるか。

＜意見＞

① 「独立評議員」の選任とガバナンス強化との間に関連性、必然性を感じない。

評議員会における監督、牽制の役割がより良く機能するには、外部性、独立性を高めることではなく、各評議員、および評議員会が、日常の事業活動を充分に把握、理解することこそが必要と考える。

当団の評議員は、芸術、経理、マーケティング、経営のエキスパートを擁する、いわば各界の専門家集団である。社会的にも影響力を持つ評議員は、楽団のチェック機能を発揮すると同時に、その深い知見や専門性に基づいた提言を行う。このことが、公益目的事業推進にあたり大きな力となっている。

したがって、そもそも独立した機関である評議員会は、各界の専門性をもって事業を理解、あるいは参与観察することにより監督、監視機関としての役割を果たしており、これ以上の外部性・独立性が必要とは考えられない。

② 評議員会のガバナンス強化には、評議員会が団体の実態を把握できる仕組みこそが必要と思われること。

当団ではガバナンス強化等を目的とし、上述のとおり評議員会に活動、事業についての深い理解を求めるための自発的取組を行っている。

(1) 定められた評議員会のほか、評議員会長をはじめ評議員代表者に対し、理事代表、監事、事務所幹部により構成される、決議機関ではない「役員報告会」を原則隔月開催し、活動を報告している。

(2) 評議員会においては質疑応答の活発化につとめており、厳しい意見、活発な提案が数

多く出されている。
(3) 更に、問題が複雑化された場合は論点を絞った臨時評議員会ないし検討会を開催し、集中質疑を行っている。
これらにより評議員、評議員会が団体の活動を充分に把握し、その結果監督、牽制機能が強化されていると考える。

２.「役員のあり方」について
(ア) 一定規模以上の公益法人に、法人と利益相反が生ずるおそれがない「独立理事」及び「独立監事」の選任を義務づけることについて、どう考えるか。
(イ) 仮に義務づける場合、その規模、外部性・独立性の基準について、どう考えるか。
＜意見＞
①当団のような事業遂行型公益法人においては、その活動の成果は経済的利益ではなく公益性の増進である。事業会社の場合とは根本的に異なり、「投資―収益―再投資―収益」という循環を伴うものではない。経済的基盤の脆弱な財団においては、有償の「独立理事」の存在はガバナンスの効果の面でも有効な策とは考えられない。
② 文化芸術分野全体を見ても、特定の大きなスポンサーをもつわずかな楽団を除き、芸術家の待遇は十分ではない。役員報酬のリソースが限られる中、有償の「独立理事」の選任により、結果として積極的な文化発信活動を推進する理事の数が減じる可能性がある。
③ 独立監事について、当団の監事は弁護士がこの任についている。現行も、またこれまでも、監事はその役割上すでに独立性・外部性を保有しているものと考えている。新たに、独立監事の選任を検討することが、現行の監事制度とどう異なるのか理解が難しく、当団としては制度新設の意義が全く感じられない。

３.「外部監査体制の徹底」について
(イ) 例えば、一定規模以上の補助金等を受給している場合には、上記の基準に達していなくとも外部監査を求めることとするなど、新たな基準が必要か。必要な場合、どのような基準が考えられるか。
＜意見＞
当団は主務官庁である内閣府に年次報告を行っており、これにより充分なチェックを受けていると認識している。また当団は運営補助金を得ておらず、事業に対して受ける補助金、助成金等は、その事業ごとに文化庁および自治体等に事業収支決算書を提出、チェックを受けている。その事業の一部においては、公認会計士又は税理士による会計報告書の提出が義務付けられ対応している。(会計報告書の作成にかかる経費は事業費に計上される)。これらにより、補助金や寄付金の適正な使用について監督されていると考える。
一定以上の規模の法人に新たな基準を設けることは理解できるが、補助金の規模による一律の基準の必要性は感じない。

以上

資料6-2

2020年4月2日

公益財団法人 日本フィルハーモニー交響楽団

財団概要

1. 目的

交響管弦楽の演奏を中核事業として芸術文化の普及と振興を図り、わが国の音楽芸術の向上ならびに国内外の文化交流への寄与

2. 事業内容

演奏会の開催、演奏出演、青少年の指導・育成のための事業ならびに地域の振興に寄与するための事業、芸術の普及および広報活動等

3. 経営目標と活動の柱

「あくなき演奏力の向上」「財政基盤の強化」を経営の目標とし、
〝芸術性の追求〟〝社会性の拡充〟をテーマとして、両者を兼ね備える楽団を目指す。
具体的には以下を活動の４本柱として掲げ、それぞれの柱の有機的な結びつきと拡大を図っている。

(1)オーケストラ・コンサート

〝芸術性の追求〟を楽団のミッションのひとつに掲げ、わが国を牽引する演奏活動を活発に行っている。オーケストラの年間演奏回数は約150回に及ぶ。

(2)エデュケーション・プログラム

大規模アンサンブルの枠にとらわれず、室内楽により子供と音楽との出会いの場を広げ、あらゆる方が音楽をより親しむ環境を作る社会的活動を行っている。

(3)リージョナル・アクティビティ

長年にわたり全国各地で地域との協働を実現し、音楽を通じてコミュニティの活性化と地域文化の発展に寄与している。

(4)被災地に音楽を

東日本大震災の発生から９年が経過し、各地の復興に向けた様々な取り組みが続く中、当楽団は音楽による復興支援活動をこれまでに293回にわたり実施した。

4. 設立

１９５６年6月２２日

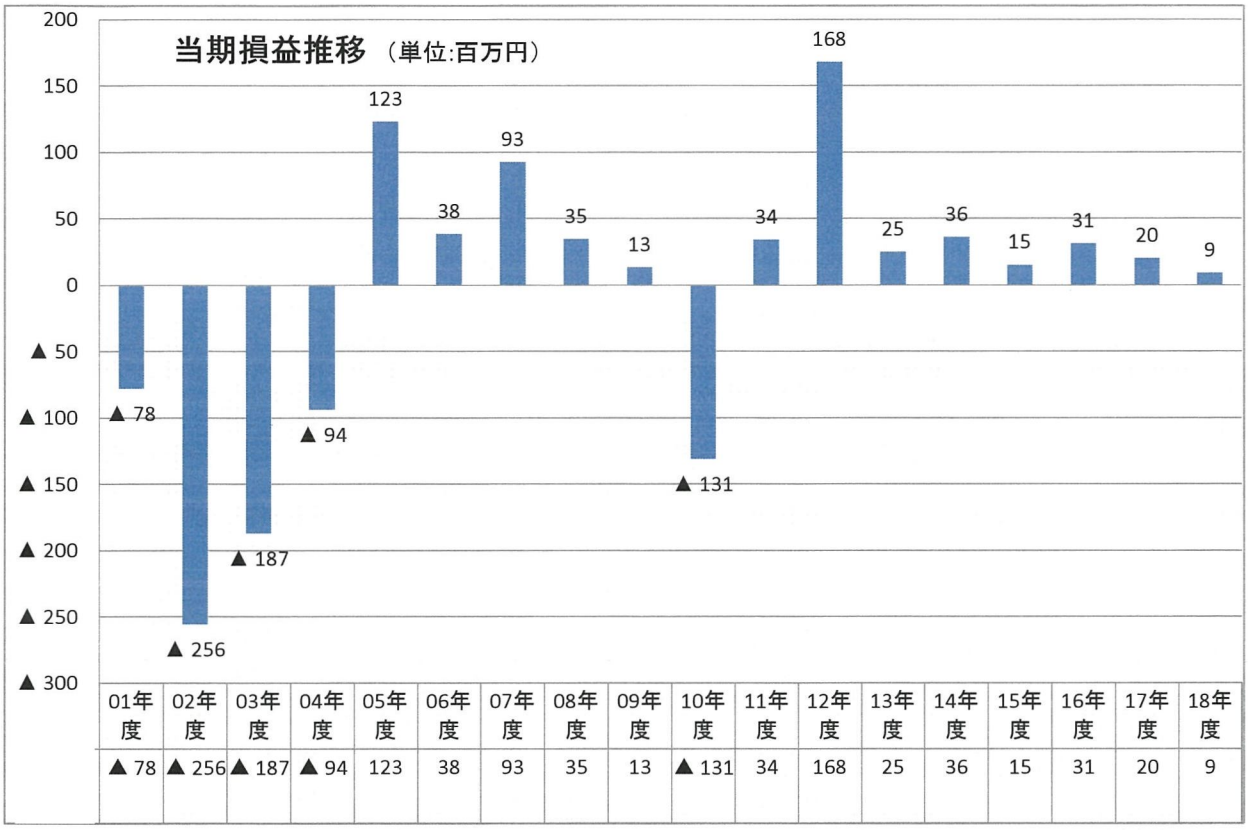
5. 理事、評議員、職員数

理事12名（うち代表理事は理事長を含め4名、常勤理事は理事長を含め3名）
監事1名、評議員21名。楽団員・職員100名（非常勤雇用者を除く）

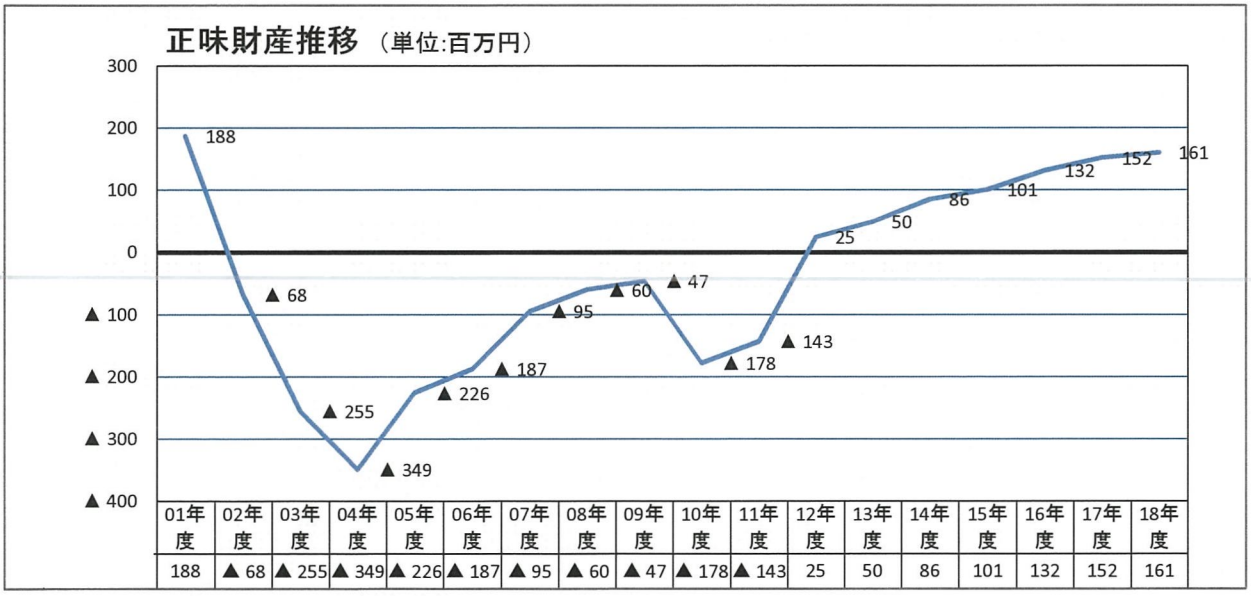
6. 収支構造（2018年度実績）　単位:百万円

事業収入	991
事業支出	1,493
基礎収支	▲501
助成・寄付	548
収支計	47
当期損益	9

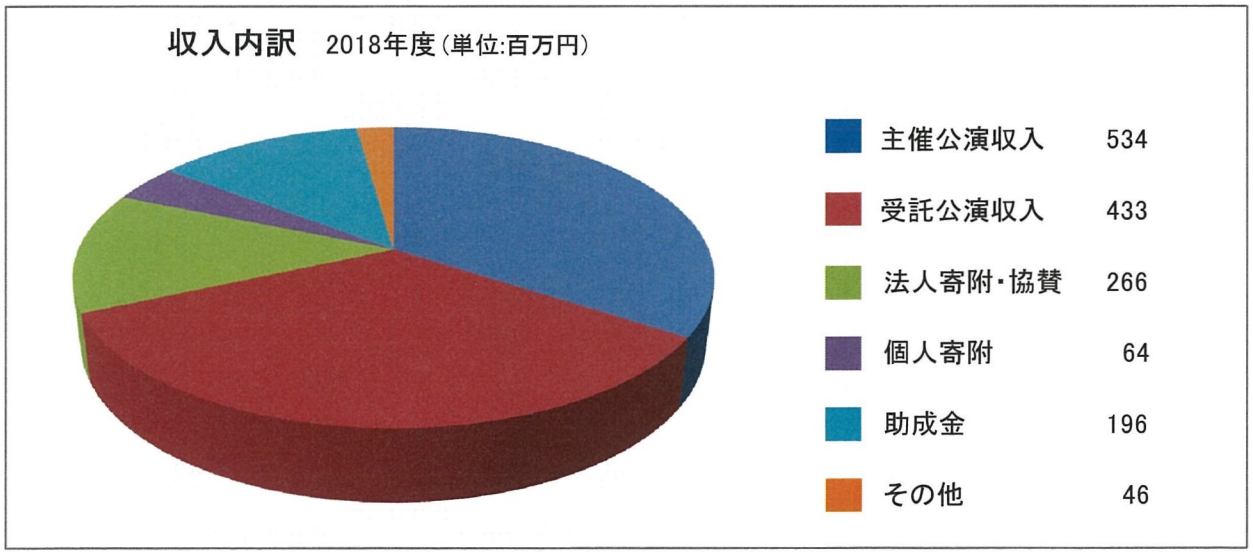
7. 当期損益、正味財産推移、収入内訳(2018年度)



01年度	02年度	03年度	04年度	05年度	06年度	07年度	08年度	09年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度
▲ 78	▲ 256	▲ 187	▲ 94	123	38	93	35	13	▲ 131	34	168	25	36	15	31	20	9



01年度	02年度	03年度	04年度	05年度	06年度	07年度	08年度	09年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度
188	▲ 68	▲ 255	▲ 349	▲ 226	▲ 187	▲ 95	▲ 60	▲ 47	▲ 178	▲ 143	25	50	86	101	132	152	161



資料 6-3

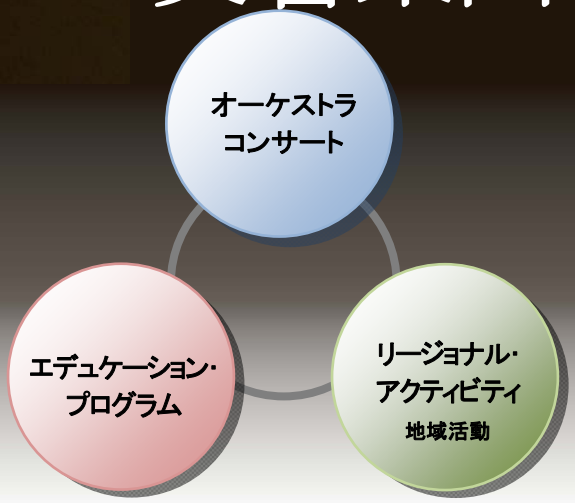
人、音楽、自然――日本フィルのテーマです。
JAPAN
PHILHARMIONIC
ORCHESTA

人に寄り添う、温かさ。

日本フィルハーモニー交響楽団

文化の発信―「芸術性の追求」と「社会性の拡大」

・質の高い音楽をお届ける《オーケストラ･コンサート》
・音楽との出会いを広げる《エデュケーション･プログラム》
・音楽の力で様々なコミュニティを活性化させる
　《リージョナル･アクティビティ》
・《被災地に音楽を》　ほか社会の要請に応える事業・活動



活動の柱①:オーケストラ･コンサート

「芸術性の追求」を楽団のミッションのひとつに掲げ、わが国を牽引する演奏活動を活発に行っています。

首席指揮者ピエタリ・インキネン、桂冠指揮者兼芸術顧問アレクサンドル・ラザレフ、桂冠名誉指揮者小林研一郎、正指揮者山田和樹という、世界的に活躍する充実した指揮者陣を中心に、さらなる演奏力の向上を目指すとともに、国内外の優れた作品を積極的に紹介しています。

2019 年 4 月には 4 か国 10 公演に及ぶ第 6 回ヨーロッパ公演を行いました。フィンランドでは＜フィンランド・日本外交関係樹立 100 周年記念演奏会＞を開催、東京でも記念演奏会を開催するなど、音楽を通した国際交流にも寄与。またウィーン・ムジークフェライン公演を中心にドイツ、英国でも演奏が絶賛され、音楽を通して各国と日本の心の結びつきを強めました。

<DATA>

・年間公演数：約 150 回（主催、共催、受託）。稼動 270 日。
・東京、横浜、さいたま、相模大野で定期演奏会を開催。
・杉並、府中、サントリーホール（共催）でのシリーズ公演開催。
・ヨーロッパ公演 6 回、アメリカ・カナダ、ハワイ、オランダ、

活動の柱②:エデュケーション・プログラム

「オーケストラ」という大規模アンサンブルの枠を超え、子供と音楽との出会いの場を広げ、あらゆる方が音楽をより親しむ環境を作る社会的活動を行っています。

その原点は、1975 年より 45 年間続く「夏休みコンサート」です。以来、音楽鑑賞教室、学校・幼稚園、児童館での室内楽訪問コンサートなど、社会の要請に応えて活動を広げてきました。また、コミュニケーション・ディレクターのマイケル・スペンサーとともに 15 年以上にわたり行っている「創作・体験的ワークショップ」は、音楽を通したコミュニケーションを提案するもので、日本のオーケストラにおける先駆的な取り組みであり、今後とも先進性を活かして広く発信してまいります。

■夏休みコンサート[毎年 7 月下旬〜8 月上旬に首都圏各地で開催]

「やわらかな感性を持つ子どもたちに音楽のもつ力の素晴らしさを届けたい」という願いから、親子コンサートの草分け的存在として 1975 年にスタート。毎年 15 公演を超える規模で 25000 人がご来場いただいています。「知る」「聴く」「楽しむ」要素を取り入れ、クラシック音楽に親しむ「入門編」として愛され続けており、3 世代で楽しんでいただいている光景も多くなりました。

活動の柱③:リージョナル・アクティビティ

長年にわたり全国各地で地域との協働を実現し、音楽を通してコミュニティの活性化と地域文化の発展に寄与してまいりました。

九州全県 10 地域で行う九州公演は 1975 年より 46 年の歴史を刻んでいます。世界的アーティストが出演する質の高い公演ながら、各地の地元ボランティアの皆さんと協働し地域とともに作り上げる公演です。

さらに、1994 年より東京都杉並区と友好提携を結び、「杉並公会堂シリーズ」や「60 歳からの楽器教室」など地域に密着した活動を展開、地域の音楽まちづくりに貢献しています。

山口県宇部市でも地元企業、市、教育委員会と日本フィルが連携し、オーケストラ・コンサートを軸に学校、病院等も訪問するフランチャイズ活動を年 1 回開催しています。

このような活動は、一人ひとりのお客様はもとより、個人、団体、企業、行政等とのコミュニケーションと協働なくしては実現できません。日本フィルの芸術性と社会性の活動は、お客様との「感動を共有」する活動の成果といえます。

<DATA>

・エデュケーション＆リージョナル・アクティビティ：年間活動数約 260 回

・少人数編成での室内楽公演、音楽創作ワークショップ、聴衆や子供との交流など事業内容は多彩、多角化。

・美術や多分野との協働、個人や NPO も含むから多様な団体との協働も多い。楽員のスキルを高める研修も行う。

活動の柱④:被災地に音楽を&「東北の夢プロジェクト」

「被災地に音楽を」音楽による被災地復興支援事業の継続的実施と
「東北の夢プロジェクト」東北地方での新たな文化発信と交流の場づくり

東日本大震災の発生から 9 年が経過しました。各地で復興に向けた様々な取り組みが続く中、日本フィルは音楽による復興支援活動「被災地に音楽を」を 293 回にわたって実施してきました。月日が経つに連れてそれぞれの地域課題がより鮮明になってきている中で、日本フィルは東北地方での新たな文化発信と交流の場作りを目指して、新たに「東北の夢プロジェクト」をスタートしました。

沿岸部の子どもたちと地域の方々を招き、内陸部の人々に沿岸部の文化の素晴らしさや、復興の現状を知ってもらいたい、オーケストラ、バレエの素晴らしさを伝えたい、という想いから、2019 年夏、岩手県民会館でプロジェクトを開始。来場者全員が本物のオーケストラとバレエを味わい、大船渡から参加した赤澤鎧剣舞の子どもたちは堂々とした演舞で来場者の心を掴み、宮古高校の吹奏楽部は大人顔負けの迫力ある演奏で感動を巻き起こしました。会場が一体となる中で、新たな文化の発信と交流の場が誕生しました。

岩手県での経験を基に、プロジェクト 2 年目となる 2020 年には福島県にも開催地を拡大し、岩手県、福島県ならではの新たな文化を作り上げる予定です。

<DATA>

・「被災地に音楽を」: 2011 年 4 月より現在も継続。活動は 293 回を数える（2020 年 3 月現在）

・「被災地におけるリージョナル・アクティビティ」として開始。避難所、仮設住宅、学校等を訪問する少人数編成での室内楽公演から、音楽創作ワークショップ、聴衆や子供との交流など事業内容は多彩、多角化。

・聴衆からの募金を原資としたボランティア活動は、企業、文化庁の支援を得て発展。

社会の要請に応えて―新たなチャレンジ

―あらゆる人々へ、世代へ、地域へ、世界へ

日本フィルはオーケストラ編成での事業を中心に、「三本柱」の活動を継続、そして「被災地に音楽を」の活動は「東北の夢プロジェクト」として発展、楽団の活動の 4 つ目の柱と成長しました。

これに留まらず、さらに新たなチャレンジも続々と行っています。医療現場との協働により 2017 年 4 月に開催した「がん患者さんが歌う第九チャリティーコンサート」は継続事業となり、がん患者、サバイバー、医療関係者の皆様が日本フィルとともに一つの舞台を創り上げることを通じて生活の中に音楽という張り合いを作ります。

また、2018 年 4 月にメディアアーティスト落合陽一を演出に迎えて開催した、聴覚障害のあるなしに関わらずともに楽しむコンサート《耳で聴かない音楽会》は、世界的な広告賞カンヌライオンズでブロンズを受賞するなど、各界から高い評価を受けました。以来「落合陽一×日本フィルハーモニー交響楽団プロジェクト」は、テクノロジーによってコンサートの愉しみをより広げる音楽会を継続開催しています。

社会的取り組みとして、クラウドファンディングを活用したスポンサー募集により「ひとり親のご家庭をコンサートにご招待するプロジェクト」を東京、京都、岩手で実施、のべ 1000 名の親子とクラシックの常に新

たな取り組みを広げました。

社会の要請に応えながら、芸術団体としての社会的使命を果たすべくとめています。

ご支援

オーケストラは、実演芸術事業で収益を上げることが難しい経営構造にあります。

非営利の当団は、国、自治体、企業、団体からご支援を頂き活動しておりますが、さらに社会と一体になった多様な事業を行うためにはより広範なご支援が欠かせません。日本フィルは、芸術性を追求し、音楽の力によってお客様をはじめ社会との絆を強めることで、活動へのご理解とご期待を頂くよう勤め、また、そのご期待に応える活動を進めることで、芸術のよりいっそうの普及を実現してまいります。

ご支援実績（抜粋）

■国（文化庁・舞台芸術振興費補助金）
- 舞台芸術創造活動活性化事業[東京定期演奏会、横浜定期演奏会]
- 劇場・音楽堂等機能強化推進事業[九州公演]
- 国際芸術交流支援事業[ヨーロッパ公演]
- 日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業[落合陽一×日本フィルプロジェクト]

■文化庁委託事業
- 文化芸術による子供育成総合事業（巡回公演事業）［全国学校公演］
- 戦略的芸術文化創造推進事業[被災地へ音楽を/東北の夢プロジェクト]

■東京都
- アーツカウンシル東京「社会支援助成」「未来提案型プロジェクト支援助成」「Tokyo Tokyo FESTIVAL」

■民間財団助成

■法人からのご支援

【法人協賛】コンサート協賛、事業協賛

【法人寄付〔特別会員〕】寄付会員制度　＊税法上の優遇措置を受けることが出来ます。

【法人寄付】楽団の事業、活動を寄付の形で応援頂いております。＊税法上の優遇措置を受けることが出来ます。

■個人からのご支援

【個人寄付〔パトロネージュ〕】寄付会員制度　＊税法上の優遇措置を受けることが出来ます。

【サポーターズクラブ】会員制度

【日本フィルハーモニー協会】寄付会員制度　＊税法上の優遇措置を受けることが出来ます。

【個人寄付】楽団の事業、活動を寄付の形で応援頂いております。＊税法上の優遇措置を受けることが出来ます。

【遺贈】

■クラウドファンディングの活用

公益財団法人　日本フィルハーモニー交響楽団　（楽団創立：1956 年 6 月　法人設立：1985 年 1 月）

《目的(定款第 1 条)》 交響管弦楽の演奏を中核事業として、芸術文化の普及と振興を図り、わが国の音楽芸術の向上、ならびに国内外の文化の交流に寄与することを目的とする。

《沿革》 1956 年 6 月創立、楽団創設の中心となった渡邉曉雄が初代常任指揮者を務め、幅広いレパートリーと斬新な演奏スタイルで、ドイツ・オーストリア系を中心としていた当時の楽壇に新風を吹き込み、大きなセンセーションを巻き起こした。以来我が国を代表する楽団の一つとして 60 年を超える歴史を数える。現在は友好提携を結ぶ杉並区を拠点に、全国・世界で演奏活動を展開。前首席指揮者を務めたロシアの名匠アレクサンドル・ラザレフとは 2011 年には香港芸術節に参加。アジアへとその活動の場を広げ、演奏面でも飛躍的に演奏力が向上したと、各方面より高い評価を得た。2016 年、フィンランドの気鋭ピエタリ・インキネンを首席指揮者に迎え、桂冠指揮者兼芸術顧問アレクサンドル・ラザレフ、桂冠名誉指揮者小林研一郎、正指揮者山田和樹という充実した指揮者陣を中心に、個性的で魅力的な企画を提供している。2019 年には第 6 回ヨーロッパ公演を行う。オーケストラ・コンサートのみならず 1975 年より教育／地域活動にも積極的に展開するなど、常に社会性を意識したオーケストラとして活動している。

資料6-4

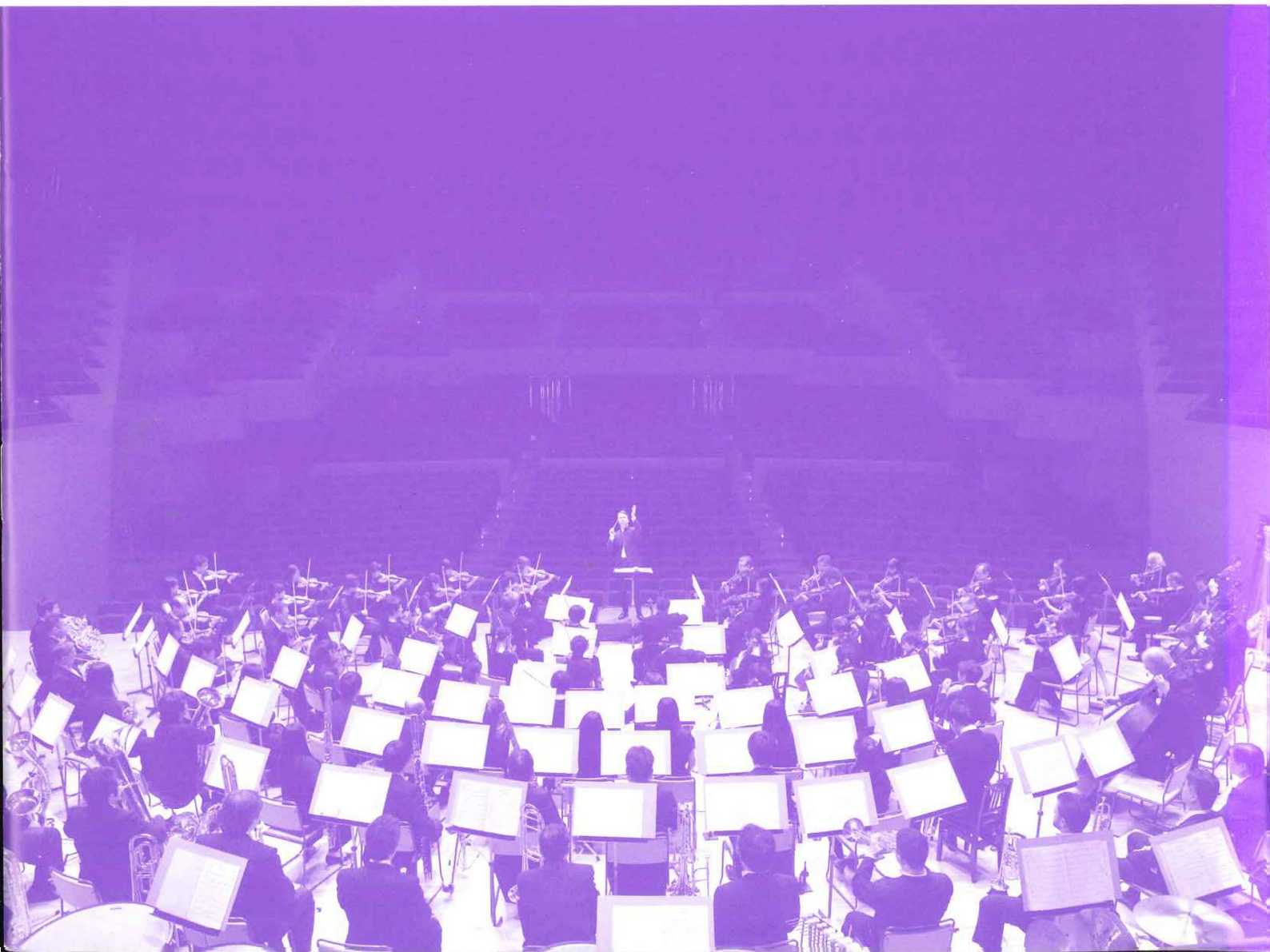
人、音楽、自然 ―― 日本フィルのテーマです。
JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA
―― 創立指揮者 渡邊暁雄 ――

日本フィルハーモニー交響楽団

こんな活動をしています

（2018年度活動報告）

Triptyque
Vol.14



2018年度活動の概要

ご挨拶

2018年5月、日本フィルの東京定期演奏会は第700回の節目を迎えました。2008年より「新たな日本フィル」を導いてきたアレクサンドル・ラザレフがストラヴィンスキー《ペルセフォーヌ》を日本初演しました。この貴重な演奏を楽団史の一つの通過点として刻むことができたことは、これまで日本フィルを支えていただいた多くの皆様のお陰と、深く感謝しております。

オーケストラ公演では、首席指揮者ピエタリ・インキネンとのドイツ・ロマン派作品への深い取り組みをはじめ、個性に充ちた指揮者陣と高い芸術性を持つ演奏会を数多くお届けしました。一方、オーケストラの持つ社会的役割をより鮮明に打ち出し、「芸術性」と「社会性」を兼ね備える楽団として、より一層の成長を目指しています。その活動の原点ともいえる「九州公演」「夏休みコンサート」はそれぞれ44年の歴史を刻み、ほぼ8年間継続している東日本大震災の被災地での活動も、延べ260回を超えています。

2018年度はさらに、新たな被災地支援の展開、海外公演に向けた取り組み、そして新しい次元の社会活動の準備・実施といった「未来への投資」にも大きく時間を割いた年となりました。お陰様で13年ぶりとなる第6回ヨーロッパ公演（2019年4月1日～16日実施）も無事成功しました。他にも室内楽によるベトナム公演、そして初の韓国でのオーケストラ公演を行い、「世界への飛躍」の礎を築くこともできました。

現在、音楽団体に対する社会からの要請は多様さを増しています。様々な要請をしっかりと受け止められる団体として、日本フィルはその専門性をさらに高め、新たな視点での事業、社会との新たな関わり方の創出等、新たな次元での活動にさらに力を入れてまいります。また芸術性と社会性を兼ね備えた団体ならではの、両者の関係性をより緊密にした事業も展開させる必要があります。次年度以降の活動につなげてまいります。

今後とも日本フィルに一層のご支援をお願い申し上げます。

公益財団法人
日本フィルハーモニー交響楽団

理事長　平井俊邦

【事業を振り返る】

(1)芸術性の追求

2016年首席指揮者に就任したピエタリ・インキネンとの、更なる芸術性の向上に向けての取り組みも3年目となりました。インキネンとは若手指揮者ならではのオーケストラとのパートナーシップを重視し、より深い重い音色、透明性のあるより豊かな響きや表現力の獲得を目指し、2017年度までワーグナーの楽劇へ集中し、高い評価を得てきました。2018年度はその集大成を図りながら、ワーグナーのほかシューベルト、メンデルスゾーンといったドイツ・ロマン派の音楽へとレパートリーを拡大。2019年4月のヨーロッパ公演に向けてオーケストラの個性をより明確にすべく活動しました。

オーケストラ・コンサート p4

(2)社会性の拡充

日本フィルはオーケストラ音楽の演奏団体という役割に留まらず、音楽の専門集団として、社会に果たす役割をより広げていくことを目指しています。「人に寄り添う、温かさ」という日本フィルの特徴を生かし、あらゆる人がオーケストラ・コンサートにアクセスしやすくなるよう努めています。

エデュケーション・プログラム、リージョナル・アクティビティを一層活発に幅広く展開し発信していくことで、音楽が社会に対しできることをより強く打ち出し、「音楽を通して心の温もりを体感する」場としても機能していくようにできればと願っています。

2018年度はこれまでの活動をいっそう積極的に行うとともに、オーケストラ・コンサートにおいても、2回目となる「がん患者さんが歌う第九」での医療とのコラボレーションや、新たな事業として「落合陽一×日本フィルプロジェクト」による聴覚障害のある方へ向けてのコンサートの開催、「ひとり親のご家庭へ日本フィルの演奏会をプレゼント」など、社会の多くの方と協働して実施することができました。

Data 2018年度活動回数一覧

	主催	受託(共催含む)	計
オーケストラ公演	84	70	154
室内楽公演 (*「被災地に音楽を」)			254(*38)

【経営を振り返る】

2018年度は「芸術性の追求」「社会性の拡充」をテーマとして事業・活動を活発に行い、また社会性の拡充の点で新たな次元の展開も加わった結果、事業規模は14.9億円となりました。しかしながら、主催公演の一部の売上が不振であったこと、2019年4月のヨーロッパ公演に伴う膨大な準備の影響に加え、長年の懸案であった退職引当金の問題を2018年度および2019年度で決着させることとした結果、最終損益は9百万円となりました。

Data 2018年度経営報告

1.貸借対照表

(2019年3月末現在、単位:千円)

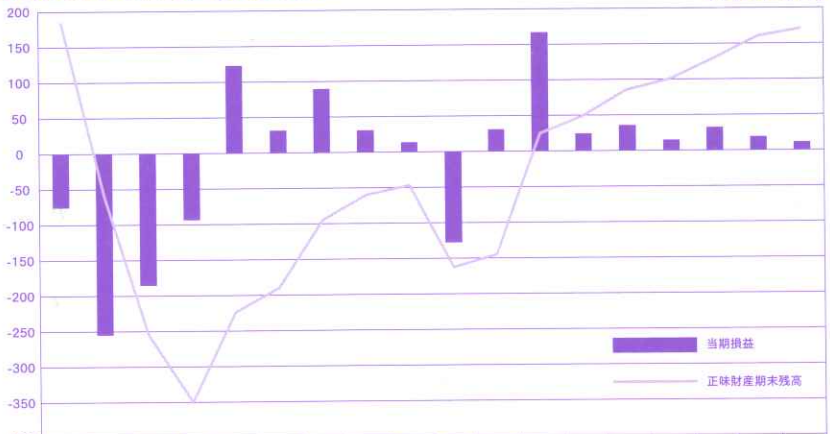
科目	金額
Ⅰ.資産の部	
1.流動資産	331,366
2.固定資産	152,402
資産合計	483,769
Ⅱ.負債の部	
1.流動負債	209,006
2.固定負債	114,526
負債合計	323,532
Ⅲ.正味財産の部	
正味財産合計	160,236
負債及び正味財産合計	483,769

2.正味財産増減計算書

科目	金額
経常収益	1,537,102
経常費用	1,529,863
経常外収益等	▲1,444
当期正味資産増	8,613

3.当期損益/正味財産期末残高

(単位:百万円)



	01年度	02年度	03年度	04年度	05年度	06年度	07年度	08年度	09年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度
当期損益	▲78	▲256	▲187	▲94	123	38	93	35	13	▲131	34	168	25	36	15	31	20	9
正味財産期末残高	188	▲68	▲255	▲349	▲226	▲187	▲95	▲60	▲47	▲178	▲143	25	50	86	101	132	152	160

オーケストラ・コンサート

「あくなき演奏力の向上」と「聴衆の拡大」を目指し、2018年度も様々な公演を行いました。

首席指揮者ピエタリ・インキネンを軸に、桂冠指揮者兼芸術顧問アレクサンドル・ラザレフ、桂冠名誉指揮者小林研一郎、正指揮者山田和樹、ミュージック・パートナー西本智実という国内でも屈指の盤石さを誇る指揮者陣とともに、現代のオーケストラとしての矜持を示す多彩なプログラミングで、芸術的充実の向上を第一義に演奏活動を展開し、「伝統」の遵守と「レパートリーの拡大」を着実に堅持出来たと考えています。

一方、聴衆の拡大は現代のオーケストラにとって大きな課題です。お客様にとっては、演奏曲は必ずしも馴染みのあるものばかりではないでしょう。しかし時間と手間、そして愛情をかけて築き上げた多くの素晴らしい芸術作品を、よい演奏で一人でも多くの方に体験いただくために、その魅力の伝え方にさらなる工夫が求められていることを感じます。

首席指揮者
ピエタリ・インキネン
©堀田 力丸

桂冠指揮者 兼 芸術顧問
アレクサンドル・ラザレフ
©堀田 力丸

桂冠名誉指揮者
小林 研一郎
©山本 倫子

正指揮者
山田 和樹
©堀田 力丸

ミュージック・パートナー
西本 智実
©塩澤 秀樹

【定期演奏会】 p10

《 東京定期演奏会(サントリーホール、各回金・土曜日) 》

演奏活動の根幹となる東京定期演奏会は、第700回記念公演として《ペルセフォーヌ》(演奏会形式)を日本初演、優れた演奏によって日本の聴衆に作品の魅力を紹介できました。他にも首席指揮者ピエタリ・インキネンほか充実した指揮者体制のもとで、芸術性の更なる追求とオーケストラの個性の確立に努めました。

桂冠名誉指揮者小林研一郎と日本を代表する音楽家・チェリストの堤剛とともに威風堂々たる演奏で聴衆の深い感動を集め、正指揮者の山田和樹は、同氏ならではのエスプリの効いた日本＆フランスプログラミングと演奏で聴衆の耳を刺激しました。また、日本フィルと深い関係を続ける広上淳一が尾高惇忠の意欲作を日本フィル初演、皇后陛下(現上皇后陛下)のご臨席を賜る栄誉を得ることもできました。アレクサンダー・リープライヒの日本フィル初登場は、説得力のあるタクトで今後の展開に期待が集まりました。沼尻竜典の8年ぶりとなった東京定期登場もお客様から大きな話題を集めました。

《 横浜定期演奏会(横浜みなとみらいホール、各回土曜日) 》

盤石の指揮者陣と共に国内外の客演指揮者を招き、バラエティ豊かなアーティストとともに、親しまれた作品を中心に、一方で知的好奇心をくすぐる隠れた名曲の紹介にも努めました。アジアの若手アーティストを起用する横浜独自企画【輝け!アジアの星☆第11弾】にシンガポール出身のダレル・アン(指揮)を迎えたことをはじめ、20-30代のアーティストを積極的に登用し、彼らそれぞれが存分に才能を披露し、お客様と共有する機会をご提供できたことは、日本フィルとしても大きな喜びです。今後もお客様の声を大切に、横浜定期ならではの独自性を探ってまいります。

【その他の主催演奏会(首都圏)】

幅広い聴衆育成とクラシック音楽の普及を目指し、多彩な公演事業を行いました。

小林研一郎との人気企画「コバケン・ワールド」「第九特別演奏会」は、日本フィルの特徴ともいえる公演として好評を博しています。また「名曲コンサート」、「サンデーコンサート」、「特別演奏会」等を軸に、さらなるクラシック音楽の普及に取り組みました。「夏休みコンサート」などエデュケーション分野の取り組みも充実した展開をしました。

【共催公演・受託公演】

ホールとの提携による継続的なコンサートシリーズが定着しています。杉並区および杉並公会堂との共催による「杉並公会堂シリーズ」、「さいたま定期演奏会」、「相模原定期演奏会」、府中市での「どりーむコンサート」シリーズが継続開催されました。またサントリーホールとの共催事業である「とっておきアフタヌーン」も引き続き開催。クラシックの名曲を親しみのあるトークと共にお届けしました。このほか、学校主催による音楽鑑賞会、文化庁主催「文化芸術による子供の育成事業」、企業主催による公演などに出演しました。

【国際的活動（韓国公演、室内楽ベトナム公演）】

11月には、ソウル国際音楽祭およびテグ・コンサートハウス（ワールド・オーケストラ・シリーズ）の招きを受け、楽団初となる韓国公演2公演を行いました（指揮：大植英次）。とりわけソウルでは、国家的組織委員会が主催する大規模音楽祭の10周年、日韓パートナーシップ宣言20周年という節目に招かれる栄誉を得、ラジオ生中継も行われるなど関心を集め、音楽を通した両国の国際親善に寄与できる貴重な機会となりました。→p18

先立つ6月には、日本・ベトナム外交関係樹立45周年の機にベトナムの民間団体の招きで弦楽四重奏が訪問。ダナン、ホイアンでワークショップやミニコンサートを含む交流プログラムを5回実施。クラシック音楽普及半ばのベトナムで、音楽により感性を通じた人々との交流に貢献できました。

Data 2018年度オーケストラ公演の内訳

主催公演	公演数	入場者数（約）
東京定期演奏会	20	28,000
横浜定期演奏会	10	16,000
名曲コンサート	6	10,000
サンデーコンサート	3	3,500
特別演奏会	5	7,000
コバケン・ワールド	4	6,500
その他	3	2,500
夏休みコンサート	17	26,000
「第九」特別演奏会	6	10,000
九州公演	10	9,000
計	**84**	**118,500**

受託公演	公演数
一般公演（共催含む）	41
音楽教室/学校公演	24
海外公演	2
録音	2
放送	1
計	**70**

【音楽を介し社会との多様な関わりを拡げる事業】

2018年度は新たに、「テクノロジーによりあらゆる人々と音楽の愉しみを分かち合う」ことを目指して、落合陽一（メディアアーティスト、筑波大学准教授）とのプロジェクトを開始。室内楽とオーケストラ各1公演を開催しました。聴覚障害のある方とも音楽を楽しみたい、という斬新なコンセプトが高い注目を集め、NHK『おはよう日本』など多数メディアに取り上げられたほか、音楽団体が社会に寄り添う活動の好例として、カンヌライオンズ2019（ブロンズ）、第72回広告電通賞、第11回日本マーケティング大賞、第5回JACEイベントアワードを受賞しました。

また、2017年度に続き「がん患者さんが歌う第九チャリティコンサート」（主催：公益財団法人がん研究会/がん研有明病院 指揮：藤岡幸夫）に開催協力、出演しました。週1回、7か月の準備を経て演奏に臨んだ患者さんと日本フィルが、音楽を通して生の実感と歌う喜びを共有する特別な時間を届けることができ、医療と音楽とのコラボレーションが参加する人々によい成果をもたらすことができました。

演奏会評・演奏会レポート

第700回東京定期演奏会「乾いた」演奏と劇的歌唱

（略）本邦初らしいが、実りはその点に留まらない。本作はオペラとはまるで別物だ。（略）物語性に乏しいのだ。だがまさに、乏しさの豊かさとでも言うべきものを、ラザレフは思い知らせてくれる。たとえば、ペルセフォーヌが冥界の王妃になることを拒む場面。コントラファゴットの低く鋭い「点」が反復する、黒々とした凄さはどうだ。そこに切り込むトランペットも、刃の閃光さながら。瞬間に煌めくイメージに賭けているのであり、これはウェットな「響き」を好む日本の楽壇にあって、大変に貴重であろう。（略）

なお、前半にプロコフィエフの「交響的協奏曲ホ短調」があった。同団ソロ・チェリスト、辻本玲の独奏は、技巧を誇示せず、抒情味を失わないのがいい。

（読売新聞 2018年6月7日より転載 舩木 篤也）

第701回東京定期演奏会

来年のヨーロッパ公演、さらには同オーケストラとの2年間の契約延長も決まったインキネンとの〝意思疎通〟は上々のようだ。（略）メンデルスゾーン「交響曲第4番《イタリア》」でも、音響バランスや音色など、例えばアレクサンドル・ラザレフとは対照的ともいえる抑制のきいた瀟洒な表現美が全体に漂う。特徴的な木管の音色や装飾音型、ホルンとトランペットが醸し出す得も言われぬ和声的フレーズ、要となる弦楽器の質感と技量の確かさなど、日本フィルの潜在的な資質の可能性が見事に引き出された感が強い。

（音楽の友 2018年8月号より転載 齋藤 弘美）

【室内楽】

日本フィルは室内楽でも、多岐にわたる主催者から機会をいただき、積極的に事業展開しています。企業からの継続的なご依頼も多く、2018年度も武州ガス、ヤクルト本社、フコク生命、ネイチャーズウェイ、パイオニア、協和発酵キリン、あおぞら銀行、そごう西武等から地域貢献活動としての演奏機会をいただきました。また地域団体や市民の活動（「市民コンサート」）、自治体、ホール、民間の文化的拠点での活動など、室内楽を通して多くの方々とつながっています。

エデュケーション・プログラム

音楽の力を社会のさまざまな場面で広く発揮することが求められている今日、オーケストラのエデュケーション・プログラムの重要性はますます大きくなっています。日本フィルは他に先んじて社会への取り組みを推進しており、活動の領域は広がり続けています。

主な取り組み

【 オーケストラによるエデュケーション 】

◆夏休みコンサート

多くの子どもたちが、夏休みに家族とともに身近なホールでオーケストラの演奏にふれ、その情操を高めていくことを願い続けてきた夏休みコンサートは、今年44年目を迎えました。

このコンサートは、三世代で楽しめるよう内容や演出にも工夫を凝らして聴衆層の拡大、特に未来のクラシック音楽ファンの育成に努めています。2018年度は一都三県での17公演に3年目を迎えた京都での1公演を加えた、計18回の主催公演、そして依頼公演としても1回出演(杉並公会堂)しました。

コンサートは3部構成からなり、第1部はオーケストラの魅力を堪能できるプログラム、第2部は大人気のバレエ、チャイコフスキー《くるみ割り人形》(夏休みコンサート2018版)、第3部では恒例の「みんなでうたおう」でお客様と舞台が一体となりました。開演前には「ウェルカム・コンサート」、終演後は「懇談会」や「サイン会」を行い、今年も子どもたちとアーティストが直接交流する、微笑ましい出会いがうまれました。そして会場ロビーでは、11年目となった絵画コンテストの入賞作品を展示、表彰式も開催。今年は1112点の応募がありました。

第2部よりバレエ《くるみ割り人形》(スターダンサーズ・バレエ団)

第3部より「みんなでうたおう」(江原 陽子)

開演前のウェルカム・コンサート

◆春休みオーケストラ探検

フランチャイズホール・杉並公会堂との共催で継続開催している《春休みオーケストラ体験(エデュケーション・フェスティバルin杉並)》は、2018年度もコンサートホールを軸とした総合的な教育プログラムとして成功裏に終えることができました。「冒険」を共通のテーマにして、午前・午後2回のオーケストラ公演、音楽大学生等の協力による楽器体験、女子美術大学の協力で学生による「魔法の指揮棒」工作ワークショップ、サプライズライブなどロビーでの楽員とのふれあい、オーケストラの楽器のソロが楽しめるリレーコンサート、大声大会、公会堂スタッフによるホール探検やスタンプラリーなど多彩な催しを全館で開催。日本フィル唯一の0歳児から入場できる主催公演として、今年も地元杉並区を中心に、子どもと家族にクラシックとの出会いを提供できました。

より多くの子供と家族にクラシック音楽の楽しさを広げる機会としてより内容の充実を図り、日本フィルのエデュケーション・プログラムのさらなる飛躍の礎としてゆけるよう取り組みます。

楽器体験

さあ、冒険の旅に出かけよう!

楽員によるサプライズライブ

【ワークショップ活動の広がり】

コミュニケーション・ディレクターとして先進的なエデュケーション・プログラムの先頭に立ち、同時に日本フィルでは指南役を務めているマイケル・スペンサーとは女子美術大学でのワークショップ演習、森美術館でのワークショップ、アークヒルズ・ミュージック・ウィークでのプログラムなど、室内楽の分野で多くの活動を行いました。新たな取り組みとして、西武百貨店の主催によるワークショップと対話型室内楽コンサート、アートミーツケア学会でのプレゼンテーションの機会などを通じて、日本フィルのプログラムを広く社会にアピールしました。また、オーケストラ・コンサートとの連携で第700回東京定期演奏会《ペルセフォーヌ》のプレイベントとしてのワークショップ、「被災地に音楽を」(東日本大震災の被災地支援活動)の一環としても岩手県の大船渡市、宮古市でワークショップを開催。日本フィルの多彩な活動分野で、取り組みを拡大しています。

また、楽員のファシリテーション能力の向上にも力を注ぎ、楽員の企画・実施による新しいプログラムについても注目すべき成果が上がっており、この蓄積が、日本フィルの新たなステップへの着実な布石となってきています。

中でも特筆すべきは楽員のプログラム構成により、外交関係樹立45周年に当たるベトナム国内5か所でワークショップ、アウトリーチを含む一連のイベントを行い、大きな反響を得たことです。2019年度初頭のヨーロッパ公演の一環で実施したフィンランドでのワークショップも含めて、日本フィルの教育プログラムの広がりとともに、音楽による海外との文化交流の大きな可能性を示したといえます。

アートミーツケア学会でのマイケル・スペンサーによるプレゼンテーション

女子美術大学でのワークショップ演習

ベトナム・ダナンでの楽員によるワークショップ

【音楽の面白さを届け、新たな楽しみ方を提案しています】

音楽の楽しみ方を分かりやすく伝えるトークイベント(東京定期演奏会でのプレトーク、横浜定期演奏会でのオーケストラガイド、シーズン・ファイナル・パーティ等)、コンサートホールを案内する「たんけん隊」を継続開催しています。また音楽の新たな楽しみ方を提案する取り組みとして、早朝の六本木ヒルズで本格的な室内楽とラジオ体操を演奏する六本木アートナイト「クラシックなラジオ体操」や、熊谷圏オーガニックフェス(野外コンサート)などに出演しました。

Data 2018年度エデュケーション・プログラム、その他の内訳

夏休みコンサート(主催)	18回	インターンシップ	参加 15名
オーケストラ探検	2回	プレイベント	41回
学校・施設訪問コンサート	57回	アフターイベント(楽員との懇談等)	13回
オーケストラたんけん隊	17回	プレトーク(オーケストラ・ガイド等)	33回
公開リハーサル	5回	ワークショップ	29回
職場訪問	7回	クリニック	7回
60歳からの楽器教室	198回		

リージョナル・アクティビティ

日本フィルは音楽の素晴らしさ、面白さをより多くの方に届け、地域全体の活性化に貢献する「リージョナル・アクティビティ」を活動の柱のひとつに据え、オーケストラや室内楽等によるきめ細やかな活動を行っています。地域社会への貢献は、オーケストラにとって今後ますます大きなテーマとなっていくでしょう。

主な取り組み

【 杉並区での活動 】

杉並においては、日本フィルの活動の3本柱すべてにおいて、区・公会堂との連携を深めてきました。1994年に結んだ東京都杉並区との連携、また2006年開館の杉並公会堂との提携による活動が核となっています。

開館から13年を数えるフランチャイズ・ホール杉並公会堂とは、これまでどおり「杉並公会堂シリーズ」ならびに「夏休みコンサート(受託)」を実施しました。

またホールとの共催で《春休みオーケストラ探検(エデュケーション・フェスティバルin杉並)》も継続的に開催し、コンサートホールを軸とした総合的な教育プログラムとして今年も成功裏に終えることができました。今後も杉並区民にクラシックの裾野を広げ、楽団の魅力を伝える機会と位置づけ、より一層の充実を図ってまいります。

区との活動では、今年度も杉並区在住の75歳以上の方を対象とした「杉並区敬老会」を受託し、アンサンブル公演を行いました。また、杉並区の交流自治体である南伊豆町に初訪問し、町内2か所で室内楽コンサートを開催。多くの町民が来訪し、地域活性化にクラシック音楽が有効であることを示しました。他にも小中学校や区内施設での出張音楽教室・出張コンサート、区民へのリハーサルの公開、区役所ロビーコンサートなど、区との友好提携に基づく事業を推進しました。

区後援の「日本フィルのメンバーによる60歳からの楽器教室」も16年目を迎え、ヴァイオリン・チェロ・フルート・クラリネットを対象に、高齢者の皆さんが楽しく学んでいます。

2017年度以降、「被災地に音楽を」に杉並区「ふるさと納税」(寄付金)を活用し応援いただくメニューが加わり、寄付金を活用しながら杉並区の交流自治体である福島県南相馬市を訪問しました。

また杉並区には、音楽による街づくりを目指す民間団体「クラシック音楽を楽しむ街・荻窪」が主催し区が後援する「荻窪音楽祭」が長年開催を続け、日本フィルも制作・出演協力をしています。第31回となる2018年も音楽祭には「被災地に音楽を」で支援を続けている南相馬・原町第一中学校の吹奏楽部を「みらい夢コンサート」に迎え杉並区の中学生とともに日本フィルのメンバーも出演、音楽を通した地域交流と相互支援の橋渡しとなりました。また、子どもたちと日本フィル楽員が室内楽で共演する「フレッシュジュニア・コンサート」を開催しました。

杉並区ふるさと納税贈呈(2018年4月16日)

年4回行われる杉並区役所ロビーコンサート

Data 杉並区との友好提携に基づく活動回数

杉並公会堂シリーズ [杉並区との友好提携による公演]*	4
区役所ロビーコンサート	4
公開リハーサル	4
出張音楽教室	10
公募出張コンサート	4
区施設出張コンサート	11
小中学校音楽鑑賞教室(オーケストラ)	7
区内ホール等のリハーサル使用	73

*夏休みコンサート含む

Data その他杉並区での活動回数

春休みオーケストラ探検	2
杉並公会堂シリーズ [杉並公会堂(京王設備サービス)・日本フィル共催公演]	3
60歳からの楽器教室	198

【九州公演】

自主参加の市民による実行委員会がボランティアで、日本フィルとともに公演の制作・運営を行うという、他に類を見ない運営スタイルで継続してきた九州公演。第44回公演となる2018年度は、文化庁「劇場・音楽堂等活性化事業(劇場・音楽堂等間ネットワーク支援構築事業)」として、例年通り九州全県で10公演開催しました。

指揮者には3回目の九州ツアー出演となる藤岡幸夫氏を迎えました。創立指揮者渡邉曉雄の最後の愛弟子でもあった藤岡氏は、日本フィルにおける九州ツアーの意義を深く理解し強くシンパシーを感じており、各地で演奏はもちろんのこと地域の方々との交流にも非常に熱心に取り組んでいただきました。ソリストにはチェロの横坂源、ピアノの萩原麻未、古賀大路といった注目の若手を迎えたことで、九州内外からお客様が来場し、各会場ではサイン会も行われ、大いに賑わいました。

九州 大分公演ウェルカムコンサート

しかし、他の楽団の人気公演が近接して実施されたこともあり、チケット販売枚数は苦戦を強いられました。地域ごとに課題も多く、現代の実情に合わせた形にし、若年代を交えて"市民とともに歩む"日本フィルの財産としてますます発展させるため、日本フィルが地域課題に実行委員とともに取り組む仕組みについて、今年度も議論を重ねる必要があります。

若手楽員が積極的にプレコンサートを行ったり、交流会に参加する姿が多く見られたことは、人々に寄り添う日本フィルの在り方を示す意味で大きな喜びでした。

九州 大分公演

【宇部公演】

11回目となった「宇部興産チャリティコンサート」。毎年恒例の宇部興産株式会社の地域貢献活動として着実に定着しています。今回は満を持して日本フィルの首席指揮者ピエタリ・インキネンが指揮を担当。ソリストには国内外で活躍し、近年ではTV等の各種メディアにも登場している木嶋真優を迎えました。インキネンと木嶋とは、世界的なヴァイオリン教師であり名伯楽であるザハール・ブロン門下同士ということもあり、素晴らしい音楽的コミュニケーションが実現しました。チケットも早々に完売し、充実した楽興の時を宇部の地にもたらすことが出来ました。

今年度もオーケストラ・コンサートはもちろんのこと、病院への訪問コンサート、地元FM局による公演の市内生中継等の実施など、幅広い事業を継続的に行いました。音楽を通した地域貢献活動として日本フィルの活動の柱がすべて発揮される本公演を、今後も引き続き企業・自治体と一体となって積極的に展開してまいります。

【京都公演】

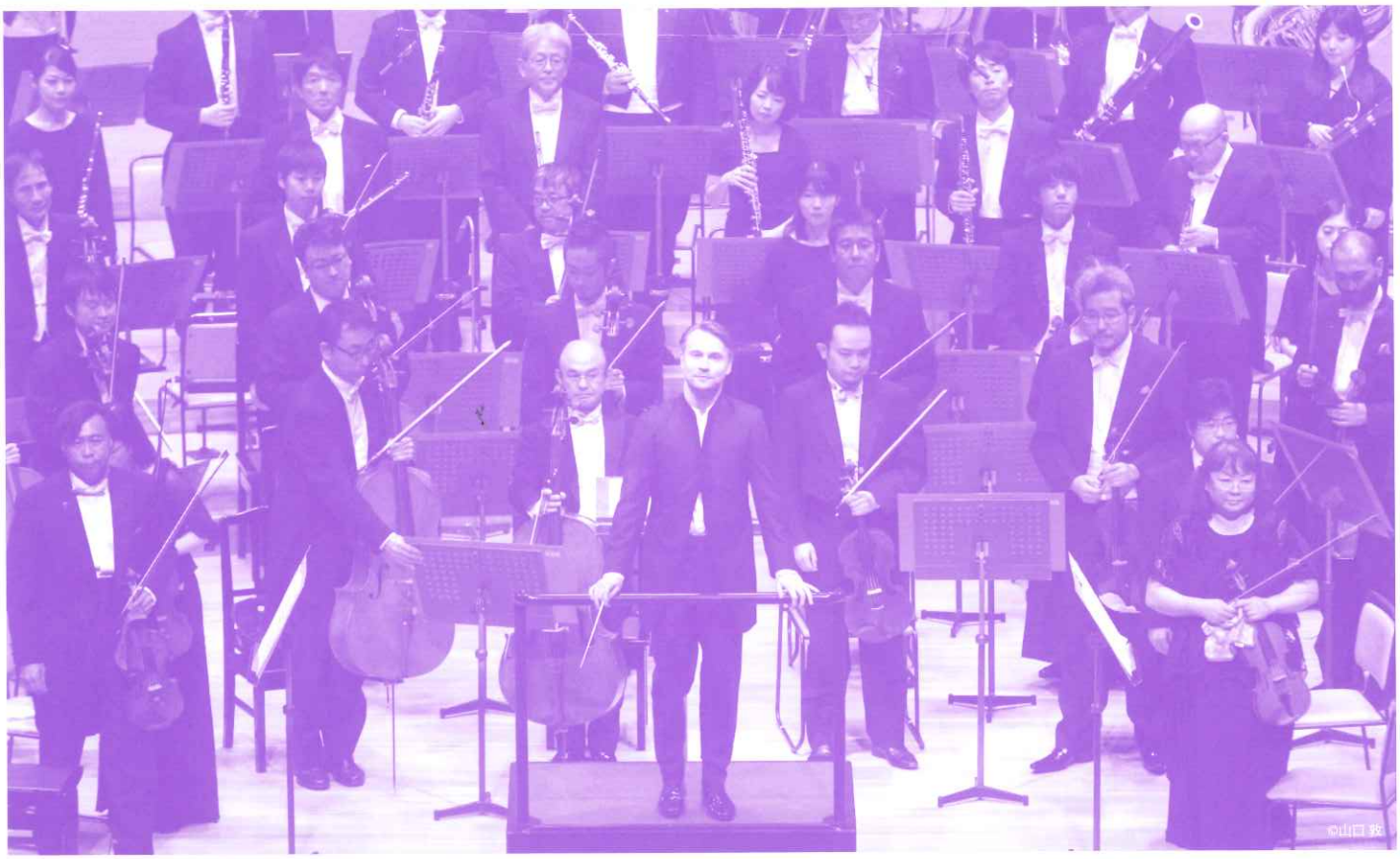
2018年度も、ローム株式会社協賛、ローム ミュージックファンデーションの助成によりロームシアター京都での主催公演を2公演開催しました(「小学生からのクラシック・コンサート」「夏休みコンサート」)。夏休みコンサートは2016年度から始まり3回目、5月の中規模編成の公演は2回目となりました。

「小学校からのクラシック・コンサート」では「心と身体で音楽を味わう」というコンセプトのもと、指揮の海老原光氏、モーツァルトに扮したナビゲーターの江原陽子氏が前半ではオーケストラの各楽器の特徴を分かりやすく解説。また後半はプロコフィエフの《ピーターと狼》を親しみやすい新台本で演じ、小学生がクラシックと出会い、深く学ぶ機会を作り上げました。

京都 小学生からのクラシック・コンサート

硬軟両面の表現力、意欲的なプログラミング
～2018／2019の成果～

東条 碩夫



創立以来63年におよぶ歴史の中で、日本フィルはいま、これまでになかったほどの目覚ましい演奏水準に達しているように思われる。

それを筆者が強く感じたのは、第701回東京定期（2018年6月）における、首席指揮者ピエタリ・インキネンの指揮による演奏においてだった。その時のプログラムの中でも見事だったのは、たとえばシューベルトの「《イタリア風序曲》第2番」の冒頭のふくよかで明るい和声の響き、そしてメンデルスゾーンの「イタリア交響曲」の第1楽章冒頭での、木管の柔らかく軽快なリズム感と、開放的で明るい主題の表情などだった。すべてが明るくてきらきらしていて、色彩的で、爽やかだったのである。

日本フィルがこのように洗練された演奏を聴かせるようになったことは、創立以来この楽団を聴き続けてきた筆者にとっては、うれしい驚きだ。それは、一頃のこのオーケストラからは想像もできないような変わりようだったのである。ある時期、方向性を見失っていた感もあったこのオーケストラを、前・首席指揮者アレクサンドル・ラザレフが厳格に締め直し、演奏に強固なアンサンブルと完璧な構築性を復活させた。それを引き継いだインキネンは、ラザレフが築いたダイナミックな演奏スタイルの中に、これまで日本フィルになかったような洗練された表情と美しい均整を導入し、同楽団に新しい個性をもたらした。そして、今やその成果がはっきりと顕れて来た――それを強く印象づけた演奏がこれだったのである。

そしてまた、その印象は、同年10月の第704回定期でインキネンが指揮したシューベルトの「交響曲第5番」の演奏で、更に強められた。その澄んだ美しい瑞々しさは、ある点で、創立直後の、渡邉曉雄が指揮していた時代の日本フィルを思い出させたほどだった。

こうしてインキネンのもと、日本フィルは、同じく第704回定期におけるブルックナーの「交響曲第9番」や、第699回（4月）におけるワーグナーの「ニーベルングの指環」（管弦楽編曲版）でも、以前よりもいっそう優れたバランスを備えた演奏を聴かせるに至っている。前者では、巨大かつ緻密な建築を豊かな響きで生かし、荘重さを重視しながらも、清澄で洗練された色合いを失わない演奏をつ

くった。また後者での演奏も、シンフォニックな起伏感と強靭な力感を備えた、明晰な光に照らされた切れのいいワーグナーといったイメージとなり、それはインキネンの指揮で以前手がけた「ワルキューレ」第1幕での演奏よりも、さらに見事なものになっていたのである。

こうした柔軟性が豊かに備わって来たことにより、たとえば客演の沼尻竜典の指揮(12月、第706回定期)でベルクの《ヴォツェック》からの「3つの断章」を演奏した時にも、日本フィルは、この作品の美しく繊細なオーケストレーションを浮き彫りにしてみせることができたのである。つまり、ふつうなら鋭角的なイメージで描かれるこの近代オペラから、思いもかけぬほどの透明で清澄な音楽を引き出したのであった。それは、日本フィルの音の美しさが最も見事に発揮された一例であったろう。

©福田 力夫

一方、前任の首席指揮者で、現在は桂冠指揮者兼芸術顧問となっているラザレフも、5月の第337回横浜定期でチャイコフスキーの「交響曲第4番」他、11月の第705回東京定期でもショスタコーヴィチの「交響曲第12番」やグラズノフの「交響曲第8番」など、得意のロシアのレパートリーを取り上げ、彼らしい豪華で色彩的な快演を聴かせていた。「勇将のもとに弱卒なし」という喩えがぴったり来るような初期の頃の気張った雰囲気から少しは解放されて来たものの、しかし彼が指揮台に立った時の日本フィルの演奏には、今も常に独特のエキサイティングな雰囲気があふれ、それが聴衆を惹きつけるもとになっているのである。

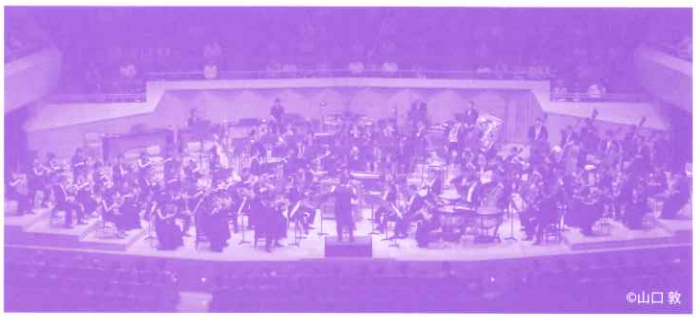
そのラザレフが指揮した演奏会の中でも特筆すべきは、節目の第700回記念東京定期(5月)における、ストラヴィンスキーの《ペルセフォーヌ》の日本初演であった。

第700回――月に3～4プログラム(公演)を「定期演奏会」としているオーケストラならともかく、数多くの公演の中で「定期」を月1プログラムのみとするシステムを守り抜いている日本フィルの場合には、これは並みの数字ではない。1957年4月4日に渡邉曉雄の指揮で第1回定期(プログラムはJ.C.バッハの「シンフォニア変ロ長調」、シベリウスの「第2交響曲」など)を開いて以来、60年以上の活動の積み重ねの結果であることを、改めて思い起こしたい。

この記念すべき定期において、日本フィルがありきたりの名曲の大曲などではなく、未だわが国で公開演奏されていなかった《ペルセフォーヌ》という曲を選んだのは、実に意義深いことであった。

《ペルセフォーヌ》は、ギリシャ神話のペルセポネーをヒロインとした物語で、ストラヴィンスキーが、その新古典主義作風の時代――1934年に初演した、演奏時間50分ほどに及ぶ大作である。大規模な管弦楽編成でありながら響きは簡素で、清澄透明な音色がこの上なく美しい。ラザレフはこれを、端整な構築の裡にも官能的な雰囲気と、時にはロシア風の濃厚な色合いをも交えて指揮した。日本フィルの演奏も、爽快で伸びやかであった。その日本初演は、大成功を収めたのである。経営の楽ではない自主運営オーケストラが、よくこれだけの企画を、しかも高い演奏水準を以って実施したものだ。その意欲的な姿勢は高く評価されよう。

なお、この第700回定期では、他にプロコフィエフの「交響的協奏曲」も取り上げられ、そこではソロ・チェロ奏者の辻本玲が劇的な演奏を聴かせた。


©山口 敦

日本フィルの定期公演におけるプログラミングには、時になかなか凝ったアイディアが示されることがある。これもまた、今日のオーケストラ界にあって、極めて意欲的な姿勢と言えよう。その代表例を挙げておきたい。

それは正指揮者・山田和樹が指揮した第703回定期(9月)で聴かれたプログラムだった。フランス音楽のレパートリーからちょっと捻った選曲で、洒落た雰囲気の作品を配列し、その中に、それに関連する日本人作曲家の優れた作品を「さり気なく」挿入する――といった方法である。まずプーランクの軽妙洒脱な「シンフォニエッタ」で開始、次に三善晃の「ピアノ協奏曲」を演奏。休憩後にはデュカスの華麗な《魔法使いの弟子》を(これも通常の版でなく、ストコフスキー編曲版でやるところが凝っていた)、そして最後にデュティユーの「交響曲第2番《ル・ドゥーブル》」を演奏する、という構成だった。つまり、ここに取り上げられた三善晃は、パリ音楽院に学び、デュティユーにも私淑した作曲家であり、その作風にもフランス音楽の影響が聴かれる、ということにも関連性が持たせられていたのだ。

そして、このようなプログラミングに加え、日本フィルは、得意のダイナミックな曲想の場面で本領を発揮するだけでなく、「ピアノ協奏曲」の中間部のような弱音の叙情個所においても、透明な美しさを余すところなく再現させていたのである。これもまた、現在の日本フィルが多様な表現力を備えるに至っていることの証明とも言えよう。

優れた指揮者陣により拡げられた硬軟両面の表現力の幅、そしてその指揮者陣とオーケストラの企画制作スタッフにより実現されて来た意欲的なプログラミング――2018～2019シーズンの日本フィルの演奏には、まぎれもない成果が見られたのであった。

韓国公演レポート 渡辺 和

2018年10月30日昼過ぎ、韓国最新のコンサートホールを三泊四日で駆け抜ける、日本フィル初の韓国ツアーの練習が前日から始まっている。練習会場セシオン杉並のポディウムに立つのは、元大阪フィル音楽監督の大植英次。日本フィルとの共演は過去一度だけ、極めて個性的な《新世界より》解釈で楽団員を驚かせたマエストロだ。コンサートマスターが大阪フィル監督時代から気心知れた田野倉雅秋とはいえ、音楽的緊張感が漂う。リハーサルでは、協奏曲も交響曲も、楽想変化や繋ぎの部分でのアゴーギクやアクセントを細かく指示。客席では大植の弟子の韓国人青年がスコアを広げている。「日本と韓国はギクシャクしているでしょ。だから、日本のフィル、ってことで(笑)。僕の弟子のウォン・リムは韓国人で、彼の名前もプログラムに出るといいますし。」(大植)

◆11月1日(木)大邱コンサートハウス

演奏家だけでも96名の大所帯は、31日午前の釜山行きで韓国入り。半島を南北に貫く国道1号線を1時間ほどバスに揺られ、盆地に広がる大邱に入った。大邱コンサートハウス主催「国際オーケストラ・シリーズ」のための招聘である。2013年のホール開幕を飾る「アジア・オーケストラ・フェスティバル」として始まったシリーズ、その後「国際」と名を変え、今シーズンは10月20日のサロネン指揮フィルハーモニア管に始まり、日本フィル、ピヒラー指揮スロヴァキアフィル、ブルガリア国立放送響、バーゼル祝祭管、ヤルヴィ指揮ブレーメン・ドイツ室内管と外国楽団訪問が続く。その間に、大邱響以下韓国のプロ団体ばかりか、学生オケやアマオケ、吹奏楽団まで総計22公演が並ぶ。「ヨーロッパばかりかアジアからも招きたいと考えています。日本フィルに来ていただいたのは、無論、日本のトップだから」と語る館長は、広島生まれで日本語も達者だ。広島出身のマエストロ大植と奇遇を喜び合う姿も。

韓国を訪れた音楽家が「韓国一の音響では」と賞賛する大邱コンサートハウスは、モダンな大邱駅南口の直ぐ横にある音楽専用ホール。かつては市民会館だった名残か些か横に広い空間だが、過剰過ぎない自然な響きが隅々まで伝わる。館長曰く、「大邱にはオペラハウスはありましたが、コンサートは市民会館で行われていました。大邱響がサントリーホールで演奏したとき、同行した市の関係者が、我が街のオーケストラも悪くないじゃないか、と吃驚した(笑)。それで良いホールが必要だということになり、市民会館をコンサート専用ホールに全面改装したのです。大邱は韓国で西洋クラシックの発祥の地です。ホールが素晴らしい、聴衆が素敵、そして若い。」

午後4時からの会場練習で細部を詰め、ホールの音響も把握。6時に練習が終わるや、団員が楽屋口を飛び出し、隣の駅ビル地下に急ぐ。開演までの間に、韓国グルメを堪能しようというのだ。同じ頃、ホール隣の会議室ではスクリーンに楽譜を投影しつつ演奏曲を解説するレクチャーに、大邱の音楽ファン数十人が熱心に耳を傾けていた。

7時半開演。VIP席は日本円で1万5千円もする高額な外来オケだ、席を占めるのは日本関係者ばかりかと思えば、そんな空気はない。日本の地方公演と変わらぬ客

席風景だが、聴衆に若い世代が目立つのがちょっと違うかも。市内にオーケストラシリーズの垂れ幕が下がり、日本の団体の来訪は誰もが知ろうが、政治的理由で抗議やボイコットを求める姿など会場内にも周囲にも欠片もない。大邱の音楽ファンのための、「世界を代表するトップオーケストラのひとつ日本フィル」の公演である。

楽器を抱えた団員がステージに姿を見せるや、拍手。コンサートマスターが現れるや、また拍手。そして、大きな拍手に迎えられマエストロ大植の登場だ。立ち上がった打楽器群に向け大植が手を振り下ろすと、外山雄三《管弦楽のためのラプソディ》が始まる。日本の戦後復興を象徴する1960年のN響世界ツアーのために書かれ、世界のあちこちで演奏されている日本民謡俗謡の祭りだ。日本フィルは何度も演奏し、大植も東フィルとの世界ツアーで演奏し、世界中のオーケストラで指揮している。難しい現代音楽かと身構えていた大邱聴衆も、一気にリラックス。リーズ・ドゥ・ラ・サールがベートーヴェンと真っ向から対峙したピアノ協奏曲第3番の後、一転、《亜麻色の髪の乙女》を披露。後半のブラームス交響曲第1番、インキネンで対向配置での演奏には慣れた日本フィルだけに、大植のテンポやダイナミックス変更や対位法の強調もしっかり応え、細部へのこだわりと大きなパワーを両立させた音楽で聴衆を沸かせる。客演首席ホルンは、かつて大邱響に在籍していた経歴もあってか、大喝采を浴びた。

止まないアンコールに、管打楽器奏者が舞台に登場。マエストロが一振りし、再び拍子木が鳴り渡り、《管弦楽のためのラプソディ》から最後の部分が始まった。フルオーケストラの「八木節」に、大植は指揮台を降り、客席に向かって両手を広げ、手拍子を求める。客席の聴衆も立ち上りオケと一緒に手拍子、大邱コンサートハウスは熱狂の渦となった。終演後、宿に向かうオーケストラ専用バスの前で、初老男性が団員を待ち構えている。関係者と悟るや近寄ってきて、満面の笑みでプログラムの外山の名を示し、これだこれだと握手を求めてくる。ストレートな音楽のパワーの前に、国も民族もない大邱の夜だった。

◆11月2日(金)ソウル・ロッテホール

熱狂の大邱の夜が明け、いよいよソウルだ。世界から次々とオーケストラが訪れる世界有数の音楽都市、KBS放送が生中継することも決まった。国道1号線高速から眺める山は見事に紅葉し、里には柿の実が揺れる。九州や中国地方にそっくりな朝鮮半島の秋が、北上するにつれ深まる。東アジア地区最高峰の高層ビル、ロッテタワーの足下にバスが到着したのは、開演4時間半前。会場は一昨年オープンしたタワー真下のロッテ・コンサートホールである。

本日の公演は、ソリストが地元期待若手のムン・ジョンとなり、曲もブラームスのピアノ協奏曲第1番である。練習はピアノ協奏曲が中心で、スコアを手にしたソリストと指揮者の話し合いばかりか、オーケストラのセクション

©渡辺和

内部でのやり取りも活発だ。限られた時間の中で大作をどこまで作り込めるか、プロ達の真剣勝負。音楽祭芸術監督の作曲家ジェジョン・リュウが客席で練習を眺め、指揮者やソリストにコメントしている。

「韓国には音楽祭は沢山ありますが、本当に国際的なものは殆どありません。この音楽祭は毎年特定の国をテーマに、オーケストラから室内楽、声楽まで多彩な音楽を提供しようとしてます。」(リュウ)秋の2週間ほど、様々な会場でほぼ連日開催されるこの音楽祭、今年は10周年を記念し各国からひとつづつ団体や音楽家を招聘する特別なやり方という。大編成交響楽団の代表が、日本フィルハーモニー交響楽団だ。「どうしてかって、そりゃ、最高だからですよ」とリュウ芸術監督。日本のオーケストラ事情にも詳しい監督は、日本フィルの魅力と力を高く評価する。指揮者の大植英次も、バイロイトで接し関心を持っていたとのこと。「日本の作品をひとつ演奏してくれるように頼み、日本フィルには韓国の作品を日本で紹介してくれるよう御願いしました。イサン・ユン作品を演奏なさったんですよね。」(リュウ)政治関係にはいろいろ意見もあるようだが、それはそれ。音楽はお互いを理解するために絶対に重要、と力説する。

午後8時の開演を前にロビーがごった返す。チケットボックスの招待客列には、音楽祭に参加するプラド音楽祭芸術監督のクラリネット奏者ルティエックの顔も。日本大使館の列もあり、公式な招待客も多い。遙々やって来た日本フィル応援団の面々と団員が、エールを交わしている。ホールの中には、日韓の政治的緊張の影はない。午後8時、《管弦楽のためのラプソディ》で演奏会が始まり、早くもブラボーが。続くブラームスは、重厚さよりも2楽章の猛烈な弱音が印象的。後半、「最高のブラームスをしますからね」とステージに向かうマエストロ。楽屋裏では打楽器のメンバーがねじり鉢巻きをし、昨日よりも自在になったブラームスに沸く聴衆を更に熱狂させるべく、準備万端だ。そして、「八木節」にソウルの聴衆も総立ち、連夜の総立ちの拍手喝采となった。

「被災地に音楽を」

心の復興とコミュニティの復興支援への取り組み

8年目を迎えた東日本大震災の被災地での活動

未曾有の大災害である東日本大震災の発生から8年が経過しましたが、東北地方沿岸の各地は今なお様々な困難を抱えており、中でも「心の復興」「コミュニティの復興」については息の長い取り組みが必要だと言われています。日本フィルは被災地に寄り添い、被災地の課題について共に悩み、復興のための取り組みを継続しています。2018年度も前年度に引き続き文化庁の委託事業として3県の5つのエリアで活動を行いました。音楽を一方的に届けるだけでなく、地域の方々との共同企画や共演など、より一層深く地域住民、自治体等と連携することでコミュニティの活性化を図るとともに、被災地の現状を多くの方にお伝えするため、2017年に引き続きシンポジウムも開催しました。活動の一部をここでご紹介します。

各地での主な活動報告

❶ 音楽ワークショップと参加型コンサート
《2018年8月9～10日　岩手県大船渡市リアスホール》

三陸沿岸は、世界的にも類まれな伝統芸能の宝庫です。2011年以降大船渡を訪れて5回目となる今回は、リアスホールを舞台とし、内容を一層充実させての開催となりました。江戸時代から伝わる伝統芸能「赤澤鎧剣舞」を受け継ぐ大船渡市立大船渡北小学校の児童とのワークショップや、地元の高校生を中心としたクリニック、そして赤澤鎧剣舞の子どもたちとの共演を盛り込んだサン＝サーンス作曲《動物の謝肉祭》参加型コンサートを行いました。

©平舘 平

＜1日目＞ 音楽づくりワークショップとクリニック

赤澤鎧剣舞が生まれた背景の一つ、壇ノ浦の戦いでの平家の魂を鎮める由来にからめ、サン=サーンスの《死の舞踏》のリズムをテーマとしました。3つのグループに分かれて音楽づくりと即興の演奏をし、最後は日本フィルによる同曲の演奏で幕を閉じました。また、大船渡高校ならびに大船渡東高校吹奏楽部へのクリニックでは、丁寧な指導を行いました。

©平舘 平

＜2日目＞ 動物の謝肉祭コンサート

翌日のコンサート冒頭でワークショップについて紹介。赤澤鎧剣舞とサン＝サーンスの《死の舞踏》には「死せる魂を呼び集める」という共通点があることに触れながら、具体的な場面をレクチャーし、日本フィルが演奏。そして間を開けずに子どもたちによる剣舞が続きました。腰を低く落とし、両手を振り上げた姿は荒ぶる「平家の亡霊」、そして念仏で彼らを鎮めるのが「僧」です。堂々としたダイナミックな演舞に、客席から大歓声が送られました。

©平舘 平

❷ コミュニティへの参加～共演
《2018年5月23日　宮城県石巻市　川の上・百俵館》

2018年度は、少しでも地域を元気にすること、コミュニティの復興に貢献することを目指し、地元の方との共演や、参加型の曲目を取り入れるよう工夫しました。

津波で甚大な被害を受けた大川地区・雄勝地区から多くの方が移転した石巻・川の上地区に、学びの場でありコミュニティ機能として建てられた百俵館。近隣の二俣小学校児童6名が、「川の上の春」をテーマに地域の自然や春を思い浮かべて詩を創作し、代表の1名が朗読。続いてすぐに日本フィルがヴィヴァルディの《春》を演奏するコラボレーションをしました。詩は川の上の自然への愛を感じる内容で、会場はとても温かい拍手に包まれました。

❸ 町一体で合同コンサート
《2018年10月8日　福島県南相馬市ゆめはっと》

福島県南相馬市は東日本大震災による津波被害に加え、市内の一部が福島第一原発から20キロ圏内の避難指示区域にあり、大変な困難と不安の時を過ごしてきました。この地域で活躍する名指導者・阿部夫妻の尽力によって全国レベルまで育て上げられた原町第一中学校吹奏楽部の活動も、原発事故により一時的に中断を余儀なくされ、部活に所属する生徒数も激減してしまいました。

吹奏楽部に残った生徒たちと先生の音楽へのひたむきな思いを受けて、日本フィルは毎年楽器指導を通じた支援を行ってきました。さらに、彼らの素晴らしい音楽を多くの人に聴いてもらうべく、杉並公会堂を中心に毎年開催されている「荻窪音楽祭」への招へいを行い、交流自治体である杉並区と南相馬市に音楽の橋をかけてきました。震災から時が経過し、吹奏楽部の人数も少しずつ戻り、活動にも活気が戻ってきました。これまで陰ながら応援してきた原一中とともに、地域全体をもっと元気にしたい。そんな思いから、2018年度は毎年10月に同校が市内のホール「ゆめはっと」で開催しているコンサートに日本フィルが出演し、ステージを共にすることになりました。合同演奏のほかには、各校の演奏に続き、ストラヴィンスキーが小編成アンサンブルのために作曲した《兵士の物語》を日本フィルが演奏。語り役を務めた巌谷陽次郎さんの名演もあって、会場全体が興奮に包まれました。

活動報告会およびシンポジウムの開催

《2019年2月25日　慶應大学三田キャンパスG-Lab》

2017年度のシンポジウムでは、コミュニティが持つ独自の文化的活動を支援し、活性化することが重要であるとの結論に至りました。2018年度は慶應義塾大学SFC研究所（社会イノベーションラボ）により「被災地に音楽を」の事業評価を行いました。岩手、宮城、福島三県から当活動にご協力いただいている3名をシンポジウムにお招きし、ディスカッションでは現在の課題や今後の取り組みについて意見が交わされ、住民が集うきっかけづくりや横の繋がりを広げるニーズがますます高まっていることが確認されました。

日本フィル「被災地に音楽を」実施一覧（233回～）

【2011年度～2018年度までの延べ実施回数 263回】

回数	開催日	会場		
	【2018年】			
233	5月23日	宮城県	石巻市	百俵館
234	5月24日			雄勝ローズファクトリーガーデン
235	5月24日			アトリエDaDa
236	5月25日			こーぷのお家石巻
237	8月8日	宮城県	名取市	名取市立第二中学校
238	8月9日	宮城県	大船渡市	リアスホール
239	8月9日			
240	8月10日			
241	8月24日	宮城県	塩釜市	塩釜市立第一中学校
242	8月25日			
243	9月1日	宮城県	仙台市	ユアテックスタジアム仙台
244	9月9日	岩手県	陸前高田市	陸前高田第一中学校
245	9月15日	宮城県	仙台市	ユアテックスタジアム仙台
246	9月28日	岩手県	宮古市	宮古市民文化会館
247	9月29日			崎山貝塚縄文の森ミュージアム
248	9月29日	岩手県	宮古市	崎山貝塚縄文の森ミュージアム
249	10月2日	福島県	富岡町	富岡学びの森
250	10月3日	福島県	三春町	御木沢小学校
251	10月3日			葛尾小学校
252	10月4日			三春交流館まほら
253	10月6日	福島県	南相馬市	原町第一中学校
254	10月7日			ゆめはっと多目的室
255	10月7日	宮城県	仙台市	ユアテックスタジアム仙台
256	10月8日	福島県	南相馬市	ゆめはっと
257	10月8日	福島県	新地町	新地町立尚英中学校
258	10月14日	宮城県	石巻市	石巻市立湊中学校
259	10月20日	宮城県	仙台市	ユアテックスタジアム仙台
260	11月11日	東京都	杉並区	杉並公会堂
261	11月24日	宮城県	仙台市	ユアテックスタジアム仙台
262	11月27日	宮城県	山元町	宮城病院
263	11月28日	宮城県		つばめの杜ひだまりホール

ふぉと

写真・文：松本 克巳（日本フィル・ヴァイオリン奏者）

1

インキネン氏の4月横浜定期演奏会はドビュッシー特集。楽員ソリストが大活躍しました。（2018年4月）

2

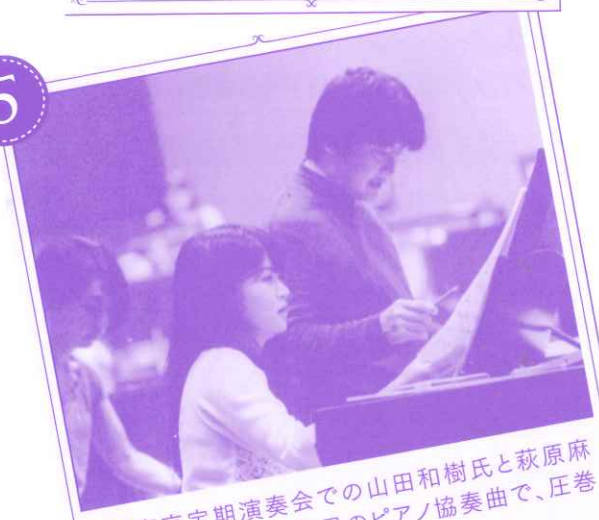
3

東京定期700回を記念したコンサートで並んで演奏する両コンマスとすばらしいソロを聞かせた辻本玲。そしてラザレフ氏の後ろ姿。（2018年5月）

4

2018年の夏休みコンサートは「くるみ割り人形」。開場前、それぞれ思い思いの調整をする演奏者やダンサーたちです。（2018年7月）

5



9月東京定期演奏会での山田和樹氏と萩原麻未氏。凄まじい、三善晃のピアノ協奏曲で、圧巻でした。（2018年9月）

6

11月は韓国公演。演奏冒頭は「外山雄三：管弦楽のためのラプソディ」。パーカッションが大活躍です。メインのブラームスの交響曲第1番も含めて、熱狂的な雰囲気で公演を終えました。（2018年11月）

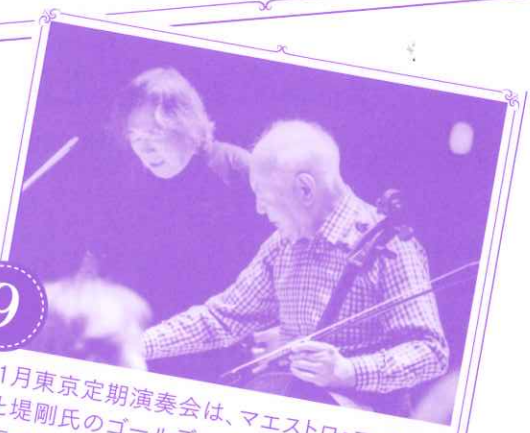
7

12月東京定期演奏会で、ベルクの歌劇《ヴォツェック》で共演したエディット・ハラー女史と沼尻竜典氏。(2018年12月)

8

2019年ニューイヤーコンサートは、下野竜也氏指揮、三浦文彰氏(Vn)、ヨナタン・ローゼマン(Vc)によるブラームスの二重協奏曲。(2019年1月)

9



1月東京定期演奏会は、マエストロ・コバケンと堤剛氏のゴールデンコンビ。チェロ人生58年で日本フィルとは3回目というシューマンのチェロ協奏曲でした。(2019年1月)

10

2月の第44回九州公演。各公演地、ウェルカム・コンサートでお客様をお迎えします。(2019年2月)

11

3月横浜定期演奏会は、久々の「輝け!アジアの星☆」。第11弾の今回は、ダレル・アン氏登場でした。(2019年3月)

12

3月東京定期演奏会は初登場のアレクサンダー・リープライヒ氏。ポーランドの作曲家ルトスワフスキの演奏に力が入ります。(2019年3月)

ご支援

2018年度も、法人寄付、個人寄付共に多大なるご支援をいただき深く御礼申し上げます。また、2019年4月に行う13年ぶりの第6回ヨーロッパ公演に向けても法人、個人の皆様から大きなご支援を頂戴しました。厚く御礼申し上げます。

大きなスポンサーを持たない日本フィルは、毎年、できるだけの経費節減をしながら運営を続けています。また、楽団員の処遇はまだまだ低い水準にあり、改善していく必要があります。しかしながら、楽団員の意識は極めて高く、オーケストラ公演では毎回最高の演奏を聴衆の皆様にお届けしながら、教育活動、地域活動にも全力で取り組んでいます。東日本大震災発生直後から続けている「被災地に音楽を」においても、2019年3月末までに263回の演奏を被災地にお届けしました。このような活動を継続、拡大するために、楽団員も自助努力を続ける一方で、日本フィルを安定的に支援していただく仕組みを構築しなければなりません。法人の協賛をはじめとして、まだまだ力を入れる必要がある項目も多くあります。引き続き皆様のご支援をお願い申し上げます。

Data 会員等（2019年3月末現在）

定期会員	
東京定期会員（金・土）	1,915席
横浜定期会員	1,398席
法人会員	
協賛企業	28社
特別会員	230社
九州特別会員	114社
個人会員	
パトロネージュ	222名
日本フィル協会	1,156名
サポーターズクラブ	677名

＜個人ご支援＞

個人の皆様からは、パトロネージュ（個人寄付会員）、サポーターズクラブ、1975年より続く日本フィルハーモニー協会といった様々な会員制度によるご支援に加え、「被災地に音楽を」へのご寄付、第6回ヨーロッパ公演へのご寄付もいただきました。

2018年度ご支援総計　63,198,583円

※パトロネージュ、日本フィル協会維持会員の皆様のご芳名はp21に掲載致しました。

＜企業・団体ご支援＞

企業法人・団体の皆様からは、「特別会員」「九州特別会員」（いずれも寄付会員）をはじめ、継続的なご寄付をいただくと共に、活動全般に対する新たなご寄付も増えております。

2018年度ご支援総計　156,453,563円

また、演奏会等の事業では、東京定期演奏会をはじめとする主催演奏会への協賛（冠協賛、広告協賛）の他、「被災地に音楽を」、さらに第6回ヨーロッパ公演に対するご支援をいただきました。

2018年度協賛企業ご芳名

株式会社ウテナ／エレコム株式会社／株式会社カインドウェア／鹿島建設株式会社／社会医療法人 河北医療財団 河北総合病院／株式会社京王設備サービス／京王電鉄株式会社／株式会社興建社／山久株式会社／昭和シェル石油株式会社／大栄不動産株式会社／株式会社チャイルド社／千代田化工建設株式会社／株式会社ティーガイア／東洋時計株式会社／株式会社日清製粉グループ本社／根本特殊化学株式会社／パイオニア株式会社／ハウス食品グループ本社株式会社／非破壊検査株式会社／株式会社フジテレビジョン／丸美屋食品工業株式会社／三井不動産株式会社／三菱製紙株式会社／三菱UFJニコス株式会社／武蔵商事株式会社／株式会社ヤクルト本社／株式会社リョーサン／ローム株式会社

※ご寄付を賜りました企業ご芳名はp19-20に掲載致しました。

＜補助金・助成金・事業委託／共催＞

2018年度も「文化庁文化芸術振興費補助金（文化芸術振興活動活性化事業）」対象団体として採択され、東京定期演奏会、横浜定期演奏会に補助金をいただきました。このほか、民間助成団体からも多大な助成をいただきました。

2018年度公的助成総計　146,774,438円

2018年度民間助成総計　49,050,000円

2018年度補助・助成ご芳名

＜公的補助＞文化庁「劇場・音楽堂等活性化事業（劇場・音楽堂等間ネットワーク構築支援事業）」
日本芸術文化振興会「文化庁文化芸術振興費補助金（文化芸術振興活動活性化事業）」
東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京

＜民間助成＞（50音順）公益財団法人朝日新聞文化財団／公益財団法人アフィニス文化財団／公益財団法人花王芸術・科学財団／公益財団法人関西・大阪21世紀協会／公益財団法人三菱UFJ信託芸術文化財団／公益財団法人ローム ミュージック ファンデーション

＜事業委託／共催＞文化庁「文化芸術による子供の育成事業」（委託）／文化庁「戦略的芸術文化創造推進事業」（委託）

＜CD・オリジナルグッズ販売収入＞

2018年度グッズ販売収入　23,602,285円

コンサート会場にご来場いただけない方々にも演奏を届けるために、CD等の録音物の制作と販売、普及事業を行いました。また多くの方々とのコミュニケーションを広げるために、演奏会場内外での関連グッズの販売を行い、公演の余韻を楽しんでいただきました。

他社との提携によるCD等リリース：

日本フィル・レーベル以外でも、他社との連携により積極的にCDをリリース、日本フィルの演奏を内外に発信しました。2018年度は、ラザレフ指揮の「ショスタコーヴィチ：交響曲第5番」、「ストラヴィンスキー：《ペルセフォーヌ》」がオクタヴィア・レコードから発売されました。

2018年度の制作アイテム オリジナルTシャツ、カレンダーの制作。新商品として、サンリオとのコラボレーションによるキティチケットフォルダ、今治製キティミニタオルを制作。オリジナルカレンダーは、第70回全国カレンダー展で3年連続4回目の入選をしました。

ご寄付いただいた企業のみなさま

[東京特別会員、九州特別会員（一部個人含む）、活動へのご寄付他]

（50音順・敬称略）

アイング株式会社
赤坂維新號
アサヒグループホールディングス株式会社
株式会社アドービジネスコンサルタント
株式会社アール&キャリア
株式会社鮎川電工
株式会社有明新報社
安心な健やか地域づくりをすすめる会
社会福祉法人猪位金福祉会暖家の丘デイサービスセンター
イーソリューションズ株式会社
株式会社泉商会
株式会社泉放送制作
有限会社和泉屋
壱之倉庫
稲員興産株式会社
稲畑産業株式会社
井上歯科医院
今村正人
株式会社インフォマート
有限会社魚半
株式会社内田洋行
内野株式会社
宇部エクシモ株式会社
宇部興産株式会社
株式会社AIT
株式会社エイブル＆パートナーズ
医療法人江上耳鼻咽喉科医院
有限会社江口栄商店
株式会社エヌエフ回路設計ブロック
エムエスティ保険サービス株式会社
株式会社エムジーケイ
株式会社エルイーテック
税理士法人エル・ビーエー
エレコム株式会社
医療法人社団桜珠会可也病院
株式会社大分銀行
大分県医療生活協同組合
大口酒造株式会社
株式会社お菓子の香梅
押渕クリニック
大隅ミート産業株式会社
株式会社大場造園
株式会社オープンハウス
株式会社岡三証券グループ
小田急電鉄株式会社
小野塾
公益財団法人オリックス宮内財団
株式会社オンワードホールディングス
花王株式会社
株式会社カカクコム
公益社団法人鹿児島共済会南風病院
株式会社鹿児島銀行
鹿児島相互信用金庫
鹿島建設株式会社
鹿島建物総合管理株式会社
鹿島道路株式会社
かどや製油株式会社
株式会社カナック企画
株式会社ガモウ
株式会社カレントセラー
社会医療法人河北医療財団
川北電気工業株式会社
川谷医院
看公税理士法人
医療法人起愛会宇佐病院
医療法人起生会林内科胃腸科病院
北野建設株式会社
キッコーマン株式会社
キヤノン株式会社
キューピー株式会社
医療法人共生会びろうの樹脳神経外科
株式会社共立メディカル
協和発酵キリン株式会社
キリンホールディングス株式会社
税理士法人近代経営
株式会社きんでん
熊本朝日放送株式会社
学校法人熊本壷渓塾学園
株式会社熊本日日新聞社
株式会社熊本放送
医療法人九曜会こが内科こどもクリニック
株式会社九曜社
久留米第一法律事務所
株式会社京王設備サービス
京王電鉄株式会社
京浜急行電鉄株式会社
医療法人敬和会大分岡病院
晃榮住宅株式会社
医療法人弘恵会ヨコクラ病院
株式会社興建社
コーザイ株式会社
株式会社講談社
医療法人社団高邦会高木病院
生活協同組合コープかごしま
生活協同組合コープみやざき
医療法人五秀会末永産婦人科麻酔科
医療法人こだま小児科
株式会社コバヤシ
コンパッソ税理士法人
株式会社コトブキ
株式会社コンサートサービス
株式会社佐賀銀行
佐藤製薬株式会社
薩摩酒造株式会社
三機工業株式会社
山九株式会社
三京物産株式会社
サントリーホールディングス株式会社
三洋貿易株式会社
医療法人CLSすがはら菅原病院
ジェネロ株式会社
株式会社慈恵実業
宍倉渉税理士事務所
自然庵
税理士法人柴田＆パートナーズ
澁谷工業株式会社
株式会社じほう
清水建設株式会社
シャボン玉石けん株式会社
株式会社集英社
医療法人秀康会ましきクリニック耳鼻咽喉科
医療法人社団寿量会
医療法人春回会井上病院
松竹株式会社
浄土真宗本願寺派無量山西導寺
医療法人松籟会河畔病院
公益財団法人昭和会今給黎総合病院
昭和電工ガスプロダクツ株式会社
昭和電工株式会社
ショーボンドホールディングス株式会社
医療法人社団仁愛会中村医院
真宗大谷派妙行寺
株式会社進藤木材店
新日本製薬株式会社
新菱冷熱工業株式会社
医療法人信和会
杉山商事株式会社
住友商事株式会社
住友ベークライト株式会社
株式会社西武ホールディングス
聖マリア病院臨床研究教育学部
医療法人誠和会河野産婦人科医院
株式会社セフティハウス
税理士法人創研
株式会社総本家黒田家
第一倉庫株式会社
株式会社泰秀
大正製薬株式会社
大成ロテック株式会社
大同生命保険株式会社
大日本除虫菊株式会社
大日本塗料株式会社
大日本塗料株式会社福岡営業所
大隆工業株式会社
大和製罐株式会社
高砂熱学工業株式会社
田川信用金庫
有限会社但馬屋老舗
立花税務会計事務所
田中陸運株式会社
千代田化工建設株式会社
株式会社千代田テクノル
塚本總業株式会社
公認会計士津田久子事務所
株式会社鶴屋百貨店

ディアンドデパートメント株式会社
株式会社ティーガイア
学校法人帝京大学
THK株式会社
TIS株式会社
手島薬品株式会社
株式会社照国計算センター
株式会社テレビ朝日
株式会社テレビくまもと
株式会社電通
東亜建設工業株式会社
株式会社東急コミュニティー
学校法人東京音楽大学
東京海上日動火災保険株式会社
東京急行電鉄株式会社
株式会社東京交通会館
東京都杉並区
東京美装興業株式会社
医療法人藤溪会藤野医院
医療法人同心会古賀総合病院
株式会社東北新社
東洋熱工業株式会社
戸田建設株式会社
トヨタカローラ鹿児島株式会社
トヨタ自動車株式会社
株式会社トヨタレンタリース鹿児島
株式会社永田音響設計
株式会社永谷園ホールディングス
医療法人なごみ会酒井医院
名古屋ビルサービス株式会社
名取法律事務所
南洲税理士法人
日新製鋼株式会社
日鉄興和不動産株式会社
株式会社ニフコ
日本技術貿易株式会社
日本精工株式会社
日本製鉄株式会社
日本電子株式会社
日本パーカライジング株式会社
株式会社日本マイクロニクス
株式会社ネイチャーズウェイ
根本特殊化学株式会社
野村ホールディングス株式会社
パイオニア株式会社
ハウス食品グループ本社株式会社
株式会社白雲社
株式会社博報堂
はざま神経内科・内科医院
ハナマルキ株式会社
パンパシフィック・カッパー株式会社
阪和興業株式会社
東日本住宅株式会社
非破壊検査株式会社
ひびき・パース・アドバイザーズ
税理士法人ひまわりＦＣ
ひまわり音楽ホール
平田宗興
医療法人深川皮膚科
公益社団法人福岡医療団
福岡県退職教職員協会田川支会
社団福祉法人福岡コロニー
株式会社福岡ハイヤーサービス
富国生命保険相互会社
富士急行株式会社
富士テレコム株式会社
株式会社フジテレビジョン
一般財団法人 藤本育英財団
双葉電子工業株式会社
古内亀治朗商店株式会社
古河産業株式会社
古川康
豊和商事有限会社
フンドーキン醤油株式会社
株式会社別大興産
株式会社ポーラ・オルビスホールディングス
保険ネットワーク有限会社
ホッカンホールディングス株式会社
株式会社ポニーキャニオン
ホンダカーズ佐賀株式会社
本田技研工業株式会社
本坊松栄株式会社
前田憲徳
松本健司税理士事務所
マネックスグループ株式会社
株式会社丸井グループ
株式会社丸の内よろず
丸美屋食品工業株式会社
三井情報株式会社
株式会社三井住友銀行
三井製糖株式会社
三井石油開発株式会社
三井倉庫ホールディングス株式会社
三井物産株式会社
三井物産スチール株式会社
三井不動産株式会社
株式会社三越伊勢丹アイムファシリティーズ
株式会社三越伊勢丹ホールディングス
三菱オートリース株式会社
三菱ガス化学株式会社
三菱地所株式会社
三菱自動車工業株式会社
三菱重工業株式会社
三菱倉庫株式会社
株式会社三菱UFJ銀行
三菱UFJ証券ホールディングス株式会社
三菱UFJ信託銀行株式会社
三菱UFJ国際投信株式会社
三菱UFJニコス株式会社
三菱UFJリース株式会社
株式会社南日本放送
医療法人産科・婦人科宮原クリニック
医療法人泯江堂油山病院
社会福祉法人明澈会
武蔵商事株式会社
明治安田生命保険相互会社
株式会社明和住販流通センター
メッドサポートシステムズ株式会社
株式会社メディアグラフィックス
株式会社メルコホールディングス
森社会保険労務士事務所
森永製菓株式会社
株式会社ヤクルト本社
八代綜合法律事務所
山崎製パン株式会社
ヤマトホールディングス株式会社
株式会社UACJ
ユウキフーヅシステム株式会社
郵船ロジスティクス株式会社
医療法人友和会
有限会社幸組
株式会社夢織
横河電機株式会社
米持建設株式会社
株式会社リガク
株式会社リョーサン
株式会社Rings
株式会社リンレイ
株式会社LABCO
社会福祉法人麗風会
税理士法人れいめい
株式会社LEOC
ローム株式会社
社会福祉法人若楠
渡辺医院

他 匿名

パトロネージュ［個人寄付］会員ご芳名

（2019年7月5日現在・50音順・敬称略）

会田　英子　東京都
会田　雅美　東京都
青井　浩　東京都
浅野　純次　埼玉県
芦田　渚　東京都
阿部　俊彰　神奈川県
荒蒔康一郎　東京都
飯田　惠司　東京都
家近　茂　東京都
五十嵐重雄　東京都
池野　隆光　東京都
伊佐山建志　東京都
石井　榮　東京都
石澤　卓志　千葉県
石塚　邦雄　東京都
石橋　雄三　神奈川県
伊藤　貴博　東京都
伊藤　智夫　東京都
犬塚　靜衛　東京都
井上　俊信　埼玉県
井上　直人　東京都
井上　浩良　東京都
岩瀬　順子　神奈川県
岩田　達明　静岡県
上田　進　埼玉県
上田　紘生　神奈川県
上野悦子・陽子　東京都
臼井　潤　東京都
内村　恒彦　神奈川県
江口　和廣　東京都
江口　麗子　東京都
遠藤　滋　神奈川県
遠藤　正洋　東京都
大島　剛　埼玉県
太田　五郎　神奈川県
太田　達男　千葉県
大塚　宣夫　東京都
大藤　裕康　埼玉県
大森　京太　東京都
岡本　晋　東京都
奥林　群司　東京都
奥山　敦子　東京都
小山内清孝　東京都
尾澤　弘久　神奈川県
小野　敏夫　東京都
小野寺けい子　岩手県
小野寺健一　岩手県
小幡　尚孝　東京都
折田　正樹　東京都
賀澤　裕三　福島県
鹿島　英裕　東京都
片貝　英重　東京都
片柳　彰　東京都
片山　英二　東京都
加藤　壹康　静岡県
加藤　丈夫　東京都
加藤　信弘　東京都
加藤ひろみ　千葉県
加藤　洋一　千葉県
金子　悦子　東京都
金子　修　埼玉県
金子　肇　千葉県
上條　貞夫　東京都
上條　淑子　東京都
川瀬　範子　東京都
河北　恵美　東京都
河北　博文　東京都
川畑　雅義　東京都
菊池　和美　東京都
喜多毟久江　東京都
北村　篤嗣　埼玉県
北村　裕　神奈川県
草刈　隆郎　東京都
熊谷　朝子　東京都
栗原眞知子　埼玉県
畔柳　信雄　東京都
小林こずえ　東京都
小林　裕美　東京都
五味　康昌　神奈川県
酒井　和夫　神奈川県
酒井　重人　東京都
佐藤　武男　東京都
佐藤　正昭　東京都
座間　淑美　神奈川県
佐本　光庸　神奈川県
澤田　初恵　東京都
島田　精一　東京都
島田　敏生　神奈川県
島田　晴雄　東京都
清水　幸雄　千葉県
下河辺美知子　東京都
下田　英一　東京都
新庄　茂方　大阪府
杉山　浩明　東京都
鈴木　庸夫　東京都
鈴木　祐二　東京都
関　兼英　東京都
妹尾　絲子　東京都
宗　神子　大分県
染野　郁郎　東京都
染野　宗子　東京都
田浦　直美　千葉県
髙井　延幸　神奈川県
髙木　宏忠　東京都
高須　幸雄　東京都
髙田　信子　東京都
髙橋　信喜　東京都
竹下　道夫　東京都
竹中富知男　東京都
田中稀一郎　東京都
田中　宏征　兵庫県
田中　將介　東京都
谷口　均　埼玉都
田村　浩章　東京都
田村　弘子　東京都
塚本　和久　東京都
津田　義久　東京都
角田　肇　東京都
積田　孝一　東京都
d日本フィルの会
寺澤　佳代　東京都
東京フロイデ合唱団　東京都
徳田　俊一　東京都
徳田　陽一　東京都
外山　雄三　東京都
中尾　誠利　神奈川県
ナガオカケンメイ　東京都
中島　奈穂　東京都
中島美知子　東京都
長瀬　雅則　東京都
仲田　喜義　東京都
中西　泉　東京都
永野　明宏　千葉県
中村　公一　東京都
中村　禎良　東京都
中本　逸郎　東京都
那須　雄治　東京都
嚢　年紀・綾　東京都
西澤　豊　東京都
西村　永湖　神奈川県
西村　敬子　京都府
西村　醇子　神奈川県
日本フィルハーモニー協会所沢支部　埼玉県
沼口　元彦　東京都
根本　直之　千葉県
箱崎　一彦　千葉県
橋倉　宏行　埼玉県
蓮見　正純　東京都
浜村　亘　静岡県
原　俊　千葉県
針谷　博史　東京都
平井　邦子　神奈川県
平井　嘉朗　東京都
平田　邦夫　神奈川県
平林　直哉　東京都
平松　恒治　東京都
広瀬　勝貞　大分県
深沢　茂実　神奈川県
福田　昭夫　東京都
藤井　裕一　東京都
藤沢　薫　東京都
藤本由紀子　東京都
古瀬　明弘　東京都
星　桂太朗　東京都
堀　丈二　愛知県
本田　博　熊本県
前田　耿史　神奈川県
前田圭一郎　千葉県
牧野　澄夫　東京都
松尾　東京都
松田　譲　東京都
松本　信義　東京都
三木恵美子　神奈川県
三木　繁光　東京都
水島　慶和　神奈川県
峯島　茂之　東京都
村上　純子　埼玉県
村上　眞澄　千葉県
元永　徹司　神奈川県
森　宏之　神奈川県
八木　一郎　山梨県
矢倉　俊紀　東京都
八代　元行　東京都
柳田　淑　神奈川県
柳瀬　友則　神奈川県
谷野　剛　東京都
山越　章弘　長野県
山下　芳広　北海道
山菅　大地　東京都
山田規矩子　埼玉県
山本　高稔　東京都
油井　直次　東京都
吉川　美保　東京都
若井　恒雄　東京都
渡辺　敦郎　東京都
渡辺　和子　東京都
渡邊規久雄　東京都
渡辺　進　東京都
渡邊　直　東京都
渡辺　康匡　東京都
M.K.
匿名41名

日本フィルハーモニー協会 維持会員ご芳名

（2019年7月1日現在・50音順・敬称略）

青木　孝
青木　隆
赤星　弥生
荒井　隆志
有田　正治
石澤　卓志
石田　尚身
石田　英雄
伊藤　茂雄
伊藤　正明
岩崎　貞明
海野　尚久
大塚　宏二
岡登　弘志
小田倉　正
小野澤克巳
柏崎　和枝
加藤　明
金本　順子
神谷　薫
河原田和夫
岸田　正博
北宮千恵子
木村　繁
倉田　茂
蔵貫　義朗
小島　鈴枝
込戸　正人
斎木　典子
坂本　博志
相良　幸男
佐藤　雅道
佐藤　安雄
澤口佳乃子
下山　泰彦
菅原　章文
鈴木　重澄
鈴木　重行
鈴木　富美
住江　慶子
高田　昌樹
高津　正徳
武井　新
武田　幸子
多田　栄一
田中　諄
坪井　憲治
東保裕の介
富澤　裕
富田　節子
永井　福枝
長沢　光子
永田　康
中山　泰子
野田　孝
野中　和行
羽生　賢次
早川征一郎
広田　孝志
深沢　茂実
藤井　行雄
藤川　寿彦
藤村　文二
古川　武志
古瀬　明弘
本堂　毅
増田　文彦
松井　務
皆川　文弘
三好　敦生
民放労連関東地方連合会
柳瀬　友則
山縣　博
山下　芳広
横瀬　浩
渡辺　勝次
渡辺　政則

楽団紹介

◆ 創立指揮者	渡邉 暁雄	◆ 首席指揮者	ピエタリ・インキネン
◆ 桂冠名誉指揮者	小林 研一郎	◆ 桂冠指揮者 兼 芸術顧問	アレクサンドル・ラザレフ
◆ 名誉指揮者	ルカーチ・エルヴィン	◆ 正指揮者	山田 和樹
◆ 名誉指揮者	ジェームズ・ロッホラン	◆ ミュージック・パートナー	西本 智実
◆ 客員首席指揮者	ネーメ・ヤルヴィ		

ソロ・コンサート マスター
木野 雅之

ソロ・コンサート マスター
扇谷 泰朋

アシスタント・コンサートマスター
千葉 清加

第1ヴァイオリン
太田 麻衣

第1ヴァイオリン
九鬼 明子

第1ヴァイオリン
榊 渚

第1ヴァイオリン
齋藤 政和

第1ヴァイオリン
佐々木 裕司

第1ヴァイオリン
佐藤 駿一郎

第1ヴァイオリン
田村 昭博

第1ヴァイオリン
中谷 郁子

第1ヴァイオリン
西村 優子

第1ヴァイオリン
平井 幸子

第1ヴァイオリン
本田 純一

第2ヴァイオリン
遠藤 直子

第2ヴァイオリン
大貫 聖子

第2ヴァイオリン
岡田 紗弓

第2ヴァイオリン
加藤 祐一

第2ヴァイオリン
神尾 あずさ

第2ヴァイオリン
川口 貴

第2ヴァイオリン
竹内 弦

第2ヴァイオリン
竹歳 夏鈴

第2ヴァイオリン
豊田 早織

第2ヴァイオリン
町田 匡

第2ヴァイオリン
山田 千秋

ヴィオラ
小俣 由佳

ヴィオラ
小池 拓

ヴィオラ
小中澤 基道

ヴィオラ
高橋 智史

ヴィオラ
中川 裕美子

ヴィオラ
中溝 とも子

ヴィオラ
松澤 稚奈

ソロ・チェロ
菊地 知也

ソロ・チェロ
辻本 玲

チェロ
石崎 美雨

チェロ
伊堂寺 聡

チェロ
江原 望

チェロ
大澤 哲弥

チェロ
久保 公人

チェロ
山田 智樹

楽団紹介

チェロ
横山 桂

コントラバス
菅原 光

コントラバス
鈴村 優介

コントラバス
高倉 理実

コントラバス
髙山 智仁

コントラバス
田沢 烈

コントラバス
成澤 美紀

コントラバス
宮坂 典幸

フルート
遠藤 剛史

フルート
難波 薫

フルート
真鍋 恵子

オーボエ
佐竹 真登

オーボエ
杉原 由希子

オーボエ
中川 二朗

オーボエ
松岡 裕雅

クラリネット
伊藤 寛隆

クラリネット
楠木 慶

クラリネット
照沼 夢輝

クラリネット
堂面 宏起

ファゴット
大内 秀介

ファゴット
木村 正伸

ファゴット
鈴木 一志

ファゴット
田吉 佑久子

客演首席 ホルン
丸山 勉

ホルン
伊藤 恒男

ホルン
宇田 紀夫

ホルン
原川 翔太郎

ホルン
村中 美菜

ソロ・トランペット
オッタビアーノ・クリストーフォリ

トランペット
中里 州宏

トランペット
中務 朋子

トランペット
橋本 洋

トランペット
星野 究

トロンボーン
伊波 睦

トロンボーン
岸良 開城

トロンボーン
藤原 功次郎

バス・トロンボーン
中根 幹太

テューバ
柳生 和大

ティンパニ
エリック・パケラ

パーカッション
福島 喜裕

ハープ
松井 久子

ステージ・マネージャー
阿部 紋子

ライブラリアン
鬼頭 さやか

理事長
平井 俊邦
副理事長
五味 康昌
常務理事
後藤 朋俊
中根 幹太
理事
石井啓一郎
遠藤 滋
小島 順彦
島田 敏生
田村 浩章
徳田 俊一
戸所 邦弘
福本ともみ
評議員会長
加藤 丈夫
評議員
青井 浩
荒蒔康一郎
石塚 邦雄
石村 等
植村 徹
内川 清雄
海堀 周造
梶浦 卓一
河北 博文
喜多 崇介
木村 惠司
久保田 隆
小林研一郎
佐々木経世
島田 精一
髙橋 和夫
津田 義久
野間 省伸
堀越 作治
山口多賀幸
監事
上條 貞夫
名誉顧問
熊谷 直彦
島田 晴雄
田邊 稔

アドバイザリー・ボード
大島 剛
小野 敏夫
小網 忠明
後藤 茂
武田 隆男
田邊 稔
松本 冠也
溝口 文雄
コミュニケーション・ディレクター
マイケル・スペンサー
マネジメント・スタッフ
淺見 浩司
磯部 一史
井原 由紀
江原 陽子
及川ひろか
小川紗智子
賀澤 美和
柏熊 由紀子
川口 和宏
佐々木文雄
佐藤 孝雄
澤田 智夫
杉山 綾子
高橋 勇人
田中 正彦
槌谷 祐子
中村沙緒里
二平 俊二
長谷川珠子
馬場 桃子
兵 優子
藤田 千明
別府 一樹
益満 行裕
山岸 淳子
吉岡 浩子
アドヴァイザー
新井 康允
南部 洋一
団友
青柳 哲夫
青山 均
赤堀 泰江
浅井 俊雄
新井 豊治
石井啓一郎
江藤 瓊子
遠藤 功
大石 修
大川内 弘
大味 修
筧 美知子
金本 順子
蒲谷 隆行
菊田 秋一
吉川 利幸
工藤 光博
小林 俊夫
小山 清
斎藤 千種
佐藤 玲子
髙木 裕子
髙木 雄司
高木 洋
立川 和男
蔦井康三郎
堂阪 俊子
富樫 尚代
豊田 尚生
永田 健一
中務 幸彦
奈切 敏郎
畑井紀代子
平賀 法子
松本 克巳
松本 伸二
三谷 昭平
三本 克郎
宮武 良平
三好 明子
森 茂
山下 進三
山科 淑子
山本 辰夫
渡辺 哲雄

（2019年7月1日現在）

日本フィルの公益活動を応援してください

1. コンサートを聴いて応援する

[東京／横浜定期会員]

月に1度のサントリーホール、横浜みなとみらいホールで聴く贅沢な時間。S席年間会員（全10回）の場合、1公演あたり4,800円に!1回券10回購入と比べると約40％お得です。

定期会員6つの特典

特 典 ① 専用指定席：会場にお客様の専用指定席ができます。
特 典 ② 優先確保：次期シーズンのお席を優先的に確保します。
特 典 ③ チケット振替可能：東京定期／横浜定期間でチケットの振替が可能です。ご都合によりご来場できない場合、東京／横浜定期演奏会を同月内の東京／横浜定期演奏会にお振替いただけます。
特 典 ④ 優先予約：日本フィル主催公演を一般発売の1週間前からご予約いただけます。
特 典 ⑤ 1割引：日本フィル主催公演を1割引でお求めいただけます。
特 典 ⑥ ホテル割引：開演前・終演後はお近くのホテル（東京定期：ANAインターコンチネンタルホテル／横浜定期：横浜ベイホテル東急）にてくつろぎの時間をお過ごしください。

[サポーターズクラブ]

音楽に関心をもつ皆様に「日本フィルのサポーター」として、日本フィルの活動をご支援いただくシステムです。招待券のプレゼント、日本フィル主催公演チケット優先受付・ご優待（1割引）、会報誌・イベントのご案内などの特典満載。さらにお友達を10人ご紹介いただくと、定期会員券（半期）を進呈いたします。

※クレジットカードで直接申込みいただけます。 https://www.facebook.com.JPOsupportersClub

2. 個人の寄付で応援する

[パトロネージュ（個人寄付会員）] 寄付（1口・年額）… 3万円／5万円／12万円／20万円／50万円／100万円

＊税制上の優遇措置を受けることができます。

日本フィルの演奏活動、社会貢献活動をさらに充実させるため、パトロネージュ・システムによる個人の皆様のご支援をお願いしております。

[日本フィルハーモニー協会] 寄付（1口・年額）… 一般会員5千円／維持会員2万円／他

＊金額により税制上の優遇措置を受けることができます。

「日本フィル協会」は1973年の創設以来、「市民とともに歩むオーケストラ」日本フィルを物心両面で支え、地域で楽団員と協力して行うコンサート作りなどユニークな活動を行ってきました。会員と日本フィルをつなぐ会報紙『市民と音楽』『とおんきごう』が隔月でお手元に届くなど特典があります。

[オンライン寄付]

日本フィルの「被災地に音楽を」ほか、多彩な活動を支えていただくために、温かいご支援を心よりお願いいたします。クレジットカードで簡単に寄付できます。 https://japanphil.or.jp/support/fundraising

[遺贈]

遺贈とは所有されている財産（一部または全部）を遺言によって、公益法人や社会貢献団体に寄付することです。日本フィルでは生前のご寄付のほかに、遺贈も承っております。遺言書の作成、手続きなどは、提携（信託）銀行をご紹介いたします。日本フィルハーモニー交響楽団総務部へご相談ください。

社会のより一層の発展にとって、文化の成熟は欠くことができないものとなっております。日本フィルも、その一翼を担う存在として、皆様とともにその社会的役割をさらに充実させてまいりたいと考えております。どうぞ温かいご支援をお願い申し上げます。

3. クラウドファンディングで応援する

[コンサートの聴き手・支え手を広げるプラットフォーム]

2018年度、クラウドファンディングのプラットフォーム「Readyfor」を通して4つの資金獲得プロジェクトに取り組み、合わせて1,300万円を超えるご支援と、日本フィルの社会的活動を応援して下さる新たな方々との出会いの機会を頂きました。ご支援を原資に、障害のある子供、社会的に困難な状況にある子供と家族1000人以上を日本フィルのコンサート会場に招待しました。

現在落合陽一×日本フィルプロジェクト第3弾プロジェクトを実施中(2019年8月1日まで)、また今後も積極的にこの仕組みを活用し日本フィルを支える人々の輪を広げてまいります。

4. 法人の寄付・協賛で応援する

[法人寄付(特別会員)〈寄付会員〉] 年会費36万円(月3万円)/1口より

演奏活動、教育活動、地域活動への共感、ご理解を下さる多くの企業法人の皆様へご支援をお願いしております。幅広い皆様のお力添えにより、事業の一層の充実を図りたいと願っております。定期演奏会のご案内、プログラム誌へのご芳名の掲載などの特典があります。

[協賛]

名曲コンサート、サンデーコンサート、第九演奏会など、各種公演を日本フィルとともに盛り上げませんか。冠協賛公演では、商品の展示も可能です(ホールにより差異あり)。詳細は問い合わせください。

[活動支援寄付]

活動全般・特定の事業に対する寄付で日本フィルをご支援ください。

＊法人寄付は損金算入の枠拡大を利用できます。

個人の寄付は税額控除が受けられます!

- 公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団への寄付金は、税制上、税額控除の優遇措置が受けられます。
- 東京都・杉並区にお住まいの方は個人住民税の寄付金による控除の対象となります。
- 相続により取得した財産の一部または全額を寄付した場合、寄付した財産に相続税が課税されません。

＊詳しくは国税庁のサイトをご覧ください。

日本フィルハーモニー交響楽団〈こんな活動をしています〉　2018年度活動報告

[Triptyque トリプティーク第14号]
編集・発行　(公財)日本フィルハーモニー交響楽団　2019年7月
〒166-0011　東京都杉並区梅里1-6-1　TEL.03-5378-6311　www.japanphil.or.jp　office@japanphil.or.jp

公益財団法人 日本フィルハーモニー交響楽団
〒166-0011 東京都杉並区梅里1-6-1　TEL.03-5378-6311
http://www.japanphil.or.jp

チケットご予約・お問い合せ
［日本フィル・サービスセンター］
TEL.03-5378-5911(平日10時～17時)　FAX.03-5378-6161(24時間)
E-MAIL：order-ticket@japanphil.or.jp

公式Twitter
@Japanphil

資料6-5

日本フィルハーモニー交響楽団

第6回 ヨーロッパ公演報告書

©山口 敦

JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA

6th EUROPE TOUR 2019 REPORT

人、音楽、自然——日本フィルのテーマです。

JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA

— 創立指揮者 渡邊曉雄 —

JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA

6th EUROPE TOUR 2019 REPORT

ごあいさつ

13年ぶりの日本フィルヨーロッパ公演、フィンランド・オーストリア・ドイツ・英国の4か国10公演。自信と大きな成果を得て終えることができましたことをご報告申し上げます。

財政的に苦しい日本フィルがこの公演を完遂できましたのは、ひとえに皆様の熱いご支援の賜物であり、心より御礼申し上げます。

厳しい日程ではありましたが、楽団員が持てる力を最大限発揮し、日本フィルならではの演奏を各国の皆様にお届けできましたこと、そして、高い評価をいただいたことは楽団員全員にとって貴重な経験となりました。将来への財産として、大きな自信を得ることができたと確信しております。

今回はフィンランドが一つのポイントでした。外交関係樹立100周年、創立指揮者渡邉曉雄生誕100年の年に、フィンランド出身である首席指揮者ピエタリ・インキネンと初のフィンランド訪問を成し遂げました。

そしてウィーン・ムジークフェラインでの演奏、ドイツ中堅都市・ロンドン・リーズ・エディンバラを廻り、各地で高い評価を得ることができました。特にウィーン、ロンドンでの好評は日頃の蓄積の成果が顕れたものと思っています。また、ヨーロッパの演奏環境、クラシック音楽の根づいた生活の豊かさも併せ実感することもできました。

各公演会場のロビーでは東北の被災地での活動や現状をお知らせするパネル展示と資料配布をし、理解していただくと共に、インキネンの故郷コウヴォラでは音楽を学ぶ子供たち対象に、日本フィルならではの音楽ワークショップを実施し、翌朝の地元の新聞で一面を飾るなど多くの方々に共感をいただきました。

ヨーロッパでの音楽を通じた文化交流で得たものをこれからの演奏・音楽活動に充分に生かし、芸術性と社会性を兼ね備えた楽団として一層成長していきたいと思っています。

最終日、エディンバラでのカーテンコールの中、感謝の気持ちで胸が熱くなったことを思い出しつつ、改めて皆様の温かいお心に御礼を申し上げる次第です。

理事長　平井 俊邦

公演日程

2019年 4月

2日	ヘルシンキ(フィンランド) Musiikkitalo【Program A】
3日	コウヴォラ(フィンランド) Kuusankoskitalo【Program A】
5日	ヴィルヘルムスハーフェン(ドイツ) Stadthalle【Program B】
6日	ヴォルフスブルク(ドイツ) Theater Wolfsburg【Program B】
7日	レーゲンスブルク(ドイツ) Audimax【Program B】
8日	ウィーン(オーストリア) Wiener Musikverein【Program D】
9日	フュルト(ドイツ) Theater Fürth【Program C】
12日	ロンドン (英国) Cadogan Hall【Program D】
13日	リーズ (英国) Town Hal【Program D】
14日	エディンバラ (英国) Usher Hall【Program C】*

主なプログラム

指揮:ピエタリ・インキネン
［日本フィル首席指揮者］

ピアノ:ジョナサン・ビス

ピアノ:ジョン・リル*

チェロ:シェク・カネー=メイソン

4/2ヘルシンキ公演と4/3コウヴォラ公演は日本フィルオフィシャルYouTubeチャンネルにてライヴ配信いたしました。
(映像製作:テレビマンユニオン)

【Program A】

武満徹：弦楽のためのレクイエム
エルガー：チェロ協奏曲
シベリウス：交響曲第2番
※ヘルシンキのみ冒頭にフィンランディア

【Program B】

ラウタヴァーラ：In the Beginning
ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第3番
チャイコフスキー：交響曲第4番

【Program C】

ラウタヴァーラ：In the Beginning
ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第3番
武満徹：弦楽のためのレクイエム
シベリウス：交響曲第2番

【Program D】

ラウタヴァーラ：In the Beginning
エルガー：チェロ協奏曲
武満徹：弦楽のためのレクイエム
シベリウス：交響曲第2番

「インキネン時代の日本フィル」、ヨーロッパ4か国10都市に大きな足跡

©山口 敦

池田 卓夫　音楽ジャーナリスト＠いけたく本舗

1)概要

日本フィルハーモニー交響楽団は2019年4月1日から16日の間に10都市を回る第6回ヨーロッパ公演をフィンランド人首席指揮者、ピエタリ・インキネンとともに行った。2019年に日本とフィンランドの外交関係樹立100周年、日本フィル創立指揮者でフィンランド人を母に持つ渡邉曉雄の生誕100周年が重なる千載一遇の機会をとらえたものだ。ウィーンでは日本とオーストリアの友好150周年も兼ね、英国3か所の公演はラグビー・ワールドカップ日本大会から東京オリンピック、パラリンピックへの橋渡しを担う「日英文化季間」の参加プログラムに組み入れられていた。オーケストラ外交の典型ながら、意外にも、日本フィルが渡邉の国フィンランドで公演するのは初めてだった。

2)旅程とプログラム

ツアーは①首都ヘルシンキとインキネンの出身地コウヴォラからなるフィンランド編、②ドイツ・ニーダーザクセン州ヴィルヘルムスハーフェンとヴォルフスブルク、バイエルン州レーゲンスブルクとフュルト、オーストリアの首都ウィーンからなるドイツ語圏編、③ロンドン、リーズ、エディンバラの英国編----の3パートに分かれていた。

プログラムはメインの交響曲にシベリウスの第2番、チャイコフスキーの第4番、協奏曲に英国出身の20歳の新鋭シェク・カネー＝メイソン独奏のエルガー「チェロ協奏曲」、ドイツ編が中堅のジョナサン・ビス、英国編がベテランのジョン・リルとソリストが入れ替わるベートーヴェンの「ピアノ協奏曲第3番」、日本・フィンランドの交流を象徴し、時にアンコールへと回る管弦楽曲にシベリウスの「交響詩《フィンランディア》」「悲しきワルツ」、インキネンが世界初演したラウタヴァーラの遺作「In the Beginning」、武満徹「弦楽のためのレクイエム」。組み合わせを変えて「A」から「D」の4種を用意した。オーケストラと指揮者の力量を正直に示し、音楽を通じた文化交流の意義を問う素晴らしいメニューであり、ツアーの進行とともに、演奏水準を着実に切り上げていった。

すべての公演会場のロビーには、東日本大震災(2011年)の被災地で日本フィル楽団員が200回以上も地道に続けてきた音楽による支援、教育などの活動を紹介するパネルを展示した。開演前は事務局員が立ち会い、現地の聴衆の熱心な質問に対応。人と音楽、自然との触れ合いを大切にする楽団の姿勢は、演奏以外の場面にもあらわれていた。

3)フィンランド

豊田泰久氏が音響設計を手がけ、2011年に開場したヘルシンキ音楽センター(1,700席)での初日(4月2日)はリハーサル時間が極端に短かったこともあり、演奏の完成度よりは熱気で乗り切った。ヘルシンキで初めて落ち合ったカネー＝メイソンとインキネン、日本フィルだが、いとも易々と楽器を操りながらも技が表に出ず、つねに人肌の温もりを感じさせるチェリストの歌心は管弦楽全体に即、なじんだ。インキネンは音の出し方、感情のベクトルの方向性などでフィンランドのオーケストラと全く異なる持ち味の日本フィルの特色をフルに生かし、マッチョでヴィルトゥオージティの高いシベリウスを試みた。あまりのテンションにヘルシンキでは演奏に傷も出たが、翌日のコウヴォラからはペースをつかみ、大成功を収めた。指揮者の出身地ということもあり、ツアー中ただ1回のアウトリーチプログラムもファシリテーターのトロンボーン奏者、伊波睦と弦楽四重奏、日本＝フィンランド語通訳の規模で実施。80人近い子どもが集まった。

©山口 敦

©山口 敦

4)ドイツ＆オーストリア

ドイツ語圏ではカネー＝メイソンのウィーン・デビューを兼ねたムジークフェライン(楽友協会)大ホール公演(8日)を除き、ピアノのビスがドイツ国内4か所で共演した。フュルト市立劇場だけがベーゼンドルファー、他3か所はスタインウェイだったが、それぞれの楽器の音色やタッチの軽重はかなり異なった。ビスはそれぞれの特色に即し、「ベートーヴェンのハ短調」を掘り下げる、同じ調性のモーツァルト「ピアノ協奏曲第24番」から受けた影響の部分を徹底して強調する、2人の作曲家の根底に流れるウィーン古典派の様式感を前面に出す…といったギアチェンジを巧みに行い、興味深かった。

©山口 敦

©山口 敦

ここまでのパートのハイライトが、ウィーン公演だったことに疑いの余地はない。ツアー中の4月4日に20歳を迎えたばかりのカネー＝メイソンはウィーン・デビューに特段緊張する様子もなく、いつも通りに心のこもった音楽を奏でた。ただムジークフェラインの芳醇な音響と彼の暖色系のチェロの音色の相性が予想外に悪く、管弦楽に吸われがちになってしまったのは気の毒だった。

しかしながら、真のセンセーションはプログラムの最後に置かれたシベリウスの「交響曲第2番」。ゲネプロでホールの音響特性に合わせた微調整を入念に行ったのが奏功、出だしの柔らかく軽やかな響きに魅了されたのも束の間、ヘルシンキでインキネンが仕掛けた「マッチョなシベリウス」の実験がついに、予想を超えた成果を発揮しはじめた。フレーズのエッジを明確に打ち出した後はムジークフェラインの音響に身を委ね、弱音を起点とした音楽を息の長いフレージングでじっくりと積み上げ、衝撃的な最強音の爆発へと導いていく。今回のツアーではソロ・コンサートマスターの木野雅之、扇谷泰朋、ソロ・チェリストの菊地知也、辻本玲とトップ2人がつねにそろって舞台に乗り、万全の態勢で臨んでいる。特にチェロセクションの音の厚みはアンサンブル全体のかなめとして機能しており、ヴィオラとコントラバスの音の輝きにも貢献するところが大きかった。

アンコールではさらに、「悲しきワルツ」「交響詩《フィンランディア》」とシベリウス2曲が奏でられ、聴衆の興奮はピークに達した。もちろん、ブラヴォーも盛大に。演奏に参加した全員が「ウィーンの成功」ではなく「音楽への奉仕」の思いで溶け合い、シベリウスのメッセージを余すところなく伝えた。インキネンと日本フィルが深く噛み合い、ついに「渡邉曉雄のシベリウス」の呪縛から解き放たれた記念すべき一夜となった。

5)危機管理

ウィーンで「出し切った」反動からか、楽団員2人、ステージスタッフ1人が「B型インフルエンザに感染」と診断された。ペスト禍以来、感染症に敏感なオーストリア政府の規制に従い、3人はツアーを離脱して治癒までの間、ウィーン滞在を余儀なくされた。残りのメンバーは翌日、ドイツへ戻りニュルンベルク近郊のフュルトに入った。市立劇場に着くと、救急車とパトカーの物々しい〝出迎え〟を受けた。ウィーンからの連絡が大げさに伝わり、日本フィル一行は危うく「パンデミック(感染症)集団」と認定されるところだったが、誤解はすぐに解け、公演は予定通り行われた。ソリストのビスはフュルトが最後。ドイツで唯一のシベリウスの交響曲も成功裏に奏でられた。今後の課題として、90人近い規模で2週間単位の長いツアーを行う場合、「医師か看護師を同行させるべきではないか」といった声も、楽団員からは上がっていた。

6)英国

ロンドンとリーズはチェロのカネー＝メイソンの人気で売り切れ。若い聴衆も多かった。蓋を開ければチェロの内省的なソロに負けず劣らず、あるいはそれ以上に、インキネンと日本フィルのシベリウスに人々は熱狂した。ロンドンからリーズまでは5時間のバス移動。そのままゲネプロ、本番をこなしてリーズには泊まらず、再びバス5時間の移動で北上、スコットランドの首都エディンバラのホテルにチェックインした時刻は、午前3時30分だった。日曜日で、アッシャーホールの公演はマチネ。しかもベートーヴェンの協奏曲のソリストが東京での凱旋定期と同じジョン・リルに替わるためゲネプロも必要と、過酷なスケジュールだったが、リルの絶妙な現場感覚と気遣いで最短時間の打ち合わせに終わった。本番はツアー中最高の出来栄えとなり、リルの独奏も味わい深い。現地メディアにも良い批評が出た。ツアー全体を通じ「日本のオーケストラ」に対する偏見を述べた論評は一切なく、「世界水準のアンサンブル」「管楽器の奏者の名人芸」など、すべて肯定的だった。参加者全員、寝不足も忘れて深夜まで、勝利の美酒に酔った。

©山口 敦

名産のスコッチ・ウィスキーをインキネンと酌み交わしながら、コンサートマスターの扇谷が「これ、ブログに書いてね」と前置きして私に漏らした言葉、「僕たち、今夜でマエストロと本当の友だちになれた」は、楽団員全員が共有する思いだろう。

今から半世紀前の1969年、渡邉はマンチェスターのBBC(英国放送協会)ノーザン交響楽団(現在のBBCフィルハーモニック)の英国内ツアーの指揮を任されて当時25歳、チャイコフスキー国際コンクールに優勝する1年前のリルをソリストに従え、リーズのヴィクトリアホールやエディンバラのアッシャーホールなどを回っていた。英国シベリウス協会の説明によると、渡邉は「7曲あるシベリウスの交響曲の中で最も解釈が難しいとされる第6番のスペシャリストで、英国内ほとんどのメジャー・オーケストラを制覇した」という。当然、ロンドンにも客演歴が残っている。最初は誰も気づかなかった。日本フィル第6回ヨーロッパ公演の英国パートは期せずして、偉大な創立指揮者の足跡をたどる旅だったのだ。これで、渡邉生誕100周年のミッションの方も無事完結した。

7)私的な結論

だが、これからは続くベートーヴェンやドヴォルジャークの交響曲シリーズなどを通じ、インキネンと現役世代の若い楽員たちが21世紀半ばにかけての新しい日本フィルの文化を築いていく場面である。ツアーで限界を突破した演奏水準を維持しつつ評価と集客力を高め、次のツアーやレコーディングも実現させてほしいと、同行記者は切に願った。

日本フィルオフィシャルWEBサイト「ヨーロッパ公演特設ページ」にツアー日記掲載中

第6回 ヨーロッパ公演

寄付者ご芳名

（50音順・敬称略）

相澤　岩子
相澤　光江
青木　隆
青山　均
秋間　実
秋山　千恵子
浅野　純次
浅見昭子税理士事務所
厚　敬子
厚田　理郎
阿部　俊彰
安部　雅雄
雨谷　世喜子
新井　恭子
荒蒔　康一郎
飯田　惠司
池上　義春
池田　博
池谷　光司
石井　里枝
石井　静子
石井　将
石毛　和子
石澤　卓志
石塚　邦雄
伊藤　圭子
今村　冨美枝
岩田　邦勝
岩田　達明
岩本　晴子
上薗　重治
上野　悦子・陽子
上野　由幾恵
上原　英治
植村　允勝
上本　展裕
鵜飼　力
宇田川　とも子
内野　和博
海野　尚久
江口　眞佐子
榎本　靖
税理士法人エルビーエー
遠藤　滋
大石　修
大内　栄和
大久保　昇
大黒　寛
大澤　基宏
大島　剛
太田　孝子
太田　喜雄
大坪　賢二
大友　公子
大原　武
大藤　裕康
大牟田日本フィルの会
大力　槙子
岡田　光好
岡松　哲
岡村　佐致子
小川　史人
小笠原　悟
沖　武重
奥野　吉矩
奥林　群司
尾﨑　恭一
小田倉　正
小田　敏雄
小野寺　けい子
小野寺　健一
小畑　教子
小畑　秀正
小原　磯則
尾曲　義雄
織地　俊幸
折田　正樹
筧　美和子
柏木　明
粕川　健一
加藤　壹康
加藤　隆一
金井　奈保子
金本　順子
金子　昌男
鎌田　好子
上條　貞夫
上條　淑子
香山　和子
河北　恵美
河北　博文
河津　郷子
河野　祐子
川畑　雅義
河原　詳次
河村　フクエ
河原　佑子
菅野　博仁
菊池　和美
菊池　陽子
北川　幹夫
喜多　崇介
北村　篤嗣
北村　眞
北村　裕
木野　惠以子
清宮・生山法律事務所
辯護士 清宮 國義
久保田　恵子
久保田　伸一
窪田　美貴子
倉橋　寿子
栗山　昌子
小泉　清子
小出　昭夫
甲賀　一宏
香村　章夫
古賀　容子
胡口　靖夫
小島　光晴
小手川　励人
後藤　範章
小宮　堇
小山　清
是枝　洋
坂本　博志
佐川　真美
佐藤　正知
座間　淑美
澤田　直隆
澤畠　篤
宍戸　秀行
四戸　孝紀
清水　眞人
清水　賢
下河辺　美知子
下條　英敏
生島　貴司
白柳　和男
菅沼　曜子
杉浦　禮子
杉本　功
鈴木　薫
鈴木　重行
鈴木　新一
鈴木　智恵子
鈴木　弘美
鈴木　靖子
住江　慶子
隅　修三
妹尾　絲子
宗　神子
田浦　宏己
髙井　延幸
髙木　洋
髙木　宏忠
髙田　信子
髙田　昌樹
高津　正徳
髙橋　充
高原　伸夫
髙柳　和子
高山　榮子
滝田　政之
多久島　昇
田口　知子
武田　幸子
武田　正一郎
橘　寛
橘　正義
田中　公裕
田中　実
田辺　佐喜江
谷　浩二
谷﨑　幸雄
田村　浩章
知野　隆二
栂村　光彦
辻田　文也
土屋　幸三
常岡　靖夫
常川　さゆり
常田　稔雄
恒吉　政人
釼木　純一郎
dSCHOOL "わかりやすい
オーケストラ" 参加者一同
d 日本フィルの会
手島　洋
株式会社
照国計算センター代表
取締役 塩倉　宏
東郷　悦子
藤堂　実代子
外川　チエ子
富田　節子
外山　雄三
豊田　美知江
鳥海　京子
直井　哲郎
長岡　彰
中尾　純子
中尾　昌弘
中島　美知子
永田　健一
永田　康
永野　琢夫
中村　彰
中村　茂子
医療法人 中村医院
中村　晋
中山　佳也
梨木　信彦
並河　東志夫
並河　俊子
納谷　晋一
難波　卓人
南部　玲子
新野　泰秀
西　恵美子
西村　醇子
日本フィルハーモニー協会合唱団
根本　直之
根本　保子
野中　和行
萩谷　日出子
萩原　しのぶ
橋本　充
畑井　馨
畠中　紀美代
鉢呂　沙織
服部　訓子
馬場　國昭
早川　明男
針谷　博史
春口　和子
菱村　都巳
平手　文康
平野　新太郎
平林　直哉
広嶋　清志
樋渡　宏寿
フィンランド公演
応援ツアー 参加者一同
医療法人 深川皮膚科
理事長 深川 宗男
深沢　茂実
深津　輝雄
福澤　嘉乃
福田　昭夫
藤井　厚裕・美和子
藤井　典子
藤岡　幸夫
藤田　一紀
藤平　直士
藤村　文二
藤本　和子
古川　博味
古瀬　明弘
保坂　睦子
星　昇次郎
星野　弘明
細野　幸子
堀野　定雄
本田　健三
本田　博
前田　正明
眞方　律子
牧野　正博
眞塩　陽一郎
増島　葉子
増田　達治
松井　光由
松岡　恭子
松田　勝次
松丸　良子
松本　美香
松山　幸世
丸山　勝芳
三浦　綾子
三浦　康男
三重野　勝俊
三木　繁光
三角　紘容
簑島　洋一
三松　直人
宮崎 健一・のり子
宮本　直彦
武蔵野合唱団
武藤　千代子
村上　幸恵
村上　覚
村上　純子
村上　毅
村田　孝子
村野　祥子
室蘭日本フィルを聴く会
望月　廣一
元永　徹司
森　宏之
矢倉　俊紀
八代　元行
柳澤　敏子
柳田　睦子
柳田　淑
矢野　和代
矢野　留美子
山上　典彦
山口　達之
山﨑　貢
油井　直次
横瀬　浩
吉川　美保
吉田　美江子
吉田　洋一
吉中　博
吉野　恭博
吉羽　治
呂　道子
若林　とも子
脇　拓也
渡辺　和子
渡邉　定義
渡辺　進
渡辺　宏
渡辺　和

他会場等でも、たくさんの皆様よりご寄付をいただきました。

第6回 ヨーロッパ公演

助成団体・企業御芳名

今回のヨーロッパ公演につきまして、以下の団体・企業の皆様より助成金ならびにご寄付をいただきました。ご支援ご協力に心より感謝いたします。

（50音順・敬称略）

【助成】

文化庁文化芸術振興費補助金
（国際芸術交流支援事業）
独立行政法人 日本芸術文化振興会

公益財団法人朝日新聞文化財団

公益財団法人 花王 芸術・科学財団

一般社団法人東京倶楽部

三菱UFJ信託芸術文化財団

The Scandinavia-Japan Sasakawa Foundation
4/2、3（フィンランド公演）

4/12、13、14（英国公演）

【協賛】

FINNAIR

MUFG 三菱UFJニコス株式会社

JAPAN AIRLINES

鹿島 KAJIMA CORPORATION

【寄付】

アイング株式会社
株式会社アドービジネスコンサルタント
株式会社泉商会
株式会社内田洋行
宇部興産株式会社
エレコム株式会社
株式会社大場造園
株式会社岡三証券グループ
株式会社カナック企画
株式会社グロッセリー
株式会社興建社
株式会社コバヤシ
コンパッソ税理士法人
昭和電工株式会社
株式会社センゾー
大栄不動産株式会社
株式会社泰秀
株式会社千代田テクノル
株式会社東北新社
トーターエンジニアリング株式会社
株式会社永谷園ホールディングス
中津興産株式会社
ナクソス・ジャパン株式会社
日本技術貿易株式会社
日本電子株式会社
根本特殊化学株式会社
株式会社ノジマ
ハウス食品グループ本社株式会社
ハナマルキ株式会社
非破壊検査株式会社
富国生命保険相互会社
一般財団法人藤本育英財団
丸美屋食品工業株式会社
三菱ガス化学株式会社
三菱地所株式会社
武蔵商事株式会社
株式会社村田製作所
ユウキフーヅシステム株式会社
横河電機株式会社
米持建設株式会社
株式会社リンレイ
株式会社LEOC

【後援】

JAPANI SUOMI 100 VUOTTA 2019
在フィンランド日本国大使館
（4/2,3フィンランド公演）

JAPAN-AUSTRIA 1869-2019
日本オーストリア友好150周年
（4/8ウィーン公演）

BOTSCHAFT JAPAN ÖSTERREICH
在オーストリア日本国大使館
（4/8ウィーン公演）

Japan-UK Season of Culture 2019-20
日英文化季間
（4/12,13,14英国公演）

日本フィルハーモニー交響楽団　第6回 ヨーロッパ公演報告書
〒166-0011 東京都杉並区梅里1-6-1 TEL.03-5378-6311 https://www.japanphil.or.jp/
2019年6月1日発行

資料6-6

日本フィルハーモニー交響楽団

被災地に音楽を

～ 東日本大震災 被災地での6年間の活動記録 ～

巻門脇地区

人、音楽、自然……日本フィルのテーマです。

JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA

「音楽家に何ができるか」を問いながら

「被災地に音楽を」の活動は6年を経て200回を超えました。

震災の日とその後、広域にわたって甚大な被害を受けた東北の映像を目のあたりにし、抗うことのできない自然の力の凄まじさを改めて実感させられました。被災された方々の状況を直視することができず、なんともやりきれない思いを感じると同時に、「自分に何かできることはないのか、これでよいのか」と、多くの人々が深く思い悩みました。

私たちは音楽団体として、音楽家として、自分たちには何ができるのだろうと問い続けました。そして、被災された方々に音楽を届けることで被災された方々に少しでも寄り添い励ますことが大事なのではないだろうかと考えました。

ほんとうにつらい時、傷ついた人にかける言葉はあまりに難しく、あまりに無力です。しかし音楽は不思議な力を持っています。癒しの力、励ましの力、人と人の心をつなげるコミュニケーションの力、歓びの力。音楽の力を通じて、生きていくことへの共通の思いを届けていきたいと強く思いました。

この思いに共感いただいた多くの個人の皆さまからの温かい寄付と、現地の方々の協力によりスタートしたこの活動の輪は、その後、賛同してくださった企業に広がり、避難所、仮設住宅居住者、学校の児童・生徒等や故郷を離れて避難されている方々を対象として、コンサートや演奏指導を実施してきました。この「被災地に音楽を」の活動は6年間途切れることなく今も継続され、これにより新たに繋がった多くの方々との交流も続いています。

私たちが、被災地の方々にどれだけ寄り添えたかは分りません。でも、情況が変わっていく中、これからも音楽が必要とされるのであれば、この活動を終えることはありません。

日本フィルハーモニー交響楽団一同

東日本大震災発生の当日

東日本大震災が発生した2011年3月11日の夜、日本フィルは都内での定期演奏会を予定していました。地震発生を受け、安全の確保、質の高い音楽の提供を大前提とし、お客様が一人でも来場されるのであれば予定通りコンサートを開催することとしました。

当日は77名、翌日は758名のお客様にご来場いただきました。お客様、指揮者、演奏家が哀悼と祈りを込めた演奏会は、ホール全体がひとつとなった独特の雰囲気のなかで行われました。

震災当日のコンサート会場客席

「被災地に音楽を」のはじまり

震災から一週間後の香港公演では、多くの方より心からの励ましの言葉をいただきました。音楽には人の心を癒し励まし、勇気づける力があることを信じ、被災地を応援したい国内外の人々の気持ちを音楽を通して届けようという思いを強くしました。

この思いと、20年前の阪神淡路大震災で1年にわたり音楽を届け続けた時の思いが重なり、2011年4月6日、福島県浪江町からの避難者を受け入れていた同県二本松市の避難所に3人の楽団員がボランティアとして訪問。ヴァイオリン、ヴィオラ、トロンボーンによる屋外での演奏を実施しました。

二本松市の避難所での初の演奏

熱い思いとともに 200回を超えた活動

個人の皆さまの「被災された方々を心に響く音楽で癒し、そして励ましてほしい」という熱いメッセージとともに寄せられた寄付と、この活動に自らの意志で参加しようとしていた楽団員の思いが合わさり、「被災地に音楽を」は始まりました。これまで、延べ約1000人の楽団員がこの活動に参加し、延べ200を超える会場に心やすまる音楽をお届けしてきました。

本冊子では、「被災地に音楽を」の内容と、これに共感しご協力いただいた方々のお言葉、参加した楽団員の思いなど、6年間に亘る日本フィルの活動を紹介します。

石巻市の高齢者施設での楽器体験

被災地と活動の推移

町役場前で唯一開店していたコンビニ
（福島県浪江町）

倒れたチリ地震津波高指標
（宮城県南三陸町）

慰霊祭開催地の周辺
（宮城県名取市）

3月11日
14:46
東日本大震災発生

2013年
（避難者数 約31万人）

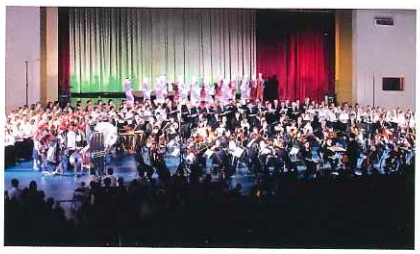
第100回

第80回 2012年9月30日

都内に避難している被災者を対象に、江東区の教会でコンサートを開催。

第113回 2013年6月23日

石巻の市民楽団等が1973年の初演から10年毎に公演していた「カンタータ大いなる故郷石巻」。震災の影響で不足していた市民演奏者を、日本フィルから14名が賛助出演。1,400人を超えるお客様と300人以上の出演者による熱気あふれる会場。



2012年
（避難者数 約34万人）

第50回

第29回 2011年7月10日

宮城県南三陸町の中学校、高校で震災後初の演奏指導。

第67回 2012年5月21日

仮設住宅集会所での初のコンサートを宮城県登米市で開催。

2011年
（避難者数 約47万人）

第1回 2011年4月6日

被災地での初の演奏会を福島県二本松市の避難所で実施。

第5回 2011年5月8日

宮城県名取市閖上で行われた慰霊祭での演奏。

日本フィルが見た

新築された病院の前に建てられた
復興公営住宅(宮城県南三陸町)

嵩上げ工事用ベルトコンベアの橋
(岩手県陸前高田市)

全線開通した三陸鉄道
(岩手県大船渡市)

2017年
(避難者数 約13万人)

第200回

2016年
(避難者数 約17万人)

2015年
(避難者数 約23万人)

第150回

2014年
(避難者数 約26万人)

第188回 2016年5月6日

創造力や意思疎通力の醸成を目的とし、南相馬市の中学生を対象にマイケル・スペンサーによる音楽ワークショップを実施。

第177回 2015年6月20日

市民アンサンブルへの初の楽器指導を岩手県宮古市の公民館で実施。

第148回 2014年7月16日

岩手県釜石市の小中学校の仮設体育館でのビリーブの合唱。

第200回 2016年11月1日

200回目のコンサートを石巻市のカフェで開催。来場された方との懇親会も実施。

第184回 2015年11月30日

大船渡市、南相馬市のホールで、子どもとその家族を対象としたコンサート「動物の謝肉祭」を開催。

第153回 2014年11月8日

継続して支援している福島県南相馬市の中学校吹奏楽部が、日本フィル本拠地の杉並公会堂の荻窪音楽祭で演奏。都内の中学生との交流会も実施。

音楽には「人と場を結び、人と人を結ぶ力」がある。

エッセイ集

私たちが出会った人たち

6年間の被災地訪問活動は主に岩手、宮城、福島の3県で行ってきましたが、時間の経過と地域により、それぞれの「復興」の様相が異なっていると実感しています。

私たちが被災地の実情を肌で知ることになったのは、地域や学校でコンサートや吹奏楽のクリニック（演奏指導）をコーディネートしていただいた方々との出会いがあり、時間をかけた相互の学びあいがあったからです。

ていねいに作られたコンサートやクリニックの現場で、訪問した日本フィルの楽団員は対象とする方々にむけて、さまざまなプログラムやアイデアを考え出しました。この関係は音楽という目に見えないものを媒体とすることから生まれています。

これまでの取り組みは、関係者すべてが「よりそう」という精神的な一致点から、共益をもたらすコミュニティを創出するという、オーケストラのもうひとつの活動のあり方をしめしてきました。このコーナーでは、そんな方々からお寄せいただいたエッセイを紹介します。

福島

避難先の学校で忘れないで、ふるさとのこと

福島県三春町立岩江小学校校長
遠藤 俊一

福島県三春町は周辺の楢葉町や富岡町などから避難された方を受け入れてきました。学校にも転校生がたくさんいました。音楽好きな遠藤校長は、なんとか子どもたちに音楽を聴かせたいという強い思いで、日本フィルへ電話をかけました。2015年に転勤した南相馬市小高地区の小学校は帰宅困難地区にあり、ここでも小高の小・中学生向けのコンサートを実現させました。

「私、楽譜、取ってきます。」

その言葉に、私は一瞬自分の耳を疑った。帰還困難区域にある学校からどうやって楽譜を取ってくるというのだ。

東日本大震災と原発事故から3ヶ月が過ぎようとしていた2011年6月。日本フィルの弦楽四重奏のメンバーが三春小学校に来てくれるというニュースから、私と日本フィルの不思議な縁が始まるなどその時は思いもよらなかった。

三春小学校の校舎自体は大きな被害を免れたが、当時、福島第一原発から近い富岡町、葛尾村から20名ほどの児童が三春小学校に避難していた。それぞれの児童が避難所である町民体育館や借り上げアパートから通学するという不自由な生活を送っていた。

母校を離れざるを得ない子どもたちが、避難先の学校の校歌を歌わなければならないという複雑かつ困難な現状。今後、避難がいつまで続くかわからないという厳しい状況の中、それぞれの学校にはそれぞれの校歌があることをすべての児童に認識してほしいという願いから、無理を承知で4校の校歌を演奏してもらえないかと願い出た。ところが、三春小学校以外の富岡第一小学校、富岡第二小学校、葛尾小学校の楽譜を手に入れなければならないことにはたと気づいた。

よくよく考えると学校は帰還困難区域にあ

2012年10月26日 ヴィヴァルディ「四季」のあと、弦楽合奏で元気に歌った校歌

るため、立ち入りが制限されており、学校から楽譜を持ち出すのは不可能に近い。そんな中、避難している児童の在籍する三春小学校に配属されている教員から思わぬ言葉が。「私、楽譜、取ってきます。」「無理な場合は、楽譜を手書きでおこします！」とまで。返す言葉が出なかった。

いよいよコンサート当日、体育館には、4校の児童をはじめ、保護者、避難先からかけつけてくれた方々、そして、楽譜を送ってくださった葛尾小学校の教頭先生の姿も。初めて弦楽四重奏で聞く校歌と他の学校の校歌。子ども時代に歌った校歌が流れると目頭を押さえるお年寄りの姿も。ふるさとを思い、友だちを思い、懐かしさと寂しさが入り交じりながらも、体育館に響き渡る澄んだ音色が私たちの心を癒してくれたことは言うまでもない。

不思議な縁はまだ続く。平成26年4月に私が赴任した南相馬市立金房小学校は、福島第一原発から20km圏内にあるため、同市鹿島区にある仮設のプレハブ校舎において、小高区にある4つの小学校が同じ校舎で通常の教育活動を行っていた。

私の中でまたもや「音楽の力」で目の前のこの困難な状況にある子どもたちを何とか勇気づけられないかという思いがわき出て、日本フィルに電話をしたところ、何とうれしいことに、「動物の謝肉祭」を映像付きで演奏してくださるとのこと。子どもたちにとって初めての経験どころか、私たち教員にとっても未だかつてないコンサートになることは確実であり、期待に胸がふくらんだ。

会場の子どもたちが演奏に合わせて一緒に歌う曲目も取り入れてくださり、こちらからの要望として「嵐」の『ふるさと』を希望した。NHK合唱コンクール小学校の部課題曲にもなった嵐の「ふるさと」。私も大好きな曲である。

”雨降る日があるから　虹が出る
苦しみぬくから　強くなる……“

ふるさとを忘れることなく一歩でも前に進んでほしいと願うこの子どもたちにぜひ歌ってほしい曲でもあった。小学生は高音を、中学生は低音をそれぞれ練習し、演奏会に臨んだ。小高中学校の音楽の先生は、期末テストの課題曲にも取り上げてくれるほどの熱の入れよう。それぞれの立場で「ふるさと」に対する熱い思いを垣間見ることができた。

当日の演奏会は、予想どおり、忘れられない、そして忘れてはいけない演奏会になった。ラストの曲「ふるさと」を日本フィルの演奏に合わせて参加者全員で歌う時には、ステージに映し出された子どもたちの笑顔や生き生きとした表情、そして、小高区の風景の映像が涙で曇り、声にならなかったのは私だけだろうか。

子どもたちを勇気づける時、ふるさとに思いを馳せる時、いつもそこには音楽があったように感じる。不思議な力、心穏やかにさせてくれる魔力が潜んでいるといっても過言ではない。

よくよく考えると、日本フィルの音楽の力に一番勇気づけられたのはもしかして私なのかもしれない……。

2015年11月30日　小高区の風景が映像にで流れ、嵐の「ふるさと」を歌う

福島

石のように固まった心に染みた音楽

伊達市保原町商工会
田中 幸美

福島の子どもたちが屋内での生活を余儀なくされ、親たちが放射能被ばくの不安におびえていたころ、日本フィルの事務所に「福島に来て、子どもたちを励ましてほしい」と切々と訴えるメールが届きました。震災当時、福島市松川町商工会に在籍していた田中さんには福島県中通りのコンサートを組織していただきました。

あの震災から間もなく6年目を迎えようとしています。しかし、ここ福島は全てが変わってしまいました。私達は震災後、一生懸命頑張りました。早く元の生活に戻ろう、ただそれだけでした。

しかし頑張っても頑張っても先が見えない毎日、不安定な時間が過ぎていく中で、心を病んでしまうこともありました。

私には二人の娘がおり、上の娘は当時中学生で吹奏楽部に所属。トランペットを担当しており、来る日も来る日も練習に明け暮れていました。

ところがこの震災で学校の再開も遅れ、やっと開催された地区大会では、非常に残念な結果となってしまった。いつもトランペットや音楽のことを考えていた娘なだけに、親として、何と励ましてよいかわかりませんでした。

そんな時、日本フィルの「被災地に音楽を」の活動を知りました。直感的に、もうこれしかないと確信し、ぜひ演奏をしてほしいと文章にならない文章で懇願したところ、すぐ対応して頂けることになりました。落ち込んでいた私達にとって、信じられないほどの出来事！　それからもう無我夢中で準備をしました。町の体育館や市民センター、小学校や福祉施設……。とにかくいろんな所のいろんな方へ、素敵な音楽を届けて頂きたくて。もちろん音楽や演奏ということに飢えていた私の娘が通う中学校の生徒や先生にもです。

そんな中で印象的な出来事がありました。

ある体育館で演奏した時、当初予定していた場所から変更して和室で演奏した時のことです。演奏者の方の軽快なおしゃべりですっかり安心したのか、会場にいた方は足を伸ばしたり一緒に口ずさんだり、思い思いのスタイルで演奏に聴きっていました。中でも「もっと良い服装でくれば良かった」と冗談を言って周りの人を笑わせていたご婦人が、帰り際、私にこう言いました。「石のように固まった心に染みた。スーと溶けていったよ。ありがとう」と。シンプルな言葉でしたが、とても嬉しかった。涙が出そうでした。同時に自分もそうだったんだと気付かされました。

これまで「音楽の力」というものを考えたことはありませんでした。しかし、「被災地に音楽を」の事業を通し、その時々で心が求める形に変化していくものではないかと思うようになりました。

余談ですが、トランペットを吹いていた当時中学生の私の娘は大学へすすみ、今演奏学科でトランペットを専攻し、毎日頑張っております。ここまでこれたのも、あの時の演奏のおかげだと思っております。いつか彼女が大人になったら、やっぱりいろんな方へ素敵な音楽を届けてほしいと思っております。

2011年11月25日　松川町南体育館研修所で。座布団の上でくつろいで

福島

あきらめと希望が入り乱れるふるさとで

南相馬・自然環境応援団
上條 大輔

南相馬市鹿島区で障害のある子どもたちのデイサービス事業を始めようとしていた上條さんは、福島第一原発の事故で事業が中止となり、家族もバラバラに避難することとなりました。一人南相馬に残り、林業の仕事に携わるかたわら、日本フィルが南相馬で活動するたびに現地での楽団員の送迎や食事会場の確保など、親身になって引き受けてくれています。

時間のたつのは早いもので、もう6年がたちました。あの大震災、原発事故で会社、家族、人生の計画が音をたて崩れさり、どうしたら良いのか、何をするべきなのか自問自答の毎日でした。

家族の安全を第一に考え避難をし、自分に出来る事が沢山あったのに、父親として一家の長として決断行動した事が何よりもストレスとなり、肉体的にも精神的にもこたえた日々でした。ほんの1ヶ月位の日数だったのに凄く長い長い時間と日々に感じました。

南相馬に屋内退避解除とともに戻った後、何をどうしていいのか、自分の気持ちが挫けそうな時に知人を通じ日本フィルが被災地で音楽による支援がしたい、協力者を探しているとの相談がありました。当初は正直乗り気ではなく自分自身が助けて欲しいと思い、まいっていた時期でした。

打ち合わせを初めてした当時は、避難所や仮設住宅でも色々な問題が出始め、人々みんなが疲れ、悲しみ、苛立ち、悲壮感いっぱいだった時で、自分もどうコーディネートして良いかわからなかった事を覚えています。はじめて一緒にまわった、避難所であった小学校、中学校、道の駅で聞いた弦楽奏で人々が静かに、そして感慨深く耳を傾ける姿を見た時、そして自分自身もその演奏に感動し、地域で自分が出来る恩返しに関われた事で少し心に変化が出てきました。

その後避難所がなくなり、仮設住宅に人々は移り、学校も再開、日本フィルの被災地支援も南相馬市の中学校の吹奏楽部へのクリニック形式の支援、各地でのミニコンサート、そしてコンサートホールに市民招待へと変わって行きました。どれもに関わらせていただきました。オケの演奏者も金管、木管、打楽器、弦楽と本当に沢山の人達が忙しい中時間を作り南相馬に来てくれました。その中での演奏者との交流が自分にとって本当に大切な時間となっています。今では各演奏者の名前と顔、そして楽器もわかるようにもなりました。

今現在の南相馬市では至る所に作業員宿舎が立ち並び、復興住宅や沢山の作業員、ところ狭しと走り回るダンプカーや山を切り崩す建設機械や、至る所に忌々しい黒い放射性物質の入ったフレコンの山々…。もう以前のような地域には戻れないでしょう。でもここに住み生活する人達は、あきらめと希望の両方を持ち生きていくのでしょう。そんな地域の人達の為にも今後も日本フィルによる音楽支援を末長く続けて貰えればと願っています。

我が上條家では今現在も家族はバラバラのままです。もう家族5人で生活する事はないでしょう。でも悲しんではいません。離れていても家族ですから。今自分に出来る事を全力でする。それが我が家です。

最後になりますが、昨年日本フィルハーモニー交響楽団の60周年の記念式典に招待をされ、通常ではもらえないであろう感謝状も頂きました。オケメンバーの方々からも名前で呼んで頂けるくらい沢山の方々とも交流もさせてもらいました。これからも地域の為に素晴らしい演奏と感動を、そして学生達には夢を与える活動を一緒にし続けたいと思っています。

2016年4月2日　南相馬市小高区の同慶寺で。当時、まだ避難指示解除準備区域にあり、周辺に住む檀家が集まった

福島

音楽でつながり、音楽で心揺さぶられ、音楽で可能性を見つける

南相馬市立原町第一中学校
吹奏楽部顧問
阿部 和代

日本フィルが本拠地とする杉並区と福島県南相馬市は災害協定を結んでおり、震災当初から南相馬市の避難所等での演奏を行ってきました。2年目から市内中学校の吹奏楽部の指導を行い、その中でも原町第一中学校は震災の翌年から全日本吹奏楽コンクールへの出場を果たしています。顧問の阿部先生の熱心な指導に心打たれ、日本フィルは特に集中して訪問しています。

あの日を境に、あらゆることが変わりました。それまで考えもしなかった状況が展開し、この先どうなるのかと呆然と佇む自分がいました。学校は休校となり、生徒の顔も見ることができません。「先生、学校はどうなるのですか、吹奏楽部はどうなるのですか」生徒たちからの問いかけの電話がひっきりなしにありました。「こんなことで演奏ができなくなるなんて。こんなことでみんながばらばらになるなんて……」

1ヶ月以上たって、本来とは違う場所で学校が再開しました。生徒数は激減し、日々の授業をやるだけで精一杯の日常があり、部活動再開など考えられない状態でした。「先生、部活動、いつから始めるんですか」「楽器持ってきて演奏しましょうよ」半分以下に減ってしまった部員たちの切なる思いに心動かされ、活動を再開しました。以前と同じようにはいきませんでしたが、ただただみんなで一緒に音楽を奏でることが楽しく、知恵と情熱を駆使して活動していました。

そんな私たちに、日本フィルさんからクリニックの話が舞い込みました。とても嬉しかったです。同時に、緊張しどのように対応したらよいのかと躊躇した思い出があります。しかし、そんなためらいは杞憂でした。気さくな団員さんたちからレッスンを受けて、生き生きしている生徒たちの姿を見ることができ、来てくださった皆さんの演奏はすばらしく、心動かされ、楽しさのあまり、それまで張りつめていたいろいろな思いが急速に溶けていく感じを味わいました。それが日本フィルさんの「被災地に音楽を」との初めての出会いでした。その時はまさか今に至るまでの長期間の濃い関わりになるとは考えもしなかったです。

春に出会いのクリニック、夏に夏休みコンサートへの招待、秋に演奏訪問と、日本フィルの方々は次々と私たちに手を差し伸べ、寄り添ってくださいました。その音楽は私たちの心を揺さぶり、力を与えてくれました。「先生、楽しかったです」「こんな身近で聴けて感動しました」「私たちのために来てくださるなんて贅沢ですよね」「私たちも心に響く音楽を奏でたい」「私たちもワクワクするような音楽を表現したい」「私たちもみんなを笑顔にしたい」団員の皆さんと共に過ごした生徒たちは興奮し、ピカピカの笑顔で口々に語りました。音楽は、直接私たちの心を揺さぶります。その揺さぶりによって生徒たちの表情は変わり、意欲というエネルギーがみなぎってきているのを強く感じました。

意欲が充実した私たちはコンクールで成績を上げるようになりました。知らず知ら

2014年11月8日　荻窪音楽祭で指揮をする阿部和代先生

2014年4月5日　若いクラリネット奏者は人気者

ず成績をあげることを優先に考え、がんじがらめに縛られ、何か違う方向に進んでしまいそうな時、荻窪音楽祭への出演の話をいただきました。今まで関わってくださった日本フィルの方々と一緒にステージで演奏できるという夢のようなお話です。それは素晴らしい体験となりました。今まで味わったことのないようなコンサートの雰囲気に私たちは感動しました。マエストロが指揮をし、隣では日本フィルの方が演奏し、会場からは味わったことがないような温かい拍手をいただき、まさに至福の時でした。コンクールでは味わえない音楽の感動がそこにありました。そういう場を与えてくださったことを心から感謝しています。

私たちの悩みに寄り添ってくださる活動はまだまだ続きました。管楽器だけでなく弦楽器も味わって勉強してほしいと、演奏とレクチャーをしていただきました。優しい語り口から感じられたのは、熱い情熱と真摯に音楽に向き合う姿でした。震災後、文化的、芸術的な面の教育が思うようにつながらなかった私たちにとって、日本フィルさんの支援はいつも時宜にかなった内容で、大変ありがたかったです。

受け身の生徒が多く、表現力が低下してきていると話をすると、マイケル・スペンサー氏のワークショップを展開してくださいました。受け身で消極的で、会話のキャッチボールもできないような生徒たちが、驚くことに、ジョン・ケージ氏の偶然性の音楽の手法で、音楽を作り上げたのです。初めはどうなることかとハラハラして見ていましたが、スペンサー氏とファシリテーターの方々の厳しい音楽的追究に、消極的だった生徒たちがどんどん変わっていく様子を目の当たりにすることができ、エキサイティングな時を過ごしました。子どもたちの可能性の大きさを感じることができたことは私にとって大きな学びとなりました。

私たちが震災で失ったものはたくさんあります。でも私たちには音楽がありました。音楽でつながり、音楽で心を揺さぶられ、音楽で意欲が充実し、音楽で子どもたちの可能性の大きさをみつけました。震災後の大変な時期、私たちに寄り添って音楽のすばらしさを体感させてくださった日本フィルの皆さま、音楽の偉大な力とともに音楽は身近にあることを私たちに示してくださいまして、本当にありがとうございました。私たちは幸せ者です。生徒たちのこれからの人生はきっと音楽と共にあるはずです。

「生徒たちよ、強く雄々しく、しなやかに奏で続けていってほしい」

音楽万歳!!　ありがとう日本フィルハーモニー交響楽団!!

2014年11月8日　荻窪音楽祭「みらい夢コンサート」で杉並区内2つの中学校と合同演奏。指揮は友情出演の藤岡幸夫

宮城

大きな津波の被害を受けた石巻で、小学校の教師だった石垣先生は女子美術大学のヤマザキミノリ先生と「アート」による心のケアに取り組みました。先生同士のネットワークで、さまざまな出会いが生まれました。

深刻な状況に寄り添う「音楽とアート」

東松島市在住・元小学校教員
石垣 好春

早いもので3・11の震災から5年9ケ月が過ぎました。幸いに私は、職場も自宅も被災せず、また家族・親類縁者に犠牲者がいませんでしたが親友・知人を亡くしました。そのこともあって、震災直後は自分にできることは何かと深刻に悩み自問しました。そんな時、5月に東北大学で開催された、メンタルヘルスの研修会で、女子美術大学のヤマザキミノリ教授と出会ったのでした。ヤマザキ教授は、震災直後自ら車で被災地石巻を訪れ、学生たちにヒーリングアートによる支援計画を立てるよう指導されたのでした。

震災時まだ現職の小学校教員でしたので、支援は限られます。コンサートとなれば、一定の広さが必要で、また音響効果等も考えなければなりません。しかし最大の悩みは、「人集め」でした。震災直後の被災地は、生きていくことがやっとという深刻な状況にありました。

それでも、震災の年の11月に親しくしていた石巻市八幡町にある喫茶店「川べりの散歩道」が引き受けてくれました。ここは旧北上川河口から2km上流、約3mの津波が押し寄せ大きく被災しましたが、再建したばかりの小さなホールを持っていました。画家でもあるオーナーの三浦さんは、音楽や芸術活動にとても理解がある方でこのコンサートを積極的に受け入れてくださいました。コンサート当日、会場は満席で立ち見も出る程で驚きました。最後の「故郷」が演奏されると涙をこらえる人たちが何人も見えました。

私のできることは、日本フィルと会場を繋ぐこと、また当日の会場の整理等に限られました。それでもその後、「北上中学校」、「こ～ぷのお家いしのまき」、そして16年11月1日に200回目の「雄勝オーリンクハウス」、「百俵館」でコンサートが実現しました。心配することも多かったのですが、自分も、被災した住民のためにコンサートを創っているという喜びも感じられました。後日、当日鑑賞した方（一関市在住63歳男性）が、地元河北新報に感想を寄せています。

私と日本フィルとの出会いは、教職に着いて2年目、「友よ未来をうたえ」という、日本フィルをテーマにした映画を見た事に始まります。いまでは当たり前になっている「市民とともに歩むオーケストラ」ですが実践することはなかなか難しく、日本フィルも大きな困難を乗り越え現在があるのだと思います。財政的にも決してゆとりなどないはずのオーケストラ運営の中、被災地に「寄り添う」活動は多くの被災した住民に深く響き、大きく励ますものになっています。

2016年11月1日　川の上「百俵館」は100人を超すお客様で満員

■「被災地に音楽を」に感激

（一関市・元小学校教員）63歳

10月28日、宮城県南三陸町で30年ぶりに同級生4人と再会を果たしました。翌日、石巻市在住の友人の案内で東日本大震災被災地を巡りました。

石巻市雄勝町の「オーリンクハウス」で休憩を取りました。被災した雄勝町のコミュニティー再生を目指して建てられた交流施設です。置いてあったチラシを手に取ると、3日後、日本フィルハーモニー交響楽団の有志による「弦楽四重奏」が開催されるとあり、心引かれました。

11月1日、92歳の母を伴い一関市から車で2時間かけて再訪しました。小さな建物の中に、地域の方々が50人ほど集まりました。曲目はビバルディの「四季」や「見上げてごらん夜の星を」など10曲。地域の方々に交じって、美しい音色に耳を傾けました。

震災後、日本フィルは市民や企業からの支援をもとにボランティア活動「被災地に音楽を」を開始し、その日がちょうど200回目の公演でした。

平井俊邦理事長の「これからも音楽を通して被災地に思いを届けたい」というあいさつに感動しました。こうした地道で息の長い活動が復興の後押しになることを願ってやみません。

2016年11月12日
河北新報掲載

宮城

昼下がりの交流サロン また来てくれてありがとう

社会福祉法人 こーぷ福祉会
小山 明美

「こ～ぷのお家いしのまき」には計4回伺っています。担当者も3人に出会いました。近くに大きな仮設住宅があり、デイサービスや交流サロンなどをたびたび行っています。地域のセンターとして被災者の方々と深く結びついています。毎回、おいしい手作りのランチとお菓子をいただきました。

11月2日（水）午後　いしのまきの交流サロンには、入りきれない観客であふれました。

「一番前の席で生の音楽を聴きたいから早くきてしまった……」と開演1時間前に会場にきた観客もいました。開演の20分前には準備したイスはほぼ満席になってしまい、施設内の空いている椅子やソファーまですべて運び込み、それでも立ち見の観客が出てしまいました。

震災から5年6か月、石巻市へ向かう高速道路から見える復興住宅や建築中の住宅が左右に見えます。慣れない地域で生活している方、いまだ仮設で生活をしている方も沢山いらっしゃいます。

この「音楽のおくりもの」を一人でも多くの方に知ってもらうために、チラシや宣伝場所を工夫し仮設住宅や地域の方々が集まる場所、生協のふれあい喫茶や月1回の「サロンであいましょう」などへ足を運びました。

仮設住宅では2年前の演奏会へ来てくれた方に会うことができました。まだ仮設での生活が続いていて、「つらい生活の中でも音楽を聴くことによりまた頑張ろうと思う気持ちがわいてくる、また生演奏が聴けると思うとうれしい、楽しみ……」と笑顔でお話ししてくださいました。

また新聞への掲載をみて問い合わせも多く、入場無料で事前申し込みがないため当日の観客数が予測できませんでした。

昼下がりの交流サロンの窓際には日本フィルの皆さんがスタンバイされ、息を飲む静けさの中で弦楽四重奏の音色がフロアーに響きました。

音楽が流れるなか観客の方を見ると、顔の表情が何かしらゆるくなる方、笑顔になる方、音楽に合わせて体を揺らしたり、ハンカチを片手に聴いている方もいました。

演奏後、観客の皆さんからは「聴いている時間は、あのつらい出来事を忘れることができたよ」「涙が自然にあふれてきました。ありがとう」「音楽は心の栄養、元気がでるね。音楽最高!!」「やっぱり生は違うね。心に響くものがある」ということばが。

日本フィルの皆さんのご配慮で、クラシックや民謡などのなじみのある曲を演奏していただき、観客の皆さんと一緒に歌い、フロアーの全員が「音楽」の力によって気持ちがひとつになれたこと、そして音楽は人の心を動かす魔法のようなものだと改めて感じました。

2014年4月29日　こ～ぷのお家いしのまきで、はじめての楽器体験

岩手

2年間の休職から音楽の力で心の復興

宮古市教育委員会文化課
伊藤 哲

岩手県北三陸地区は東京から遠く、支援の届きにくい地域です。日本ユネスコ協会連盟の協力で、3年目から釜石、宮古、山田町、野田村、普代村、田野畑村などに行きました。宮古市教育委員会は、学校や学童クラブなどと緊密な連携がありたくさんの校長先生と知り合いました。伊藤さんはアマチュアオーケストラに所属し、2016年12月の訪問をコーディネートをしてくださいました。

発災直後の宮古市内は、どこまで行ってもがれきの山と潰れた多数の車が連なり、大量の埃と海から打ち上げられたドロで、さながらニュースや映画で見る戦場のような様相でした。

私は、東日本大震災発災後、宮古市役所内に設置された被災者支援室に勤務しました。被災者支援室の業務は非常に多岐にわたり、避難所の運営、仮設住宅への移転、義援金や支援物資の受入・配分、ボランティア活動や被災地支援活動への対応、仮設住宅での自治会立上げというような様々な電話への対応等、ありとあらゆる業務に追われる毎日でした。

2年目に被災者支援室長となって数ヶ月たったある日、心や身体の疲労とストレスが原因で、私は体調を崩してしまいました。なんとか2年目までは勤務しましたが、翌年から約2年間、仕事を休むこととなりました。

私は音楽がとても好きで、中学で始めたホルンを今でも続けています。毎日ケースから楽器を出して練習するのが日課でしたが、体調を崩して間もないある日、突然楽器のケースに触ることができなくなりました。とてもショッキングな瞬間でした。

しかし、今ここでホルンから離れてしまったら……。体に鞭打って必死にホルンを吹き続けたことを覚えています。支えてくれた家族や音楽仲間がいて、2年前になんとか現在の職場で仕事復帰することができました。音楽の持つ力によって、少しずつ自分を取り戻していくことができたのだと思っています。

震災直後、それまでの地域コミュニティは失われ仮設住宅でのコミュニティ作りに懸命に取り組んできましたが、現在、仮設住宅の再編や災害公営住宅への入居、高台移転地への転居がピークを迎え、被災者や地域住民の生活環境が再度大きく変化する時期を迎えています。

そのような中、日本フィルメンバーの皆さんによる「音楽のおくりもの」活動に出会いました。平成26年度が金管五重奏、平成27年度は弦楽四重奏、そして平成28年度には弦楽四重奏とオーボエ奏者の方が、被災地宮古市へ素晴らしい「音楽のおくりもの」を届けてくださいました。

被災地区では、いまだに建物が流出した跡地がそのままの状態で雑草が生い茂っていたりただの空き地になっていたりの状況ですが、かつてそこに何があったのか、どのような街並みだったのか、震災以前の状況を思い出せなくなってきています。このようにして、時間の経過とともに被災地住民の心は少しずつ荒んでいくのだろうかと感じています。

音楽の持つ「癒し」の力は何物にも代えがたく、日本フィルの皆様の活動は、津波と共にばらばらになってしまった市民の心を、再び強く結び付けてくれました。そして、6年たった今でも被災地を忘れずにご支援くださっていることに、感謝の気持ちと安心感を感じることができたと思います。

2016年12月13日　宮古市福祉センター。デイサービスに通う高齢者と職員の皆さん

岩手

圧倒的な密着性と連続性に感謝

久慈市教育委員会文化課主任
大﨑　純

久慈市は津波被害を免れた教育委員会直轄のアンバーホールがあり、被災の年にはこのホールでコンサートを行いました。歴代の担当者は日頃の学校との連携も活発で、学校訪問、吹奏楽のクリニックなど、よく準備していただきました。

若くない年齢で地元の市職員となり、2つめの配属先となったのが文化会館。私は30代中盤までクラシックを始めとする「音楽」や、それこそ「文化活動」に触れることがほとんどありませんでした。

東日本大震災の大津波により、久慈市内では12メートルの防波堤をも超えて海岸沿いの建物1250棟が流され、数えきれない財産と、かけがえのない命をも奪い去られる未曾有の被害を受けました。

震災後、日本フィルさんには「被災地に音楽を」の活動で3度も久慈市に訪問していただきました。この活動の特徴は、他の文化的な支援よりも、「圧倒的な密着性」を感じられることです。市内多数の小中高校や病院、津波で破壊されたのち復興のシンボルとして再開を果たした水族館でも行われたアウトリーチコンサートは、その場所ごとに最適な内容、実施方法を綿密に市内関係担当と一緒に打合せ、共同に作り上げることで、我々も一体感や達成感を得ることができました。

2013年につづき、3年後の2016年にもホールでのクリニックや高校でのアウトリーチを実施していただいたことで、3年前は中学生だった子どもたちが高校に上がりプロの演奏者と再会するという、継続した活動をして頂いているからこそできる、連続性がある経験を生徒に与えてくれました。

ホールでのコンサートでも、子どもたち向けに演奏と一緒に歌ったり、久慈市を舞台とした「あまちゃん」や復興ソングである「花は咲く」を演奏していただくなど、演奏者と会場が一体となって「音を楽しむ」趣向を凝らしていただきました。そして毎回参加された皆さんが口にするのは「是非また来て欲しい」のお言葉です。会館に勤めるものとして大変ありがたく、嬉しく思います。このような濃密な活動を200回も継続できている、その強い信念に感嘆を禁じ得ません。

2016年6月16日 アンバーホールで市内の中・高吹奏楽部のクリニック

私は文化会館に勤務するまでオーケストラや音楽公演を聴いた事がありませんでした。平成24年に施行された「劇場法」では、大都市圏と地方との芸術に触れる機会の格差の解消も求められています。地方ではまずは子どもたち向けの芸術鑑賞機会を最優先すべきと思います。多感な時期に芸術文化に触れた経験があるのと無いのでは大きな差があります。開く可能性があった扉が閉じたままで終わった人の割合は、芸術文化面においては地方の人間の方が高いのではないかと感じます。

日本フィルさんは大規模なオーケストラ公演だけではなく、「被災地に音楽を」を含めた地方への活動も精力的に行っています。私の要望は「子どもに可能性を」です。また、その要望に向けて自分自身も微々たるものではありますが尽力したいと思います。

2012年1月20日　「おらほーる」周辺の7つの小学校から子どもたちがスクールバスでやってきた。

岩手

避難所だったリアスホールでみんなが笑顔に！

大船渡ユネスコ協会会長
山口 康文

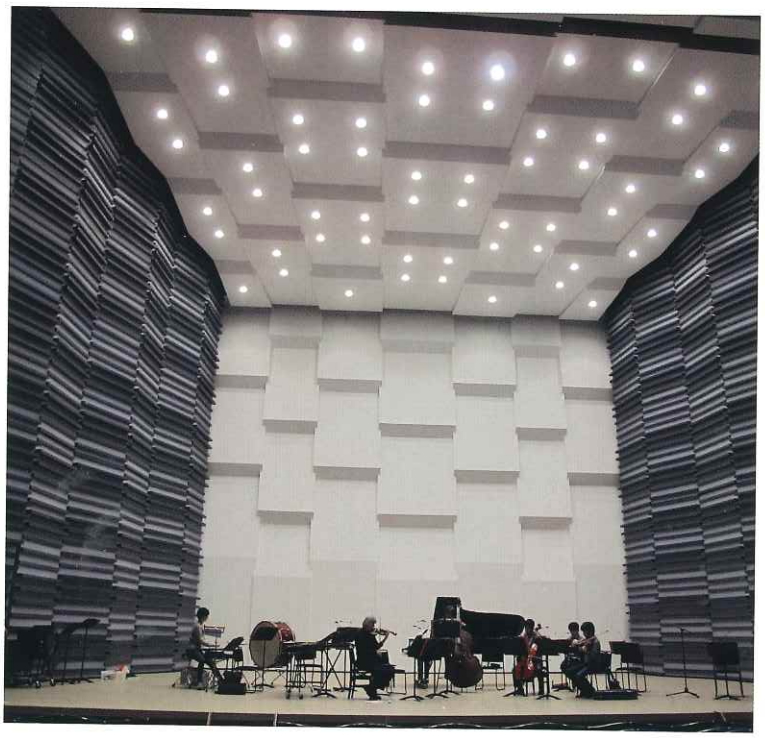
大きな津波被害を受けた大船渡ですが、リアスホールは被災を免れ、ホールを拠点に大船渡ユネスコ協会のみなさんが準備をしました。地元のマスコミや市の機関とも連携をとりました。

あの日、大船渡市はじめ東日本沿岸は、未曾有の津波災害に見舞われ、私たちは、家族、親類、友人、同僚…を亡くし、住んでいた家、学校、職場を失くした。現在迄に亡くなった方は、大船渡市内だけで３４０名、行方不明の方が79名いる。

平成26年６月大船渡ユネスコ協会（会員１２６名）は日本フィル金管五重奏コンサート「音楽のおくりもの」を、被災後避難所となった大船渡市民文化会館リアスホールで行い、美しいブラスサウンドを客席に届けている。大船渡市内外から約７００人が来場、多彩な音色を自在に操り、観客を魅了した。その後３日間は、市内に滞在して、学校や介護施設でコンサートや演奏指導を実施してまわった。

その後、平成27年11月28日、当協会創立40周年記念事業の一環として日本フィル「親子で楽しむ（動物の謝肉祭）コンサート」をリアスホールで、三菱ＵＦＪニコス㈱の協賛、日本ユネスコ協会連盟の後援で開催できた。司会は、歌のおねえさん江原陽子さんが担当した。２部は、サン＝サーンス「動物の謝肉祭」。江原さんの語り、女子美術大生による絵とライオン、カンガルーなど動物たちとの共演をイメージさせる演奏が素晴らしかった。締めくくりは、「Let It Go ～ありのままで」、「さんぽ」で歌を楽しみ、会場がいっぱいの笑顔でとても良かった。帰りがけに「すてきな音楽をありがとう！」と子どもたちからお礼のことば、皆が喜んでいた。

2014年6月20日　大船渡の高校での演奏指導のあとで



2015年11月28日　三陸海岸をイメージしたリアスホール

岩手

復興の水族館にブラスのサウンド

久慈市観光交流課
中野 創一郎

久慈市の復興のシンボルともいえる水族館「もぐらんぴあ」。観光課の中野さんは、水族館のコンセプト作りから復興庁との交渉を経て完成までの全てを経験してきました。生き残ったウミガメの「かめきち」君をアイドルにした、ステキなコンサートチラシも彼の手作りでした。

「久慈地下水族科学館もぐらんぴあ」は、久慈国家石油備蓄基地の作業坑を活用した、日本唯一の地下水族館であり、平成6年4月のオープン以来、130万人以上の方々が来場する久慈市の主要観光施設であった。

しかし、東日本大震災により、施設は全壊、200種3000匹以上の水生生物は8種21匹を除き死滅してしまった。その後、久慈駅付近の空き店舗を活用し「もぐらんぴあ・まちなか水族館」として、仮営業を実施していたが、平成28年4月23日に、国の補助制度の活用や全国のみなさまの温かい支援等により、5年の月日を経てリニューアルオープンとなった。

この「もぐらんぴあ」で日本フィル金管五重奏団にコンサートを実施していただいたのは、平成28年6月18日のことであった。リニューアルオープンから約1ヶ月半後の新しい水族館の水槽前という幻想的な空間で演奏いただいた。観客スペースいっぱいの100名程度の来館者に向けて、年齢層に合せた、ジブリ、ディズニーのメドレーやクラシック音楽が、水族館のトンネル内に響き渡った。新もぐらんぴあでは初のイベントであり、旧施設を含めても金管楽の演奏は初の試みであったが、トンネル内ということで心配されていた反響音等も、演奏が始まるとむしろ心地よい音響であり、新たな水族館の魅力発見となった。

コンサートを聴いた方々の感想を聞いてみると「水族館でこんな本格的な演奏が聞けるとは思っていなかった、本当に素晴らしかった」、「トンネルの反響がコンサートホールで聴いているようだった」、「水槽前での演奏だったので、奏者と水槽と魚できれいな映像になっていた」、「もぐらんぴあは久慈市の復興の象徴、今回の演奏でまた一つ復興を感じられた」等の素晴らしい感想が寄せられた。

今回のコンサート、ワークショップ等の一連のイベントを通じて、改めて思うことは、音楽のもつ力のすごさであった。クラシック音楽は良くも悪くも、多くの一般人が聞いている身近な音楽ではないと思う。しかし、知らない曲であっても人を惹き付け、感動を呼ぶ。これは年齢をこえ、地域をこえ、言語をこえるものであり、音楽の力そのものであると深く感じた。この音楽の力は、東日本大震災という未曾有の災害からの復興にはかかせないものと、水族館コンサートで私は確信した。

2016年6月18日　久慈市のもぐらんぴあ（水族館）。久慈の海がテーマの水槽の前で

三菱ＵＦＪニコス株式会社はこの活動の趣旨に賛同し、震災2年目から協賛してくださっています。柴田さんはＣＳＲ推進室の担当の2代目。下見や現地担当者との打ち合わせ、チラシの作成、移動バスの手配など、日本フィルと連携をとって一緒に行動しています。子どもたちのコーラスにもらい泣きをしたり、楽団員と寝食をともにするなかで、新たな生きがいを見つけていただいているように感じます。

言葉ないのに確実に届く音楽の力 音楽に嫉妬した瞬間

協賛企業

三菱ＵＦＪニコス株式会社
ＣＳＲ推進室
柴田 和典

あの日のことを忘れないと誓い、自分ごとして何ができるのか考える。5年半の記憶・出来事が走馬灯のように駆け巡り、あのときの気持ちを思いだし、これからも継続的に支援していくことを決意する。自分にとってもそんな思いを改めて強くさせてくれる、前向きになれる大切な場所。それが日本フィルハーモニー交響楽団（以下、日本フィル）さんの「被災地に音楽を」の現場です。

地震に津波、そして原発事故が重なる、人類の誰もが経験したことのない大複合災害。その1ヵ月後、会社から復興支援策を考えるよう命を受け、今の部署に着任しました。

初めて被災地を訪問したのは、震災の3ヵ月後。沿岸部街々の壊滅的被害を目の当たりにし、言葉を失い呆然としました。自分たちにできることなんて何も無いと絶望したことをよく覚えています。それでもできる限りの支援を長期的に継続することが、企業の役割であることを認識し、一企業、個人でできることはごく小さなことですが、それらが集まり継続すれば復興の原動力になると信じ、社内では社員からの募金や社員ボランティアを派遣し現地の瓦礫撤去の作業を手伝うなどの取り組みを開始しました。

当時、ボランティアで実際に現地に赴いて驚いたことは、被災された方々が笑顔で元気なこと。「来てくれてありがとう」「必ず商売再開するから」などの声を聞き、前向きであることに勇気と元気をもらって帰ってくることはしょっちゅう。しかし、こちらから励ましそうと思っても、実際に被災された方を前にすると、何も声を掛けることができませんでした。気安く「頑張ってください」なんて言えません。励ますこともできず、自分の無力を痛感した時期でもありました。

そんな1年が経過し、被災地ではＰＴＳＤが大きく取り上げられるなど心のケアが大きな課題となり、企業としての支援方法も見直しが必要な頃、日本フィルさんの「被災地に音楽を」の取り組みに出会いました。音楽の力に驚いたのは、初めて現地のコンサートに同行させていただいたとき。現場には一切の言葉はありません。演奏家の方が奏でる音楽だけ。目を閉じて集中して聴く方、笑いながら手拍子を打つ方、唄を口ずさむ方、静かに涙を流す方、反応は人それぞれですが最後には拍手喝采。来場者一人ひとりの心には確実に何かが届いていました。自分たちには決してできません。音楽に嫉妬した、そしてこの活動を支援することを決めた瞬間でした。

日本フィルさん２００回公演の内、約90回を共にさせていただきましたが、どんな会場においても、入念なリハーサルを重ね、まったく手を抜くことのない演奏家の皆さんの姿には感動すら覚えます。音楽を届けるに留まらず、演奏指導や情操教育、ワークショップの開催など、将来を担う子どもの育成も視野に入れたプログラムはとても意義のあるものだと思います。それは、参加した子どもたちの表情をみれば分かります。また、広域にわたり同じ地域に何度も通う、被災地に寄り添った活動は、「忘れないでほしい」という被災された方々共通のメッセージに応えるもので、継続支援の重要性を認識させていただきました。

私が参加した復興支援シンポジウムでの某大学教授の言葉が強く印象に残っています。「人は寂しいと死ぬ。いのちを守るには交流

2014年7月14日　釜石市小佐野公民館で。周辺は沿岸から避難してきた人の多い地域

と自治が必要」という言葉です。6年を迎えた被災地では、ハード面の復興が進み復興住宅への転居が始まったことで、仮設住宅でのコミュニティが失われ新たなコミュニティ構築が課題となっていると聞きます。コミュニティ再生や自立支援の力にもなれる。一人ひとりに寄り添い、もっと多くの方に生の音楽を届けることが地域の人と人を結ぶ架け橋になり、いのちを繋ぐ。そんな力が音楽にはあると思います。

まだまだ復興には長い道のりです。10年後20年後いつになるか分かりませんが、一緒に「お疲れさまでした」と言えるその日まで。東北の復興を応援する大切なパートナーとして、これからもよろしくお願いいたします。

2011年8月6日　宮城県気仙沼市の避難所で

ふるさとから遠く離れた東京で教会に響きわたるやさしい調べ

東京

カトリック潮見教会
担当司祭
小林 祥二

私の教区、東京都江東区にあるカトリック潮見教会のすぐそばに国家公務員宿舎東雲住宅が建てられ、震災直後まだ入居者がなかったその宿舎に、福島はじめ被災地域の方約千名が避難されました。

緊急時に入居された方々は互いの交流もなく、それぞれが孤立された状態でした。「避難されている方と結ぶ江東の会」と「東北サポーターズ」が中心となって、「こどもクリスマス会」を教会を舞台に開催し、避難された方々を招待しています。日本フィルの皆さんにはこのクリスマス会で4回演奏していただきました。金管五重奏や弦楽四重奏、チェロとオルガンのアンサンブルなど、クリスマスにふさわしい神々しい響きが教会の中に響き渡り、参加された親子の心を慰めました。特に、2014年には普段は讃美歌の伴奏にしか使用されていないオルガンでバッハの「トッカータとフーガ」やヘンデルの「パッサカリア」が演奏され、感動しました。

教会は広く開放されており、近隣にはフィリピン人や韓国人の信徒もおります。コンサート後は、多数のボランティアの方々の手作りのご馳走でクリスマスを過ごしています。

いきなり東京に放り出された不安の中で、この会では避難者同士が再会し、子どもの成長を確かめ合う貴重な日となっております。

2015年12月19日　潮見教会でのコンサート

ヤマザキ ミノリさんに聞く

“アートと音楽のちから”

ヤマザキ ミノリ

東京藝術大学構成デザイン大学院修了。空間デザイン、ラインアート、パブリックアートのデザイン制作を中心に造形作家として活動。東京藝術大学在学中の1974年に立方体内部を鏡張りにした箱型万華鏡を発明。作品展・企画個展を多数開催。現在、立方体万華鏡ワークショップを通じたユニバーサルなアートメディアの研究に取り組んでいる。女子美術大学ヒーリング表現領域教授。

東日本大震災の被災地で学生たちとともに、ワークショップ等の活動を実施している。日本フィルとは2006年より様々な形態の協働活動を実施していたが、2011年から被災地でのコラボレーションを開始。単独ではなし得ない深みのある被災地支援を継続している。

被災地での活動は、どのような思いで始めたのでしょう。

人は絶望の淵にあるとき、心の片隅に花が咲くイメージを思い抱き、希望を持ち続けることで生きていける。経験上、この理念を体験する機会が多くあり、美術や音楽には被災地の方々の心に訴えかけ、寄り添う力があることを認識していました。とはいえ、放射能の問題や津波で街が壊滅した状況を見ると、本当にアートが必要なのかという葛藤はありました。でも、実際に行動してみると、人と芸術の本質的な関係を実感することになりました。

どんな活動がきっかけになりましたか。

東西ドイツ統一後の社会混乱で、家庭崩壊による精神的ダメージを持つ子どもたちが暮らすドイツの病院でのワークショップが活動のきっかけになっています。私が考案した立方体型の万華鏡作りのワークショップは、子どもたちはこれに不思議なほど集中して取り組み、病院からもクリエイティブな時間の共有が精神的な治癒に寄与するとの評価を得ました。誰もが創作し達成感を得ることが出来る「アート」というアプローチが人々に元気を与え、人と社会の有り様を形成する媒介に成り得ることを実感できました。

被災地での最初の活動はどんなものでしたか。

大きな被害を受けた石巻で、震災４ヶ月後にいち早く営業を再開したアトリエがありました。この地区のコミュニティは深く傷み、人々が集えるスペースもなくなった中、カフェを併設したアトリエが再開されたのです。オーナーに共感をいただき、2011年8月にワークショップを開催することになりました。子どもたちは遊び場を失い、大人たちは日常生活の維持に精一杯。そんな中で子ども21人と大人14人が参加してくれました。

自分では出来ないかも知れないと思っていた物が、思いもよらず出来てしまった。その時の感動や驚きを見たとき、誰もが持っているアートの感性の花が咲いたと感じました。そして、その感動を共有した参加者同士の新たなコミュニティがその場で形成されたのです。この活動を継続することが被災地の方々に少しでも役立てるのではないかと実感しました。

日本フィルとの活動で感じたことは。

アートは１人ひとりの感性に訴えかけ、人々が持っている個性を引き出し、主役にする力があります。また、長年の訓練を積んだ音楽家による研ぎ澄まされた本物の響きは、人の心を癒し、包み込む力があると考えています。

日本フィルさんとは、震災前から様々な活動を一緒にしてきましたが、被災地での特に印象深い活動は、前述した石巻のアトリエで2012年8月に行ったものでした。参加者がそれぞれの感性で手作りした楽器を、日本フィルの弦楽四重奏の演奏に合わせて鳴らしながら会場内を行進しました。ヴィオラ奏者の方がとても上手くファシリテートされて、参加者たちを柔らかく包み込みながら繋げる音楽の不思議な力と、アートの力が融合した時の大きな相乗効果を感じました。これ以降も「動物の謝肉祭コンサート」など、被災地での日本フィルとのコラボレーションは幾度となく行い、その都度新しい発見がありました。

学生との活動も積極的に実施したのですね。

学生とは、これまでに30回ほど被災地での活動を行いました。学生それぞれが、出来ることを話し合い活動してきました。その中で、ひとりの学生が行ったワークショップに注目しています。テーマは「防災教育」。対象は震災を経験していなかったり、記憶していない5～8歳の子どもたちです。そんな子どもたちに、厚紙での理想の家作りと自分の姿の紙人形を作る工作ワークショップをします。「20メートルの津波が来た！さあ、君ならどうするかな」という問いかけに、子どもたちはあらかじめ制作された山の上に人形を置き避難させます。小さいながらも自分で考え自分を守る行為をこのワークショップで学ぶのです。このような場は学生たちが社会との関わりを学ぶ場としても、とても有効と考えています。

今後、被災地ではどのような活動が必要だとお考えですか。

本来、人間は感動や共感という芸術的感性を魂に宿しているのだと思っています。美術や音楽は実は命の本質であり、決して付録では無いとの思いです。ひとり１人が持っている感性が現出することにより、成功体験や自己肯定感を実感してもらう。このプロセスを通じて浮揚感を感じ、それが自信に繋がっていく。

震災から丸6年が経過しようとしているいま、物理的な復興は進んでいるように見えますが、被災された方々への心の支援が必要とされるのは、むしろこれからではないかと思っています。アートや音楽が媒介となって心に働きかける支援は、今後さらに求められるでしょう。私たちの活動が、大変な経験をし、それを抱えながら自立していこうとする方たちの「自信」の一助になればと考えています。

座談会

被災地を訪れた楽団員
～それぞれの想い～

トランペット 橋本　洋 × ヴァイオリン 松本 克巳 × トロンボーン 岸良 開城 × チェロ 山田 智樹 × ヴィオラ 中川裕美子 × 事務局 富樫 尚代

それぞれの思いとともに被災地へ

富樫　本日はお集まりいただきありがとうございます。まず、皆さんが被災地での活動に参加されたきっかけ、それから感じられたことをお聞かせください。

松本　１９９５年の阪神淡路大震災の時、自分がかつて関西の大学に通っていたことや、関西に住む義理の両親の消息が一時期不明であったこともありまして、自分に何ができるかを考えるためにも現地を見ておきたいと思いました。そして行くならばやはり演奏で何かできないか、ということで演奏活動を始めました。そこでの活動がとても喜ばれたということは今につながっていると思います。東日本大震災については、とんでもない広域の災害であり、これは誰かが行けばよいというレベルの問題ではなく、色々な人が関わらなければいけないと思い、それならばと先頭を切って行って、感じたことを引き継いでいこう、他の人にとっても行くきっかけとなればと思い、被災地での活動を始めました。

山田　松本さんの後に行ったのが僕らのグループだったと思います。当時、世の中全体に「自分にも何かできないか」という空気があり、私も福島の三春町が実家なので、個人としても何ができるだろうかと悩んでいました。５月になってようやく三春に行く機会を得ましたが、実際に行ってみると富岡町や葛尾村から避難している方が多く、役所の開く説明会と重なっていること等もあり、決して多くの人に演奏を聞いていただけるような状況ではなく、建物の玄関先で演奏したりと、

厳しい環境でした。けれど演奏をしてみて、喜んでもらえている実感を得られた部分もありました。

中川　これまでに6回ほど訪問しましたが、当初は、まだ余震がある時期に行って大丈夫なんだろうか、安全面も含めて疑問もありました。また訪問前には、被災者の方から「もうやめてくれ！」と言われたケースもあると聞いていて、正直不安でしたね。実際に行ってみると、原発の影響のある地域と津波の被害を受けた場所では状況が大きく違うことを実感しました。被災した子どもたちと話す前に「こちらからは決して津波の話は聞かないで」と言われたことを覚えています。

岸良　阪神淡路大震災の時、自分は海外留学中でした。渡航先のテレビに映し出された映像に驚いていましたが、帰国した後に、日本フィルが音楽を届ける活動をしていたと知りました。そのことが頭にあり、最初に東日本大震災の被災地に行ったトロンボーンの伊波さんにも背中を押されて、南相馬に行くことになりました。そこには放射能の問題があり、子どもたちは外で遊べません。そんな彼らが、楽器を持っているときだけは笑っているという話に胸を打たれました。彼らの「また来てね」という言葉に応えたいという思いもあり、たびたび訪問を続けています。

橋本　私も阪神淡路大震災の時は参加できませんでした。東日本大震災の後もなかなか自分自身の気持ちや状況が落ち着かず、しばらくたってようやく落ち着きを取り戻してきて、被災地の状況を知りたいという気持ちもあり、被災地の活動に参加しました。よく覚えているのは、いわきで臨時に設置されたサテライト校の吹奏楽部を教えに行った時に、初めて原発の影響で家族が離散してしまっている子どもと会った時のことです。東京で反原発のキャンペーンが吹き荒れる中、そこで暮らす人々の複雑な状況を目の当たりしました。

富樫　避難所の中でも、内部で自治が行われているところは非常にスムーズにやることができました。今後そうしたコミュニティの存在が重要になってくるのだろうと思います。現場でのコーディネーターの役割は非常に大きいし、とても助けられました。

目の当たりにした被災地の現実

松本　最初に被災地を訪問した時、とても避難所の中で演奏する雰囲気ではありませんでしたが、会場によっては、せっかく来てくれたので、と演奏環境を作ってくれる場合もありました。地元のスタッフの方々の理解があるところについては長く続いていますね。避難所の生活空間の中で演奏するのは大変なことが多く、実際、大きな音をたてられたりすることもありました。そうかと思えば、布団に潜っていた人が聞きに出て来て、最後はお礼を言われたりすることも。そのときは、演奏してよかったなと思いましたね。全員が喜んでくれなくても、そういう人がいることが本当にありがたかったです。そういう気持ちに、なんとか応えたいと思って演奏していましたね。

山田　体育館の玄関先で演奏した時のことです、最初は嫌な顔をしていた方が、いつの間にか聞き入って、涙を流してくれたりしたことがありました。

岸良　避難所でのつらい話もたくさん聞きました。毛布の取り合いになったり、ペットが子どもに噛みついたり。保健室にも薬がないのでカーテンを包帯にしている状況もありました。また私は原一中に継続的に行くことで、子どもたちや地域の状況が変わっていくのがよくわかりました。中には家族を津波で失った子もいました。

松本　印象的だったのは、最初の訪問の時は、『川の流れのように』は水に関わるので厳しいという意見を頂きました。海、水に関わるものは一切駄目、ということもありました。それから1年ほどたって『斎太郎節』を演奏した時に、「元気が出る」と喜んでもらえたのが印象的でした。その曲はそれから本当に何度も繰り返し演奏しました。

岸良　トロンボーンについては「ソング・フォー・ジャパン」というオランダ発のプロジェクトがとてもありがたかったですね。私もこれに参加しましたが、世界中が応援してくれているということが感じられました。

震災から6年。これからの活動に思うこと

松本　２０１７年3月で震災から6年ですが、阪神淡路大震災では5年ですべての避難所がなくなり、その最後まで神戸に通い続けました。5年でほぼ立ち直ることができたわけです。一方で東北の場合は、何度行っても津波の後に生活空間が戻っていない。海岸線に高い壁が立っているだけです。それがすごくショックだし、景観も変わってしまっている。復興の実感を持てないし、多くの方が元々の場所から離れたままでいます。仮設で一生暮らすしかないのか、という声を聞くととても複雑で、辛い気持ちになります。

富樫　震災から5年目の２０１６年は、復興しつつある地域を訪問するというテーマで前向きなイベントもすることができました。自治体のスタッフの方がとても苦心してくれたこともありました。復興のキーマンの方々が

音楽の力を信じてくれたこと、良い場面がたくさん作れたことは良かったなと思います。そこには日本フィルが九州でやってきた経験がずいぶんと活きていると思います。

中川　顔の見える活動を続けていくことが大事だと思います。室内楽で行くことにも意味があるので、そこはこだわっていきたいと思いますね。老人福祉施設等への訪問の機会が多いのですが、震災直後に比べて訪問してくれる団体が減ってきていて、忘れられつつあると感じているようです。さらに、今後、同じことを繰り返していてよいのか、ということも考えています。2016年5月に南相馬市でワークショップを行いましたが、子どもたちの団結力、エネルギーはこんな状況でも健在なんだと驚きました。今後、彼らに何か形にする目標を設定してあげるとよい気がします。例えば、日本フィルと一緒にステージできちんと責任を持たせて共演するとか。また、コーディネーターの方たち同士がネットワークを構築し、情報交換をしていくことができると、さらに実り多い関係になると思います。施設同士はなかなかコミュニケーションが取れていない部分もあるようですし、日本フィルがそうしたことのお手伝いができるとよいなと思います。

岸良　いずれオーケストラで被災地に行きたいと思います。やはりオーケストラとしてそこは外せないと思いますね。

山田　当時から「今、被災地の人々に音楽が必要なのか?」という疑問を常に持ってもいます。個人で三春に帰省した時、「東京は冷たいよな」という声をよく耳にしました。一方では「もうほっておいてほしい」という声もあったり、場所により状況は様々です。被災地のニーズや状況を知ることが大事だと思っています。一人の人間として被災地の応援は今後も続けていきたいと思っています。

橋本　僕の率直な気持ちは、求めてくれる限りはぜひ音楽を届けに行きたいという思いです。どこでも、要望がある限りは訪問していきたいと思います。同時に被災地の状況を自分自身がよく見て、知りたいとも思っています。被災地に行って、僕らが現地の生の声を色々と聞けることも大変意味あることですね。また、今回我々が被災地で見聞きしたことが、次にもし大きな災害が起こった時に、役立てていけるかもしれないと思います。

松本　コンサートのみでなく交流する場を持つことも、とても良い機会だと思っています。僕は、音楽は「心の扉を開ける鍵になる力」を持っているように思います。言えなかったことが言えて、その結果心が軽くなったりする、そうした力を実感しています。音楽の聴き方は人それぞれですが、これからも皆さんの心の扉を開ける鍵になれるといいですね。

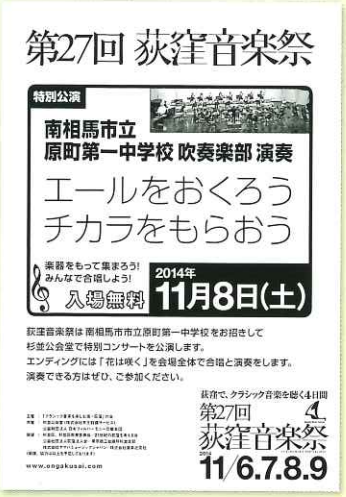
付録 活動の記録

ローム・被災地支援コンサート
ROHM
日本フィルメンバーによる
「動物の謝肉祭」
1月21日(土)「小中学生のための」(13:30開演(13:00開場))
22日(日)「親子のための」(13:30開演(13:00開場))
※未就学児入場できます。
久慈市文化会館(アンバーホール)
大ホール
～ようこそサンニーサーン人間国の音楽動物園へ～
♪入場料無料(整理券が必要です)
※入場整理券は、アンバーホールチケットセンター、おらっーあなどで配ります。
主催：財団法人日本フィルハーモニー交響楽団　久慈市教育委員会
協賛：公益財団法人ロームミュージックファンダーション　協賛：ローム株式会社
問い合わせ先：久慈市文化会館アンバーホール　(☎0194-52-2700)

音楽のおくりもの
6月19日(木)　[開演]午後7時より
[場所]リアスホール　大ホール　※開場は午後6時30分より
金管五重奏 日本フィルによる金管五重奏のコンサートを実施します。
《入場無料》
[プログラム]
●作曲者不詳：沖縄民謡
●アンダーソン：
トランペット・ホルンのための「トランペット・ソロ」
●ピアソラ：リベルタンゴ(ホルン・ソロ)
●フィルモア：
ラッサス・トロンボーン(トロンボーン・ソロ)
●フォーラー：ボヘミヤのC(クーパ・ソロ)
●フェスター：神無月
●バルボトゥ：シャンソリアー　ほか
[日本フィル金管五重奏団]
羽奏者
トランペット　緒本洋
トランペット　羽室琢
ホルン　日髙剛
トロンボーン　氏家史人
チューバ　都宝和大
オフィシャル・ウェブサイト http://www.iasourahi.or.jp
お問い合わせ先：リアスホール　☎0192-26-4478
主催：日本フィルハーモニー交響楽団
共催：大船渡上本スコ組合
後援：三菱UFJニコス株式会社
：日本コオスコ国際放送部
：大船渡市教育委員会(中川原中)

音楽のおくりもの
水族館コンサート
4月にリニューアルした「もぐらんぴあ」での初めての「ウクラッツウコンサート」。
背景に広がる水槽の前で奏でられる金管楽器の華やかな音色をお楽しみください。
[プログラム] アンダーソン/トランペット・ホルンのための「トランペット・ソロ」
ピアソラ　/リベルタンゴ(ホルン・ソロ)
ディズニー・メドレー　等
日時／平成28年6月18日(土)
開演／14:00～
場所／久慈地下水族科学館もぐらんぴあ
特設ステージ(大型の海水槽付近)
入場料／コンサートは無料
当日券は、もぐらんぴあの入場チケットが必要になります。
一般大人700円、高校・大学生500円、小・中学生300円、幼児無料
出演者／日本フィル金管五重奏団
トランペット　緒本洋　/　トランペット　松本亜希　/　ホルン　矢野貴文
トロンボーン　岸田周樹　/　チューバ　都宝和大
主催／日本フィルハーモニー交響楽団　後援：三菱UFJニコス株式会社　協力／久慈市おさかなふれあいセンター
問合先／久慈市観光交流課：0194-52-2123、久慈市教育委員会文化課：0194-52-2700

Partner Special
音楽のおくりもの
復興支援プロジェクト
日本フィルハーモニー交響楽団
弦楽四重奏
×
OMODOC ワークショップ
8月
7日　北上中学校アッセンブル・ホール
17:00　手づくり楽器ワークショップ
18:30　弦楽四重奏コンサート開演
8日　川辺りの自然遊あそびえDaDa
13:00　手づくり楽器ワークショップ
14:30　弦楽四重奏コンサート開演
9日　こ～ふのお宝　いしのまき
12:30　手づくり楽器ワークショップ
14:00　弦楽四重奏コンサート開演
入場無料！
くりしくはうち塗へ♪


第27回 荻窪音楽祭
特別公演
南相馬市立
原町第一中学校 吹奏楽部 演奏
エールをおくろう
チカラをもらおう
楽器をもって集まろう!
みんなで合唱しよう!
入場無料
2014年
11月8日(土)
荻窪音楽祭は南相馬市立原町第一中学校をお招きして
杉並公会堂で特別コンサートを公演します。
エンディングには「花は咲く」を会場全体で合唱と演奏をします。
演奏できる方はぜひ、ご参加ください。
荻窪で、クラシック音楽を楽しむ4日間
第27回
荻窪音楽祭
11/6.7.8.9
www.ongakusai.com

東日本大震災復興祈念事業
カンタータ
大いなる故郷
石巻
第1部[交響楽]
2013
6/23 SUN
PM2:00開演(開場1:00)
入場料
A席　2,000円
B席　1,500円
石巻市総合体育館

Partner Special 音楽のおくりもの
日本フィルハーモニー交響楽団「被災地に音楽を」
親子で楽しむ
[動物の謝肉祭]コンサート
ようこそ！サンニーサーン人間国の音楽動物園へ！
11月3日(日・祝)
開場 14:30　開演 15:00
会場／福島テルサ
入場無料
主催：公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団　協賛：三菱UFJニコス株式会社
協賛：福島市教育委員会
お問合せ／日本フィルハーモニー交響楽団　03-5378-6311(平日10時～18時)

Partner Special
音楽のおくりもの
日本フィルハーモニー交響楽団のメンバーによる
弦楽四重奏
ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロが奏でる美しくやさしいサンドイン
心も体もつつまれ、耳に音楽が広がる、一緒にひすきみましょう。
音楽を楽しめるコンサートです。お気軽にお越しください!
9月19日(水)
【開場】午後1時15分
【開演】午後1時30分～2時30分
【場所】福島市立平野中学校体育館《入場無料》
[プログラム]
● モーツアルト：ディベルティメント
● 作曲 時代：日本国歌による組曲
「百年の子守唄」「沖縄地方のあそび唄」
「広島地方のてまり唄」
● ビートルズ：「ヘイ・ジュード」「イエスタデイ」「ミッシェル」
● ハイドン：弦楽四重奏曲「ひばり」
● みんなで歌おう「百年の子守唄」
[日本フィル弦楽四重奏団]
ヴァイオリン/三本真都
ヴァイオリン/辻野綾子
ヴィオラ/山下清三(福島県郡山市出身)
チェロ/原敬純郎(福島県郡山市出身)
日本フィルハーモニー交響楽団
1956年6月創立。
「音楽を通して文化を発信する」日本フィルは、国の内外を問わず活発な演奏活動を行う(オーケストラ・コンサート)、音楽とのお楽しい出会いをはじめ(エデュケーション・プログラム)、音楽の力で様々なコミュニティに貢献する(ソーシャル・アクティビティ)ということのもとに活動を行っています。
ロンドンの伝統、音楽指揮者アレックッシ・ルサレッタ氏に指揮者に迎えて(プロフィッテ交響楽団音楽界プロジェクト)に取り組んだ後、作曲家ラヴィンクがセロロンの唯一のレーコンサートを9月中旬に開催しています。
昨日の時間から年間一定、世界各地の音楽とエデュケーションイベントを中心にした活動を開始。さらに2012年9月から山田町教育委員会(音楽)として、ふる郷実況のミュージック・パートナーとして活動をこなしてきました。
2011年4月より、東北から日本全土へ、そして世界へ(東北)(東京)に音楽を与え、同じ人々に対する音楽を実践。
オフィシャル・ウェブサイト http://www.japanphil.or.jp
問い合わせ先：(電話)0000(00)000

Partner Special
音楽のおくりもの
日本フィルハーモニー交響楽団のメンバーによる
クラリネット三重奏
クラリネットが奏でる美しくやさしいサンドイン
心も体もつつまれ、耳に音楽が広がる、一緒にひすきみましょう。
音楽を楽しめるコンサートです。お気軽にお越しください!
♪お家とお友子そこ開放してお待ちしております。♪
3月21日(木)
【開演】午後4時より ※開場は開演の30分前
【場所】志津川中学多目的ホール
《入場無料》
[プログラム]
● モーツアルト/ディヴェルティメント
● モーツアルト/
音楽のおくりもの
ディヴェルティメント
● ファンメル：三重奏曲
● 日本の歌曲など
[日本フィル
クラリネット三重奏団]
伊藤・真理　日本フィル弦楽奏者
竹内・美穂
中田・雅也
日本フィルハーモニー交響楽団
1956年6月創立。
「音楽を通して文化を発信する」日本フィルは、国の内外を問わず活発な演奏活動を行う(オーケストラ・コンサート)、音楽とのお楽しい出会いをはじめ(エデュケーション・プログラム)、音楽の力で様々なコミュニティに貢献する(ソーシャル・アクティビティ)ということのもとに活動を行っています。
2011年4月より、東北から日本全土へ、そして世界へ(東北)(東京)に音楽を与え、同じ人々に対する音楽を実践。
オフィシャル・ウェブサイト http://www.japanphil.or.jp
問い合わせ先：(電話)0000(00)000

クリスマス会
日時☆12月11日　18:00～18:30
場所☆山田町コミュニティセンター
内容☆みんなでワイワイ!!!
クリスマスゲーム
オーボエと弦楽四重奏コンサート
サンタさんが来た、プレゼントがもらえるかな？

● 地域別開催実績

開催地域	コンサート	演奏指導
岩手県	59	8
宮城県	54	4
福島県	49	19
山形県	1	1
茨城県	4	0
埼玉県	3	0
東京都	7	0
計	177	32

これまでに、延べ約18,000人の皆さまに音楽をお届けしました。

岩手、宮城、福島、茨城各県の被災地を訪問するとともに、山形や関東に避難している方々も対象としています。

● 年別開催数

	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	計
コンサート	50	32	25	32	14	20	173
演奏指導 ワークショップ	3	7	10	6	6	4	36

※時間の経過による被災地の状況を勘案し、内容を変化させながら活動を継続してきました。
2017年においても20回程度の実施を計画しています。

● 会場種類別開催数

避難所	仮設住宅 集会所	小中高校	高齢者施設	市町村施設	コンサートホール	その他
29	10	87	8	40	18	17

※コンサートや演奏指導は基本的に現地からの要請に基づき実施しています。
開催日、開催場所などの決定については、現地のコーディネーターの方々のご協力をいただいています。

●「被災地に音楽を」実施一覧 ①（2011年4月6日～2012年8月8日）

開催日		会場				編成
2011年	4月6日	福島県	二本松市	・東和文化センター		Vn・Va・Tb
	5月4日	福島県	会津若松市	・文化センター		弦楽四重奏
	5月6日	埼玉県	加須市	・騎西小学校（福島双葉町児童含む）		弦楽四重奏
	5月8日	宮城県	名取市	・増田西小学校（避難所）	・閖上地区日和山	Vn・Kb
				・文化会館（避難所）		
	5月9日		気仙沼市	・階上中学校（避難所）	・松岩公民館（避難所）	
				・面瀬中学校（避難所）		
	5月10日		石巻市	・石巻高校（避難所）	・湊小学校（避難所）	
				・門脇中学校（避難所）	・石巻中学校（避難所）	
				・北上子育てセンター		
	5月12日	埼玉県	加須市	・騎西中学校（福島県双葉町の生徒を含む）		金管五重奏
	6月4日	岩手県	花巻市	・山の神温泉「幸迎館」（避難所）		Vn・Vc
	6月5日		釜石市	・甲子中学校（避難所）		
	6月6日		大船渡市	・リアスホール（避難所）		
	6月5日	福島県	三春町	・田園生活館（避難所）		弦楽四重奏
	6月6日			・町営体育館（避難所）	・三春小学校	
	6月25日	福島県	南相馬市	・鹿島保険センター（避難所）		弦楽四重奏
	6月26日			・原町第二中学校（避難所）	・道の駅南相馬（避難所）	
				・原町第一小学校（避難所）		
	6月25日	福島県	二本松市	・JICA 研修センター	・あだたら体育館（避難所）	Cl・Ob・Fg
	6月26日		大玉村	・フォレストパークあだたら		
	7月10日	宮城県	南三陸町	・志津川高等学校	・ホテル観洋（避難所）	管楽合奏
	7月11日			・志津川中学校		
	8月6日	宮城県	気仙沼市	・日本バプテスト教会	・小泉中学校（避難所）	弦楽四重奏
				・階上小学校（避難所）		
	10月4日	宮城県	東松島市	・鳴瀬第一中学校		弦楽四重奏
			石巻市	・北上中学校		
	10月5日			・石巻専修大学学生ホール	・「あとりえ DaDa」	
				・追分温泉（避難所）		
	10月6日		仙台市	・泉白陵会（介護施設）		
	10月7日			・愛泉会（障害者施設）		
	10月20日	福島県	いわき市	・江名中学校（コンサート）	・下神白第一集会所	弦楽四重奏
				・江名中学校（クリニック）		Tb
	10月21日			・内郷第二中学校		弦楽四重奏
	10月26日	茨城県	大洗町	・南中学校	・第一中学校	弦楽四重奏
	11月21日	岩手県	陸前高田市	・第一中学校		弦楽四重奏
	11月22日		花巻市	・山の神温泉「幸迎館」		
	11月24日	福島県	福島市	・みず和の郷（介護施設）	・飯野学習センター	弦楽四重奏
	11月25日			・松陵中学校	・南体育館（研修室）	
2012年	1月20日	岩手県	久慈市	・山村文化交流センター	・県立久慈病院	弦楽五重奏
	1月21日			・文化会館（小中学生対象コンサート）		管弦楽合奏・Pf
	1月22日			・文化会館（親子対象コンサート）		
	3月27日	福島県	南相馬市	・原町第一中学校		Fl・Cl・Tp・Hr・Tb
	3月28日		伊達市	・桃陵中学校		
	3月29日		南相馬市	・鹿島中学校		
	3月30日			・原町第一中学校		
	3月28日	福島県	三春町	・三春小学校		Vn・Va・Vc・Tb
	3月28日	埼玉県	加須市	・騎西コミュニティセンター		弦楽四重奏
	5月20日	宮城県	南三陸町	・志津川中学校	・ホテル観洋ロビー	弦楽四重奏
				・さんさん商店街		
	5月21日			・南方仮設住宅集会所		
	6月17日	山形県	米沢市	・八幡原体育館		木管五重奏
				・市体育館ほか		Cl・Ob・Fg・Hr
	8月7日	宮城県	石巻市	・北上中学校		弦楽四重奏
	8月8日			・同校体育館（岡崎市立城北中）	・「あとりえ DaDa」	

●「被災地に音楽を」実施一覧 ②（2012年8月9日～2014年6月19日）

開催日		会場				編成
2012年	8月9日	宮城県	石巻市	・「こ～ぷのお家 いしのまき」		弦楽四重奏
	8月26日	宮城県	南三陸町	・さんさカフェ出版会		Tb・Tu
	9月19日	福島県	福島市	・平野中学校	・市商工会（福島市音楽堂）	弦楽四重奏
	9月20日			・松川工業団地（第一仮設住宅集会所）	・松川工業団地（第二仮設住宅集会所）	
	9月21日			・飯野中学校		
	9月30日	東京都	江東区	・カトリック潮見教会		金管五重奏
	10月24日	福島県	南相馬市	・鹿島小学校	・農家民宿いちばん星	弦楽四重奏
	10月25日			・南相馬市民文化会館	・同左ウェルカムコンサート	
	10月26日			・三春小学校		
			いわき市	・江名中学校（コンサート）		弦楽四重奏・Tb
	10月27日			・江名中学校（クリニック）		Tb
				・内郷第二中学校		弦楽四重奏
	12月14日	茨城県	茨城町	・明光中学校	・梅香中学校	金管五重奏
	12月15日	福島県	いわき市	・双葉高校、双葉翔陽高校、富岡高校サテライト校（クリニック）		金管五重奏・Cl・Per
			小名浜市	・小名浜市民会館		
2013年	3月3日	宮城県	石巻市	・石巻市役所市民サロン		弦楽四重奏
	3月4日			・「こ～ぷのお家 いしのまき」	・女川野球場仮設住宅	
	3月5日			・みなと荘		
	3月21日	宮城県	南三陸町	・志津川中学校（コンサート）		Cl三重奏
				・志津川中学校（クリニック）		Cl
	3月22日			・南方仮設住宅集会所		Cl三重奏
	4月3日	福島県	南相馬市	・原町第二中学校		管楽合奏
	4月4日			・鹿島中学校		
	4月5日			・石神中学校		
	4月6日			・原町第一中学校		
	5月27日	岩手県	下閉伊郡	・田野畑村　田野畑中学校	・田野畑アズヴィーホール	弦楽四重奏
	5月28日			・普代村うねとり荘	・普代中学校	
	5月29日		九戸郡	・野田村　野田小学校		
	6月16日	岩手県	大船渡市	・宮田応急仮設住宅		弦楽四重奏
	6月17日			・気仙光陵支援学校	・上平応急仮設住宅	
	6月18日			・御喜来小学校		
	6月23日	宮城県	石巻市	・石巻市総合体育館		管弦楽合奏
	10月22日	福島県	南相馬市	・原町第一中学校		管楽合奏
	10月23日			・高平小学校		
	10月24日			・原町第三小学校・金房小学校・福浦小学校・鳩原小学校		
	10月25日			・原町第二小学校		
	11月15日	岩手県	陸前高田市	・「朝日のあたる家」		管楽合奏
	11月16日			・第一中学校・高田東中学校		
	11月17日			・陸前高田高校		
	11月29日	岩手県	久慈市	・宇部小学校	・久慈中学校	管楽合奏
	11月30日			・長内中学校・夏井中学校	・アンバーホール	
	12月1日		洋野町	・種市中学校・大野中学校	・種市中学校	
	12月9日	東京都	江東区	・潮見教会		弦楽四重奏
2014年	1月14日	福島県	三春町	・三春交流館（まほら）		弦楽四重奏
	4月3日	福島県	南相馬市	・原町第三中学校		管楽合奏
	4月4日			・石神中学校		
	4月5日			・原町第一中学校		
	4月28日	宮城県	南三陸町	・登米第二仮設住宅		弦楽四重奏
	4月29日		石巻市	・野球場仮設住宅		
				・「こ～ぷのお家 いしのまき」		
	4月30日		気仙沼市	・NPOオレンジネットワーク		
	6月17日	岩手県	大船渡市	・第一中学校		管楽合奏
	6月18日			・大船渡東高等学校		
	6月19日			・さんりくの園		
	6月19日			・リアスホール		

●「被災地に音楽を」実施一覧 ③ (2014年6月20日～2016年12月13日)

開催日		会場				編成
2014年	6月20日	岩手県	大船渡市	・宮田応急仮設	・大船渡高等学校	室内合奏団
	7月6日	宮城県	南三陸町	・志津川高等学校		Tb・Per
	7月7日			・志津川高等学校		Tub
	7月14日	岩手県	釜石市	・唐丹中学校	・小佐野公民館	弦楽四重奏
	7月15日			・旧釜石商業高校体育館	・カトリック釜石教会	
	7月16日			・鵜住居小学校・東中学校	・栗林小学校	
	11月2日	宮城県	名取市	・名取市文化会館		弦楽四重奏
	11月3日	福島県	福島市	・福島テルサ		管弦楽合奏
	11月4日	宮城県	東松島市	・東松島コミュニティセンター		管弦楽合奏
	11月8日	東京都	杉並区	・荻窪音楽祭		吹奏楽合奏
	11月28日	岩手県	宮古市	・第一中学校		管楽合奏
	11月29日			・港南中学校	・千徳小学校	
	11月30日			・宮古小学校（クリニック）	・宮古小学校（コンサート）	
	12月1日			・田老町サポートセンター		
	12月9日	岩手県	釜石市	・東中学校		弦楽四重奏
	12月10日			・祥雲支援学校		
	12月15日	福島県	伊達市	・保原小学校	・保原町商工会	弦楽四重奏
	12月20日	東京都	江東区	・カトリック潮見教会		弦楽四重奏
	12月23日	福島県	南相馬市	・南相馬市民文化会館		弦楽四重奏
2015年	5月1日	福島県	南相馬市	・原町第二小学校（コンサート）	・原町第二小学校（クリニック）	金管五重奏
	5月2日			・原町第一中学校（クリニック）		
	5月3日			・原町第一中学校（クリニック）		
	5月29日	岩手県	山田町	・県立山田高校		弦楽四重奏
	5月30日			・町立北小学校	・介護事業所「恵みの里眺望」	
	5月31日			・いきがいデイサロン	・いっぽいっぽ岩手	
	6月19日	岩手県	宮古市	・高浜小学校	・宮古恵風支援学校	弦楽四重奏
	6月20日			・山口公民館	・かがやきデイサロン	
	9月4日	福島県	南相馬市	・同慶寺		金管五重奏
	9月5日			・原町第一中学校、原町高等学校		
	9月6日			・南相馬市民文化会館		
	11月8日	東京都	杉並区	・荻窪音楽祭		吹奏楽合奏
	11月28日	岩手県	大船渡市	・リアスホール		動物の謝肉祭
	11月30日	福島県	南相馬市	・鹿島生涯学習センター		動物の謝肉祭
	12月19日	東京都	江東区	・カトリック潮見教会		金管五重奏
2016年	4月2日	福島県	南相馬市	・同慶寺		弦楽四重奏・Cl
	4月3日			・原町第一中学校		
	5月6日	福島県	南相馬市	・原町第一中学校（ワークショップ）		マイケル・スペンサー
	5月7日					弦楽四重奏
	6月16日	岩手県	久慈市	・アンバーホール（クリニック）		金管五重奏
	6月17日			・アンバーホール（コンサート）		
	6月18日			・久慈高校	・もぐらんぴあ	
	8月26日	宮城県	山元町	・花釜区交流センター		金管五重奏
	8月27日			・山下中学校		
				・山元町こどもセンター		管楽合奏
	8月28日		名取市	・名取市増田児童センター		
	10月31日	宮城県	南三陸町	・南三陸病院	・慈恵園	弦楽四重奏
	11月1日		石巻市	・オーリンクハウス	・川の上・百俵館	
	11月2日			・「こ～ぷのお家 いしのまき」		
	11月13日	東京都	杉並区	・荻窪音楽祭		吹奏楽合奏
	12月11日	岩手県	山田町	・山田町コミュニティセンター		弦楽四重奏・Ob
				・いっぽいっぽ岩手		
			宮古市	・宮古市民会館		
	12月12日			・田老サポートセンター		
	12月13日			・恵風支援学校	・総合福祉センター	

「被災地に音楽を」をご支援いただいた皆さまに心より御礼申し上げます。

- 呼びかけに応じていただいた国内外の多くの個人の皆さま
- 株式会社三菱東京UFJ銀行、三菱UFJニコス株式会社、ローム株式会社、公益財団法人ローム ミュージック ファンデーションはじめ多くの法人・団体によるご支援

日本フィルの「被災地に音楽を」を応援してください

〈お願い〉

- 日本フィルメンバーを被災地に派遣するための交通費、宿泊費など必要経費のための募金にご協力ください。
- 演奏できる会場、場所についての情報を提供してください。
- コーディネートをしてくださる団体、個人を募集します。

〈お振込先〉

- 郵便振替　00160−6−789789
  加入者名　日本フィル「被災地に音楽を」
- 銀行振込　三菱東京UFJ銀行　高円寺支店
  口座番号　普通　0065261
  口 座 名　日本フィル被災地に音楽を

当団は「特定公益増進法人」の許可を受けております。個人による寄付の場合も「特定寄付」として所得額から一定の算式によって控除できます。(所得税法施行令217条1項第2条また第3号による)なお、銀行振込で申告にかかわる必要書類を希望される場合は、お振込後、日本フィル宛にご連絡をお願いいたします。

編集後記

「被災地に音楽を」の活動が5年を過ぎたころ、「まだやるの?」「いつまで続けるの?」という問いかけが、ぽつぽつ寄せられました。それは「なぜやめるの?」という問いにつながりました。

人々の記憶は鮮明さを失い、支援活動も少なくなりました。しかし、たった6年です。わたしたちは「また来てほしい」「また聴きたいね」という声があれば、愚直に東北に音楽を届け続けます。大きな悲しみを背負ったその土地で、人々が集まって再び笑いあう。

この小さな火をひとつ、またひとつ灯し、それが消えないよう大切に守り続けることがいま、私たちにできることなのかもしれないと思います。

編集担当一同

「被災地に音楽を」
～東日本大震災 被災地での6年間の活動記録～

発行日　2017年3月1日
発　行　公益財団法人 日本フィルハーモニー交響楽団
〒166-0011東京都杉並区梅里1-6-1
TEL 03(5378)6311　Fax 03(5378)6161
URL：http://www.japanphil.or.jp

2014年4月 雄勝ローズファクトリーガーデン

石巻市雄勝町でのコンサート開催にご協力いただいた、全壊した雄勝小学校の先生が、被災した方々が故郷とつながる場として、花畑を作る物語を思い描きました。世界中から花の苗が集まり、立派なバラ園ができあがりました。花を増やし、人が集い、支援が集結する、そのプロセスに先生は希望を見出しました。それが雄勝ローズファクトリーガーデンです。